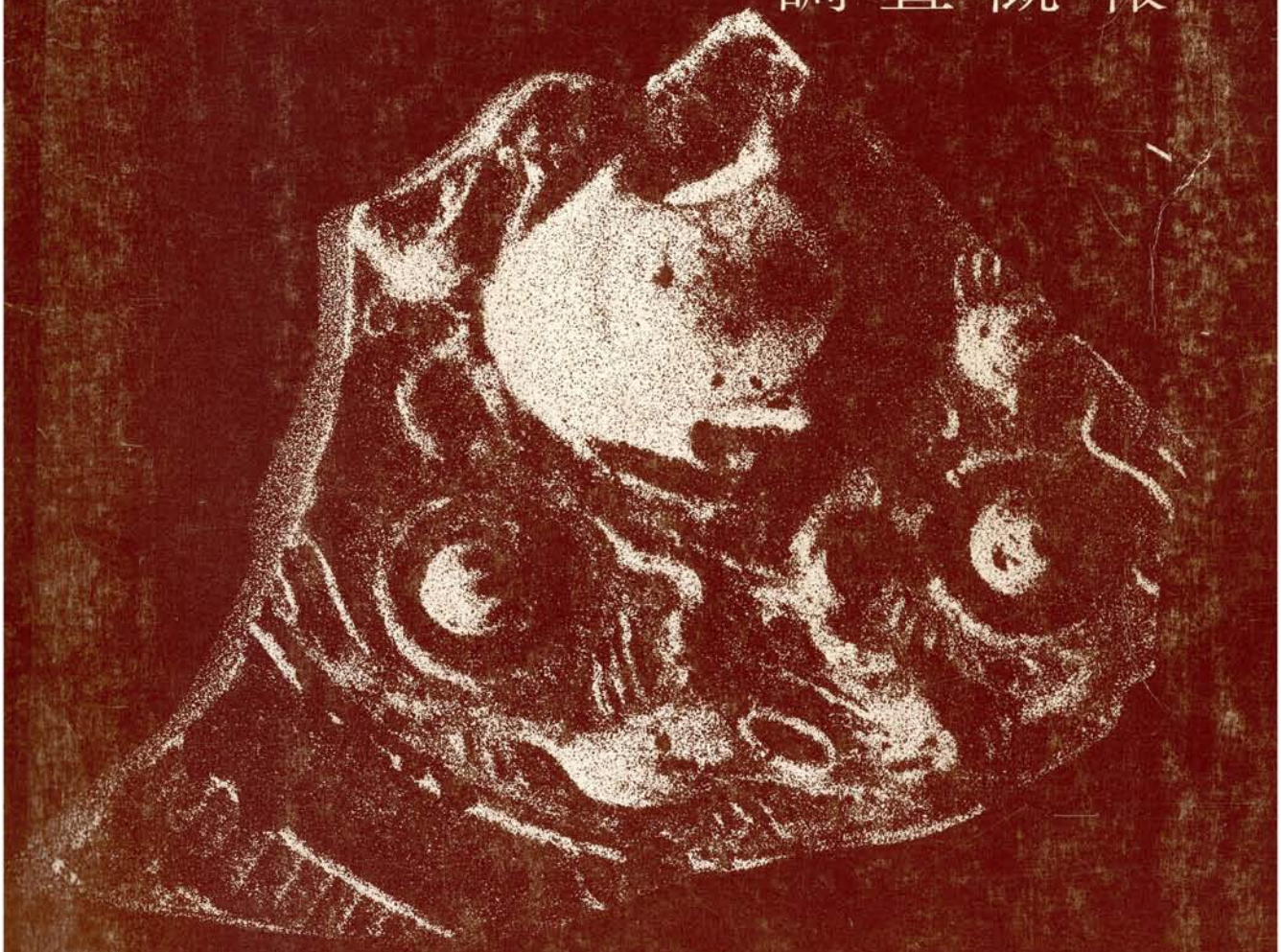
福　岡　市

野方中原遺跡

調査概報



福岡市埋蔵文化財調査報告書　第30集

福　岡　市　教　育　委　員　会

1　9　7　4

12492

福　岡　市

野方中原遺跡

昭和48年度調査概報

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集—

福岡市教育委員会

1974年

福岡市図書館
NO.16984
1.10.15
福岡市文化財センター

序

近年，福岡市は急速な都市化の傾向を強め住宅地の確保は急務とされていますが，今回の野方中原遺跡の緊急発掘調査もこのような社会的要請にもとづくものです。

従来この地域における考古学的調査が不充分で不明な点が多かったため，遺跡の性格，範囲を確認するため，全域にわたる予備調査を実施いたしました。

予備調査の結果，弥生終末期から古墳初頭期にかけての住居址，石棺墓，甕棺墓，二つの環溝を包括した大集落址であることが判明いたしましたので，施主の福岡県労働者住宅生活協同組合のご協力を得まして，文化庁，福岡県と協議し，保存を前提とした遺構のプラン確認のための緊急発掘調査を実施いたしました。

本調査は，市文化財担当者の諸氏が中心となって積極的に推進していただいたわけですが，今回，国の史跡として申請することができましたのも，福岡県労働者住宅生活協同組合を始め，調査指導員の方々や，地元の皆様方にいたるまで数多くの人々のご協力と文化財に対する深い御理解があったことに対し，深甚の敬意を表するものであり，関係機関として喜び深いものがあり，今後は環境の整備，顕彰に努める所存です。

本報告書が研究資料の一つとして御活用いただければ幸いです。合せて多くの人々の手にわたり，年々失われゆく埋蔵文化財に対する一層の御理解と御協力を願ってやみません。

福岡市教育委員会

教育長　正　木　利　輔

例　言

1．本書は福岡県労働者住宅生活協同組合の宅地造成にともない，福岡市教育委員会が昭和48年度国庫補助事業として実施した野方中原地区の埋蔵文化財発掘調査の概報である。

2．遺跡の発見から発掘調査の終るまで文化課技術吏員，調査員の全員が分担協力して行なった。

3．本書の執筆はⅠ～Ⅳ，Ⅵ章を柳田純孝があたり，Ⅴ章には藤原宏志氏(宮崎大学農学部農作業管理学)の原稿をいただき掲載した。

plant opalの分析は古代植生推定の有力な方法の一つと考えられ，考古学への導入と今後の研究の成果に注目したい。

4．本書の挿図の実測図は折尾学，島津義昭，柳沢一男，柳田が作成・整図したが，一部吉原滝雄氏（明治大学聴講生），武末純一氏（九州大学大学院）の協力によるものがある。

5．発掘現場の写真は柳田（5～6月），塩屋勝利（8～9月），二宮忠司（9～11月），柳田（12～1月）が主として行ない，この他松村博道，折尾，柳沢，島津が撮影したものがある。

6．遺物写真は全て小水博明氏(九州産業大学写真学科)の撮影による。

遺物は極力縮尺を統一するように努めた。

遺物写真のうち玉類は2倍(*Fig.*36)，鏡・小さな石器・自然遺物は実大(*Fig.*37, 44, 48－2)，石器・鉄器は½，土器は原則として⅕に統一するように努めた(*Fig.*39－1. *PL.*1, *PL.* 2－1～24)。但し，小型のものについては須恵器は⅖(*Fig.* 42)，*PL.* 2－25～35は⅓としたものがある。

7．表紙は山田英史氏のレイアウトによる。

8．本書の編集は柳田が担当した。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の環境と立地 …… 1
1　遺跡の位置 …… 1
2　周辺の遺跡 …… 3
3　遺跡の立地 …… 5
Ⅱ　調査の経過 …… 6
1　遺跡の発見 …… 6
2　試掘調査 …… 7
Ⅲ　調査の概要 …… 9
1　溝の調査 …… 10
(1)　A　溝 …… 10
(2)　B　溝 …… 22
2　住居址の調査 …… 25
(1)　D 5 区 …… 26
(2)　D 6 区 …… 28
(3)　E 5 区 …… 30
(4)　E10区 …… 31
3　墓域の調査 …… 33
(1)　遺構の配置 …… 34
(2)　箱式石棺 …… 35
(3)　甕棺・壺棺 …… 41
Ⅳ　出土遺物 …… 42
1　土　器 …… 42
(1)　溝の土器－弥生式土器－ …… 42
(2)　住居址覆土中の土器－古式土師器－ …… 42
(3)　住居址覆土中の土器－須恵器－ …… 43
2　土器の文様 …… 44
3　石　器 …… 45
4　鉄　器 …… 48
5　自然遺物 …… 49
Ⅴ　溝の土壌分析 …… 50
1　野方中原遺跡土壌の plant opal 分析 …… 50
Ⅵ　まとめ …… 52
1　溝 …… 52
(1)　A溝について …… 52
(2)　B溝について …… 52
2　住居址 …… 54
3　箱式石棺の年代 …… 57
4　調査の問題点 …… 60

挿　図　目　次

巻頭写真　野方中原遺跡周近航空写真

Fig. 1　遺跡全景（叶岳中腹　南西方向から）…… 1

Fig. 2　早良平野の地形と遺跡（縮尺1／50000）…… 2

Fig. 3　遺跡遠景（早良平野と博多湾をのぞむ　南西から）…… 3

Fig. 4　遺跡遠景（後方は背振山系　北西から）…… 4

Fig. 5　遺跡付近地形図（縮尺1／6000）…… 5

Fig. 6　遺跡発見状況（Ａ溝　２・３　Ｂ５区dT　48年５月）…… 6

Fig. 7　試掘調査風景（後方は飯盛山　北から）…… 7

Fig. 8　Ｅ10区調査風景（48年６月）…… 8

Fig. 9　発掘調査風景（Ｆ５区２Ｔ　48年８月）…… 9

Fig. 10　Ａ溝全景（１西から　２東から）…… 10

Fig. 11　Ａ溝調査風景（Ｂ５区ａＴ　48年９月）…… 11

Fig. 12　Ｚ５区ｅＴ～Ａ５区ｃＴ遺物出土状態（49年１月）…… 12

Fig. 13　Ａ５区ａＴ～ｃＴ全景（１発掘前　２発掘後　東から）…… 13

Fig. 14　Ａ５区ｅＴ～Ｂ５区ｂＴ全景（発掘前　北から）…… 14

Fig. 15　同　全景（発掘中　南から）…… 15

Fig. 16　Ａ溝遺物出土状態（Ａ５区ｅＴ～Ｂ５区ｂＴ）…… 16

Fig. 17－1　Ｂ５区ａＴ　遺物出土状態…… 17

Fig. 17－2　Ｂ５区ｂＴ　Ａ溝横断面全景 …… 17

Fig. 18　Ａ溝全景（１Ｂ５区ａ　ｃＴ・ｄＴ　２Ｂ５区ｅＴ・Ｃ５区ａＴ　北から）…… 18

Fig. 19　Ａ溝遺物出土状態（１Ｂ５区ｃＴ　２Ｂ５区ｅＴ）…… 19

Fig. 20　Ａ溝完掘状態（Ａ５区ｅＴ～Ｃ５区ａＴ　東から）…… 20

Fig. 21　Ｃ５区ｅＴ　Ａ溝横断面（３　縮尺1/40）…… 21

Fig. 22　Ｂ溝西側全景（Ｆ３区～Ｆ５区　南から）…… 22

Fig. 23－1，2　遺物出土状態（１Ｆ３区５Ｔ　２Ｆ４区２Ｔ）…… 23

Fig. 23－3　Ｂ溝横断面（Ｆ３区５Ｔ　南から）…… 23

Fig. 24　Ｂ溝全景（後方は油山　西から）…… 24

Fig. 25　住居址とピットの関係（Ｅ５区ｄＴ　48年９月）…… 25

Fig. 26　Ｄ５区全景（Ａ溝と住居址の関係　北から）…… 26

Fig. 27　Ｄ５区遺物出土状態（１ａ－１地点　Ａ溝　２Ｊ507）…… 27

Fig. 28　Ｄ６区の調査（１Ｄ６区全景　２Ｄ６区４Ｔ全景　西から）…… 28

Fig. 29　第604号住居址（１全景　２・３遺物出土状態）…… 29

Fig. 30　Ｅ５区の調査（１・２Ｊ516　３Ｊ518）…… 30
Fig. 31－1　Ｅ10区全景（南から）…… 31
Fig. 31－2　第1001号住居址の調査風景（48年６月）…… 31
Fig. 32　第1003号住居址遺物出土状態 …… 32
Fig. 33　Ｆ８区～Ｆ10区全景（北から）…… 33
Fig. 34　Ｆ８区～Ｆ10区遺構配置図（縮尺1／300）…… 34
Fig. 35　Ｆ10区の箱式石棺（１Ｓ－１　２Ｓ－５　３Ｓ－３～Ｓ－５）…… 35
Fig. 36　箱式石棺出土玉類（縮尺１×２）…… 36
Fig. 37　箱式石棺出土鏡（１Ｓ－１　２Ｓ－３　縮尺１×１）…… 37
Fig. 38　第６号石棺発掘状況 …… 38
Fig. 39－1　第６号石棺供献土器（縮尺⅕）…… 39
Fig. 39－2　木棺墓と第６号石棺の関係（東から）…… 39
Fig. 40　Ｆ８区の箱式石棺（１Ｆ８区全景　２Ｓ－８　３Ｓ－９）…… 40
Fig. 41　第10号石棺・甕棺・壺棺出土状態（１Ｓ－10　２Ｋ－１　３Ｋ－２）…… 41
Fig. 42　第1002号住居址出土須恵器（縮尺⅖）…… 43
Fig. 43　土器の文様 …… 44
Fig. 44　石器(1)　石鏃・石包丁（縮尺1/1）…… 45
Fig. 45　石器(2)　石斧　（縮尺½）…… 46
Fig. 46　石器(3)　石錘・砥石　（縮尺½）…… 47
Fig. 47　鉄器　（縮尺½）…… 48
Fig. 48－1　Ａ溝自然遺物出土地点（縮尺1／200）…… 49
Fig. 48－2　Ａ溝出土自然遺物（Ａ５区aT　縮尺1/1）…… 49
Fig. 49　現生植物のsilica bodyとＦ３区出土のplant opal. …… 51
Fig. 50　第516号住居址出土土器実測図（縮尺１ ⅓　２ ⅕）…… 54
Fig. 51　Ｆ５区２－a地点出土土器実測図（縮尺⅓）…… 55
Fig. 52　丘陵部の箱式石棺発見状況（48年６月）…… 59
Tab. 1　野方中原遺跡溝に包含されるplant opal. …… 50
Tab. 2　PL. 2中の住居址覆土中の土器の組合せ …… 56
PL.　1　野方中原遺跡出土土器(1)（縮尺⅕）
PL.　2　野方中原遺跡出土土器(2)（１－24　縮尺⅕，25－35　⅓）
付　図　野方中原遺跡遺構配置図（縮尺1/1000）
表　紙　第１号石棺出土獣帯鏡（縮尺１×３）

調 査 の 組 織

—調査主体—

福岡市教育委員会

正木利輔	山崎義治	結城一義	青木　崇
清水義彦	三島　格	下條信行	
三宅安吉	岩下拓二	福田征一	折尾　学
後藤　直	沢　皇臣	塩屋勝利	島津義昭
二宮忠司	飛高憲雄	藤田和裕	松村道博
柳沢一男	柳田純孝	山崎純男	山口譲治
横山邦継	力武卓治	秋山千佳子	石原克子
伊徳孝子	今泉宜子	岩下ふみ	薦野智恵子
高添れい子	筑紫敦子	椿　智子	徳永照代
永田正子	福山真貴子	吉村範子	

発掘調査は文化課の次の者が分担協力した。

事務担当　三宅・福田

発掘担当　文化課技術吏員，調査員

試掘調査　折尾，後藤，沢，塩屋，島津，飛高，柳沢，柳田，山崎，力武，二宮，藤田，松村

本調査　柳田(発掘調査主任)，折尾，塩屋，柳沢，島津，二宮

資料整理　柳田，島津

各種の遺構，遺物の出土や調査研究にそなえ関連諸科学の分野から次の先生方を調査指導員として委嘱した。

—調査指導員—

鏡山　猛（九州歴史資料館・考古学）
森　貞次郎（九州産業大・考古学）
岡崎　敬（九大・考古学）
太田静六・土田充義・山本輝雄（九大・建築史）
沢村　仁（九州芸工大・建築史）
永井昌文（九大・解剖学）
高島良正（九大・放射化学）
坂田武彦（九大・冶金学）
山内豊聡（九大・水工土木学）
浦田英夫（九大・地質学）
細川隆英（九大・植物生態学）
永松土己（九大・育種学）
大村　武（九大・育種学）
和田光史（九大・農芸化学）
日野尚志（佐賀大・歴史地理学）
畑中健一（北九州大・花粉分析学）
藤原宏志（宮崎大・農作業管理学）
藤井　功（福岡県文化課・考古学）

発掘区のよび方

1．試掘溝のトレンチ設定

遺跡の立地する扇状地は南北へ細長くのびている。そこで図上で25×25mのマス目を組み，各線を南から北へ１～15，東から西へＡ～Ｆとした。現場では各交点に測量による基準杭の杭打ちを行ない，25×25mを一単位とし，南西隅の測量点を基準として各区の呼称とした。試掘溝は例えばＣ５～Ｃ６列のように主として各列の表示に使用した。

2．本調査のトレンチ設定

試掘調査のトレンチ（試掘溝）はユンボによる機械溝のため，図上のマス目のように正確なものではない。これを修正するため本調査の前に，試掘調査の基準杭のうちＤ５を基準とし，これより北へ１ｍ，西へ１ｍずらし，Ｄ列と５列を基準線として各測量基準杭を打ち直した。25×25mを一つの単位として，南西隅の基準点を各区の呼称とした。例えばＤ５，Ｄ６，Ｅ５，Ｅ６の４点に囲まれた25×25mは南西隅のＥ５を基準とし，Ｅ５区と呼ぶ。

次に各区の一辺25mを５ｍごとに５分割し，南北方向は南から北へ１～５，東西方向は東からａ～ｅとし，５×５ｍの小グリッドで地点を表示できるようにした。トレンチの設定は原則として5×25mを一単位とした。bTは南北方向，3Tは東西方向に設定した５×25mトレンチであることを表している。例えばＤ６区4TとはＤ６区の東西方向に設けた南より４列目のトレンチを表わす。

遺物等の出土地点を表示する場合はｄ－４地点，3－e地点のように記述した。ｄ－４地点とはdトレンチの４番目の５×５ｍの地点，３－e地点とは３トレンチの５番目の５×５ｍの地点を表わす。

3．Ａ５区aT～Ａ５区cTのトレンチ

東端部の調査地点Ａ５区aT～Ａ５区cT間ではＡ溝が北東部へカーブしているため，溝と直交するトレンチを設定した。aT～cT間の溝を東から，あ，い，う，えの４つに分け，あT，いT，うT，えTとし，aT～cTの呼称と区別した。

4．住居址の番号は東西方向の１～15を基準とし，Ｂ５区～Ｆ５区のように５列は発見順に501から，６列は600台の番号とした。試掘溝発見の住居址は本調査と区別しＪ１からとした。

5．箱式石棺は発見順にＳ－1からＳ－10とした。甕棺・壺棺も同様にＫ－1～Ｋ－3とした。

6．遺構の説明の中で次のように略した場合がある。

住居址……Ｊ　　箱式石棺……Ｓ　　甕棺……Ｋ　　土坑墓……Ｄ

巻頭写真　野方中原遺跡周辺航空写真

（A　宮の前遺跡群　　B　湯納遺跡　　C　牟多田遺跡）

D　野方中原遺跡

I　遺跡の環境と立地

1　遺跡の位置

野方中原遺跡は福岡市西区大字野方字中原に所在し，隣接する字八龍，字平底，字大音を含めた遺跡の総称である。国土地理院発行1／25000の地図では「福岡西南部」のほぼ中央に位置している。福岡市の地形は東，南，西の三方を山に囲まれ，北側が海に開けている。南の油山（標高582m）から北へのびる平尾丘陵は，東の福岡平野と西の早良平野に二分している。早良平野は飯盛山，叶岳，長垂山と南から北へのびる山塊によって西を限られ，糸島平野と境を接しており，福岡平野と糸島平野の中間地帯に位置している。

弥生時代には糸島平野に伊覩国が，福岡平野には奴国の存在が知られている。糸島平野と福岡平野をむすぶ古道の一つに広石峠越えがある。周船寺，広石峠，有田，七隈，丸尾台，須玖を通り大宰府へぬける道で，大宰府の成立した時代には主要な道となっていたようであり，糸島平野ではこの道に沿って前方後円墳が立地している。広石峠は叶岳と長垂山塊の鞍部にあたり，広石峠から早良平野へぬける出入口に野方の集落があり，中原遺跡はこの道に北面している。

Fig. 1　遺跡全景　（叶岳中腹　南西方向から）

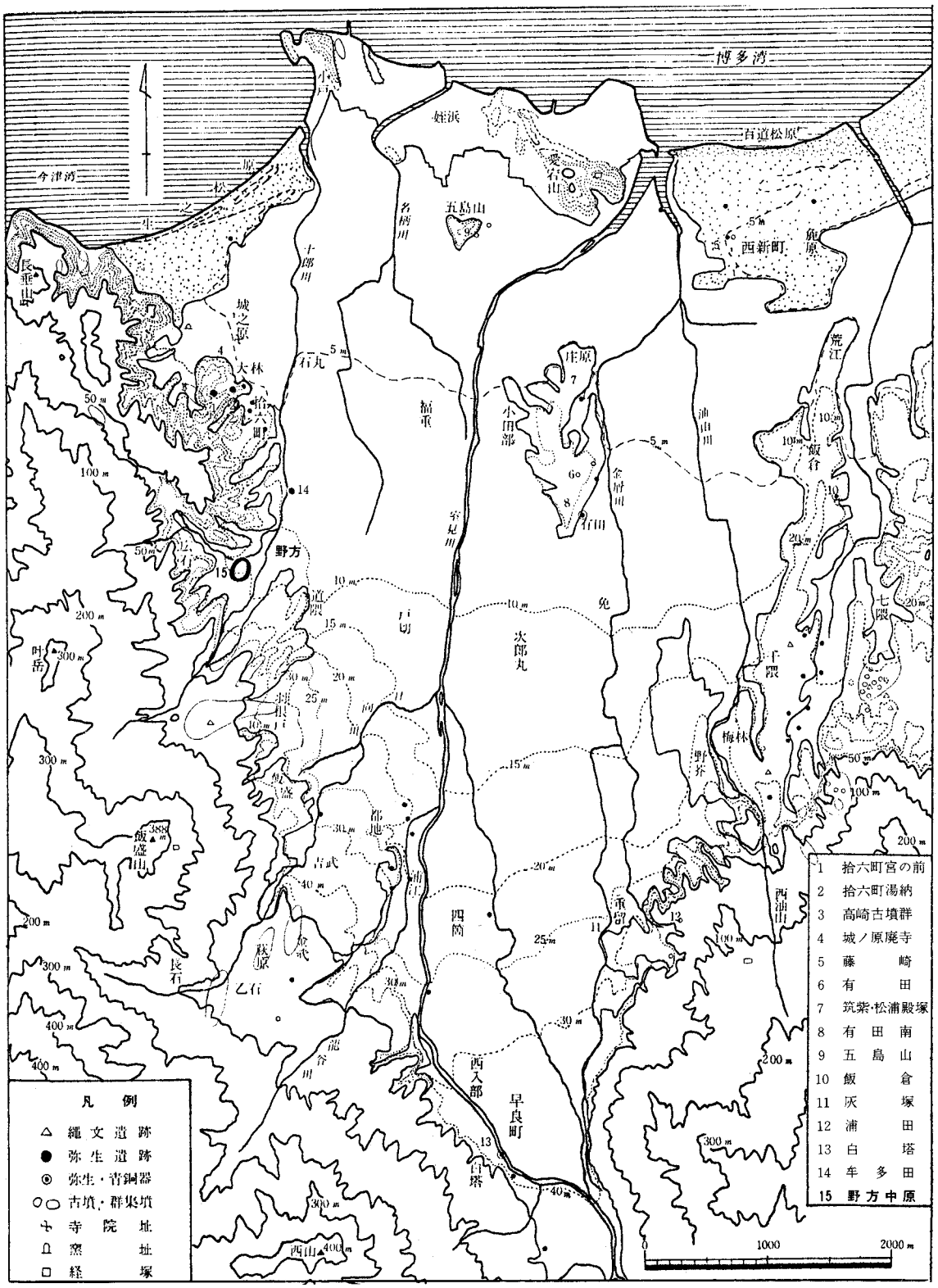


Fig. 2　早良平野の地形と遺跡　　（「宮の前遺跡」－A～D地点－から転載追補した　縮尺 1／50000）

2　周辺の遺跡

早良平野の考古学調査は近年発掘が相つぎ，分布調査や資料の集成もおこなわれ，次第に平野全体の原始時代から古代への変遷をたどることが可能となりつつある。ここでは当遺跡と関連する弥生時代後期（終末期）から古墳時代にかけての遺跡，遺物を概観しておこう。

野方をはじめて考古学上注意したのは大正年間の中山平次郎氏*であろう。出土地が野方のどこか判然としないが，今回の発掘資料と類似する高坏，器台なども含まれている。

砂丘後背地の西新遺跡はこの地方の弥生終末期の標式遺跡として著名であるが，遺跡の実体は不明な点が多い。平野の中央部，洪積台地上に立地する有田遺跡は弥生時代の初頭から奈良時代まで連続する遺跡である。ここでは古式土師器の文化層を有田Ⅰ期，有田Ⅱ期に分けて編年が示された。平野の西側丘陵上に立地する宮の前遺跡では，この時期の良好な資料が発掘された。型式学的方法に依るⅢ期の分類がなされ，宮の前Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式と仮称している。Ⅰ式は弥生終末期に，Ⅲ式は最古式の土師器として有田Ⅰ期に先行する時期と考えられている。これにより弥生終末期から古式土師器の展開への一応の基準とすることができるようになった。丘陵下の湯納遺跡は建築部材など各時代の遺構が検出され，この時期の生活内容

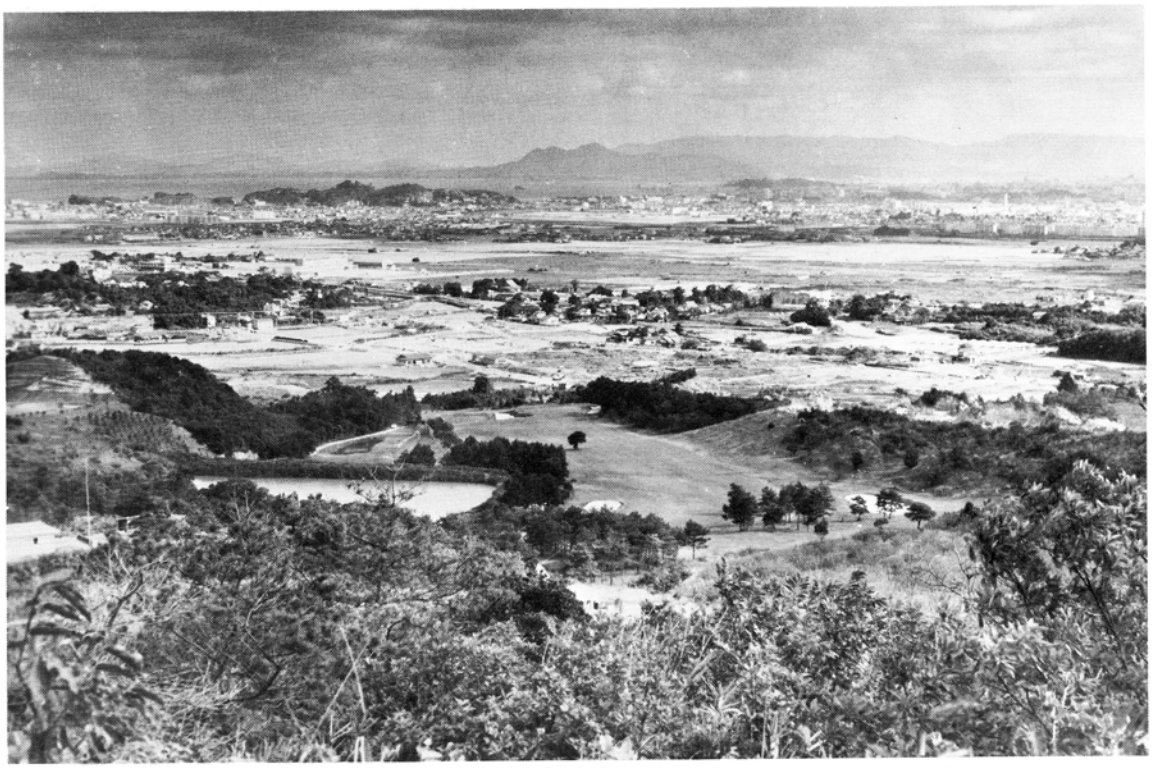


Fig. 3　遺跡遠景　（早良平野と博多湾をのぞむ　南西から）

＊中山平次郎　九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就いて(一)(二) 考古学雑誌7－10・11　1918

を知る上で重要な遺跡となっている。

一方墓制の変遷についてみると，藤崎では弥生後期の甕棺と4基以上の箱式石棺（内一基は方格渦文鏡を出土）が検出され，弥生終末から古墳時代に位置づけられている。宮の前遺跡では4基の箱式石棺が発掘され，1号墳（管玉23，ガラス小玉127）は丘陵頂部に占地し，盛土を有する。宮の前I式の時期としている。平野の東側丘陵上の重留の箱式石棺（鳥文鏡，管玉4）は古墳時代の古い頃とされ，独立丘上に位置する五島山の小古墳の内部構造は箱式石棺（二神二獣鏡2，勾玉2，管玉3，ガラス小玉，銅鏃9，鉄刀2）で，畿内型古墳とは異なった在地的性格を求めている。以上は群集墓から個人墓への成長過程（藤崎→宮の前→重留→五島山）として整理されている。

一方野方には塚原出土と伝える珠文鏡（仿製）が発見されているが詳細は不明である。野方中原遺跡を取りまく小地形をみると，十郎川をはさんだ南側の扇状地に土師器，須恵器を含む包倉層があり，その西側丘陵部には後期古墳が群集し，近接する新池の縁には製鉄遺構が検出されている。丘陵先端部には箱式石棺が発見されたが，遺物，基数とも不明である。西側の谷をはさんだ第二地点には中原遺跡と同時期の包含層がある。北側丘陵部がコノリ遺跡で，古墳4基と製鉄遺構が調査されている。

前述した西新，重留の遺跡は野方中原遺跡から半径5kmの範囲内に位置し，有田，五島山，宮の前，湯納の各遺跡は3km以内と近接しており，特に宮の前，湯納は1.5kmと至近拒離にある。これらの中には野方中原遺跡のある時期と共存した遺跡が含まれている。

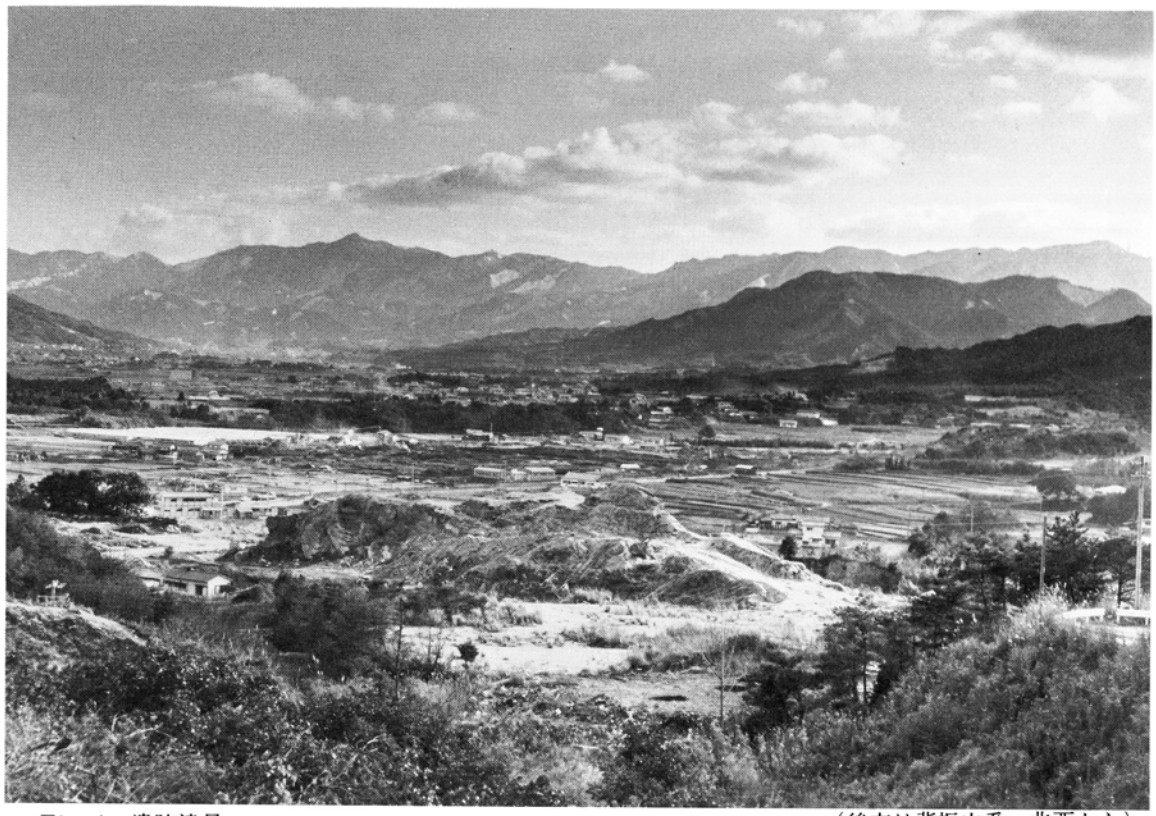


Fig. 4　遺跡遠景　　（後方は背振山系　北西から）

3　遺跡の立地

飯盛山・叶岳・長垂山の山塊は早良花崗岩を母岩とし，早良平野に面した東側山麓部には花崗岩バイラン土による扇状地を形成している。

遺跡は叶岳の東側山麓部に形成された扇状地に立地している。飯盛山・叶岳に源を発した十郎川は，扇状地の南から東に沿って北流し博多湾に注ぐ。西側には小さな谷が入りこんでいるため東西を限られ，南北へ細長くのびている。東西200ｍ，南北600ｍをはかる。南側で標高26ｍ，中央部で21ｍ，扇端部は15ｍと南から北へ低くなり，等高線はほゞ東西にのびている。

遺跡の西は南から北へのびる山塊で限られ，東西側は飯盛山から北東へ羽根戸原の洪積台地がのびているため，東・西・南を山塊や丘陵で囲まれ，北東部が早良平野に開口する形を呈し，この方向に博多湾を望む。南にはこの地方の指標的な飯盛山をあおぐ地にある。扇状地は畑地となっており，水田は西側の谷，扇端北縁，十郎川の東側と扇状地を取り囲むように開田されている。

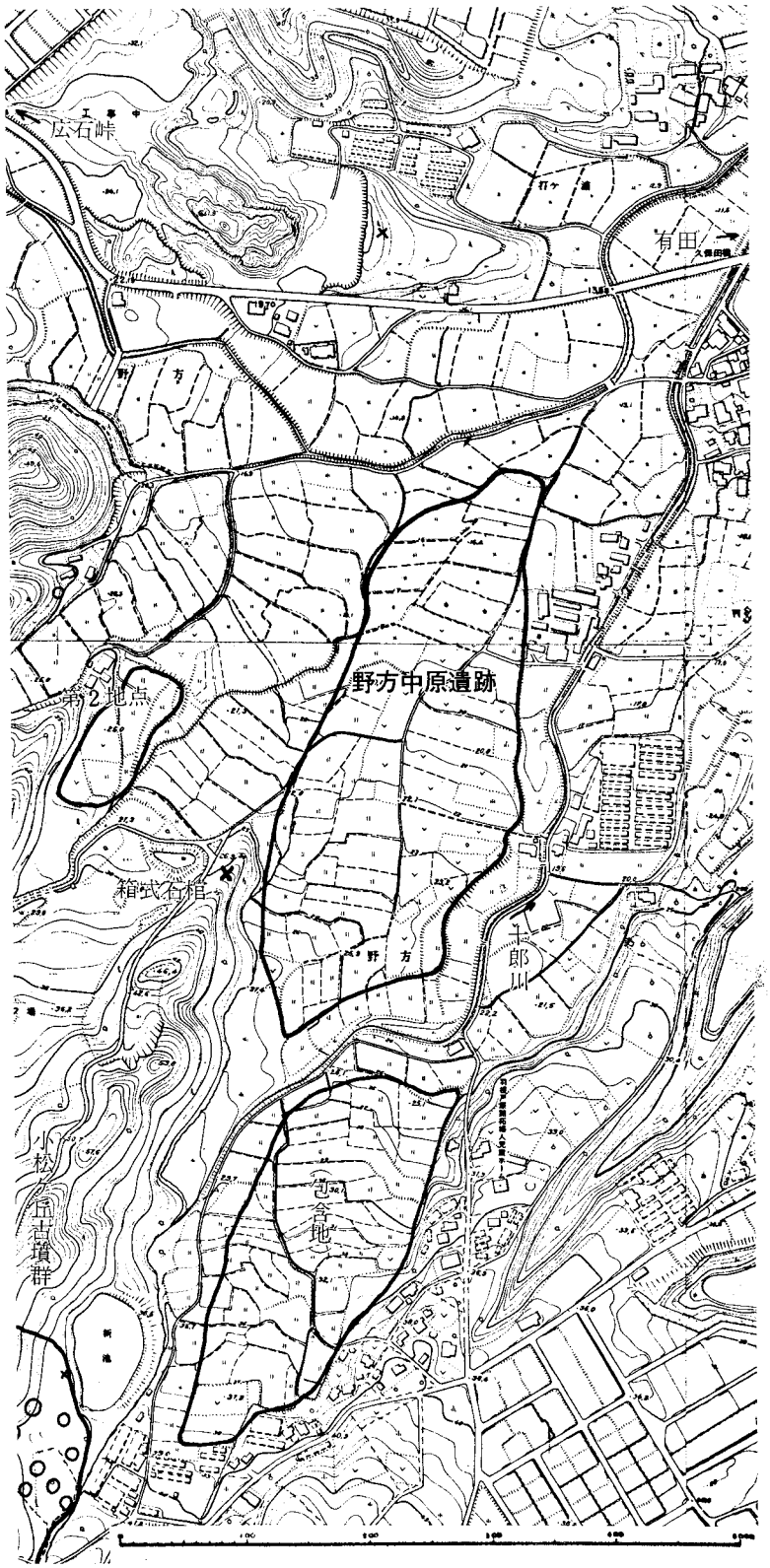


Fig. 5　遺跡付近地形図　（縮尺 1／6000）

II　調査の経過

1　遺跡の発見

野方中原遺跡が最初に発見されたのは45年９月のことであると云う。福岡第一高校史学部の学生３人が現地踏査で二地点から遺物包含層を検出している。第一地点はＢ溝付近，第二地点は谷をはさんが西側丘陵上である。その後，48年４月下旬第一地点が造成工事で破壊され，大量の遺物が出土していることが市歴史資料館へ通報され，これが今年度発掘調査のきっかけとなったのである。

知らせを受けた文化課では５月14・15の両日工事側の協力を得て出土遺物の蒐集作業を実施したが両日で整理箱40箱を超える量となった。

工事が開始直後であったため遺跡の大部分は破壊からまぬがれていた。遺物は台地のほぼ全域に散布しており，特に遺物が集中していた地点の１×１ｍの試掘調査で溝状遺構が確認されたため，溝状遺構を伴なう大集落址の発見が予想された。

文化課では即刻工事中止を申し入れ，施主側と協議を開始した。

字中原を含む一帯(6万㎡余)は住宅生協(福岡県労働者住宅生活協同組合)が低所得者の住宅対策として48年４月から造成工事に着手したもので，工事前の事前審査の際，開発の許可(47年７月)を与えていたものである。

住宅生協との協議で２週間の試掘調査で本調査の範囲を決定することを取り付けた。

Fig. 6　遺跡発見状況(Ａ溝　　2・3　Ｂ5区dT48年５月)

2　試掘調査

試掘調査は48年６月１日から14日迄の２週間内に3,000㎡程度の本調査の範囲を決定しなければ工事を再開するという前提のもとに開始されることとなった。どうしたら２週間で６万㎡を越える大遺跡の性格づけを行なえるかを協議した結果全域に25m四方のグリットを組み，その線上をユンボで掘削し，断面観察を行なうことにより遺構の分布範囲をおさえること（集落の規模を把握する）を目標とした。６月１日Ｄ列とＥ列の北端に２台のユンボが並び南へ掘削を開始した。幅60cm，深さ１ｍの試掘溝Ｅ列400ｍ，Ｄ列450ｍが１日の内に現出した。機械溝のあとに作業員を二分し，残土処理と断面清掃を行ない，そのあとに遺構確認の調査班がつづいた。南北はＤ列450ｍ，東西は７列の250ｍを最長とする延べ2,075ｍの機械掘りは６日で終了し，付図のような遺構が検出されたわけである。その結果遺構は南北は４列から10列の間，東西はＡ列からＦ列の間に集中しており，扇状地の中央部に集中していることが確認された。遺構として住居址37軒，溝の断面３ヶ所，甕棺２基，箱式石棺２基，土坑墓１基が検出され，多量の遺物が掘り出された。

溝はＢ５区ｄＴで確認されていた溝状遺構がＣ５－Ｃ６の断面まで50ｍつづいていることが確認され，Ｅ４－

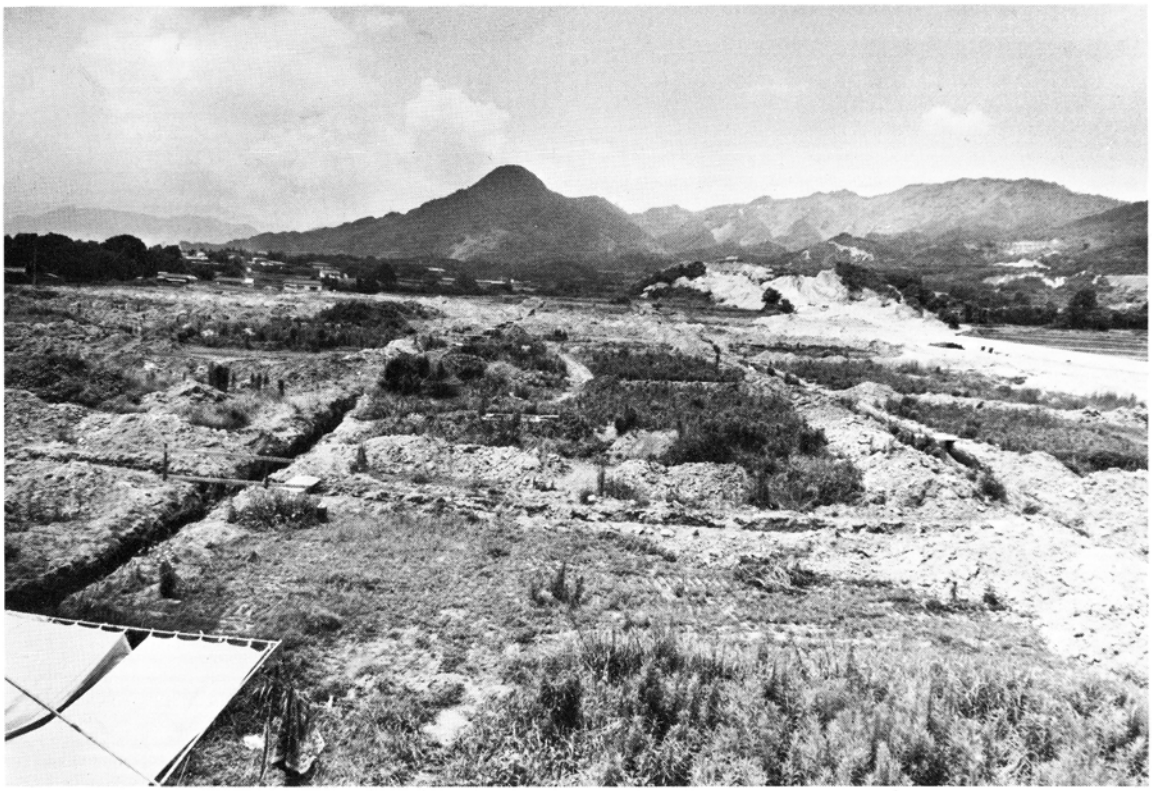


Fig. 7　試掘調査風景　（後方は飯盛山　北から）

F4とE5－F5間（長さ25m）にも溝を検出した。またC8－D8間にも溝の断面が観察された。

C8では壺棺，D9－E9の間で甕棺，E9－E10で土坑墓，E10－F10では箱式石棺が発見され，台地の北西端部での墓域のまとまりが予想された。箱式石棺（S－1）からは鏡片と刀，玉が発見された。遺物は弥生時代終末から古墳時代のはじめの時期に集中しており，その過渡期の溝，住居址，墓域の関係を解明できる遺跡として極めて重要であることが予測された。

住宅生協との間では試掘開始後最初確認されていた溝状遺構周辺部3000㎡を本調査地点とする線引きが行なわれ，試掘調査の資料は宙に浮くことになり，10列の北側に沿って幹線道路が通ることになった。工事再開の知らせを聞いた現場では，6月14日迄の期限内に遺構プランの確認をめざしてE10区，F10区の発掘を開始した。

その結果E10区から合わせて11軒の住居址の切り合いが確認された。F10区では5基の箱式石棺が検出され，S－3から鏡，勾玉，管玉，ガラス小玉，S－5からガラス小玉が発見された。

E10区と試掘調査の成果を総合すれば全域では少なくとも200軒以上の住居址の存在が推定され，台地の西北端部での墓域の広がりが予想された。その後再度の協議により，遺構が集中している4列から11列のほぼ全域を本調査する方向で線引きが修正された。以上のような経過から遺構が集中している扇状地のほぼ中央部，東西はA列からF列の間，南北は4列から11列の間21,000㎡を本調査の対象区域とすることになったのである。

Fig. 8　E10区調査風景　　（48年6月）

本調査は48年度国庫補助対象の緊急調査として8月から行われることになった。

8月から11月までを調査期間として調査を進めたが，実際には超年し，49年1月中旬まで発掘調査をつづけることになった。

発掘面積等は次のとおりである。

造成面積
63,000㎡

発掘対象面積
21,000㎡

48年度発掘面積
約5,000㎡

Ⅲ　調査の概要

試掘調査の結果

(1)　200軒を上まわる住居址の発見と溝状遺構を伴なう大規模集落の存在が推定され，

(2)　甕棺から箱式石棺への墓制の変遷をたどることができ，

(3)　溝，住居址，墓域から検出された大部分の遺物は弥生時代から古墳時代へかけての時期に集中していることがわかった。これは弥生時代から古墳時代にかけての過渡期的段階における単位集団の諸要素をセットとして把えることのできる重要な遺跡であることを示すものであると考え，本調査ではこれをもとに，

①　3地点で検出された溝の関係を明らかにする。

②　溝と住居址，住居址と墓域の関係を追求する。

③　墓域の広がりを追求する。

以上を目的として各地点の遺構プランの検出に努めた。その結果を集積して国の史跡として指定を受け，遺跡の永久保存を図ることを今年度の最大の目標とした。従って発掘作業は一部を除いて遺構プランの確認の段階までしか進んでいない。

調査は，まずB溝の遺構プランの確認作業から始め，次にD5区E5区でA溝とB溝の関係を追求し，これと平行してA5区～C5区では本調査の対象地域外となったA溝を工事前に全面発掘した。つづいてD6区・D7区でA溝と住居址の関係を追い，F8区～F10区では墓域の広がりを追求した。最後にZ5区－A5区でA溝の発掘とA溝内の遺構の検出に努めた。

発掘地点は次のとおりである。

8/6－9/9　　F3区4T～F5区4T

9/10－10/13　　A5区eT～C5区aT

9/17－10/23　　D5区・E5区

10/25－11/2　　D6区・D7区

11/5－12/13　　E3区・E4区

12/1－12/21　　F8区～F10区

12/22－1/15　　Z5区eT～A5区cT

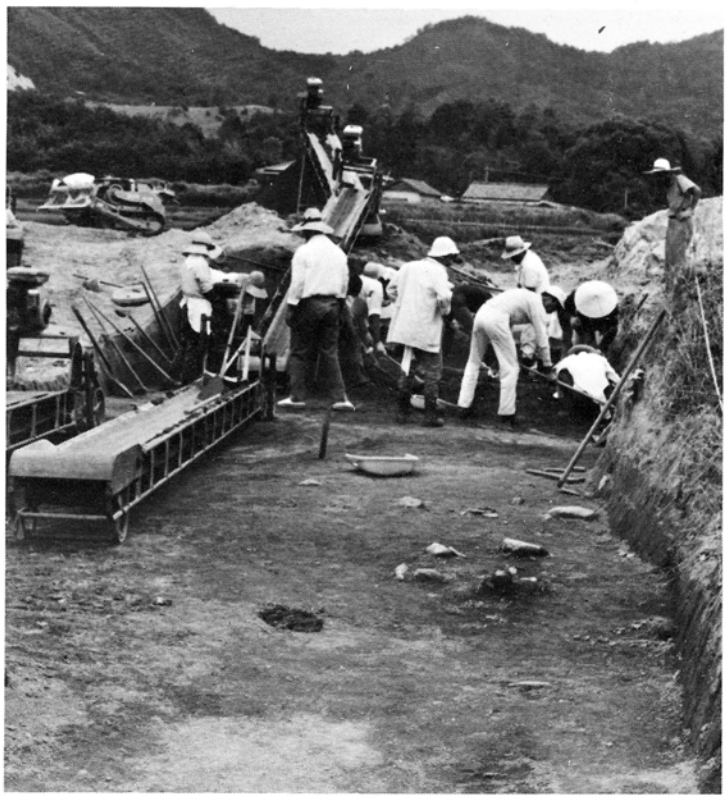


Fig. 9　発掘調査風景　（中社研の発掘参加F5区2T　48年8月）

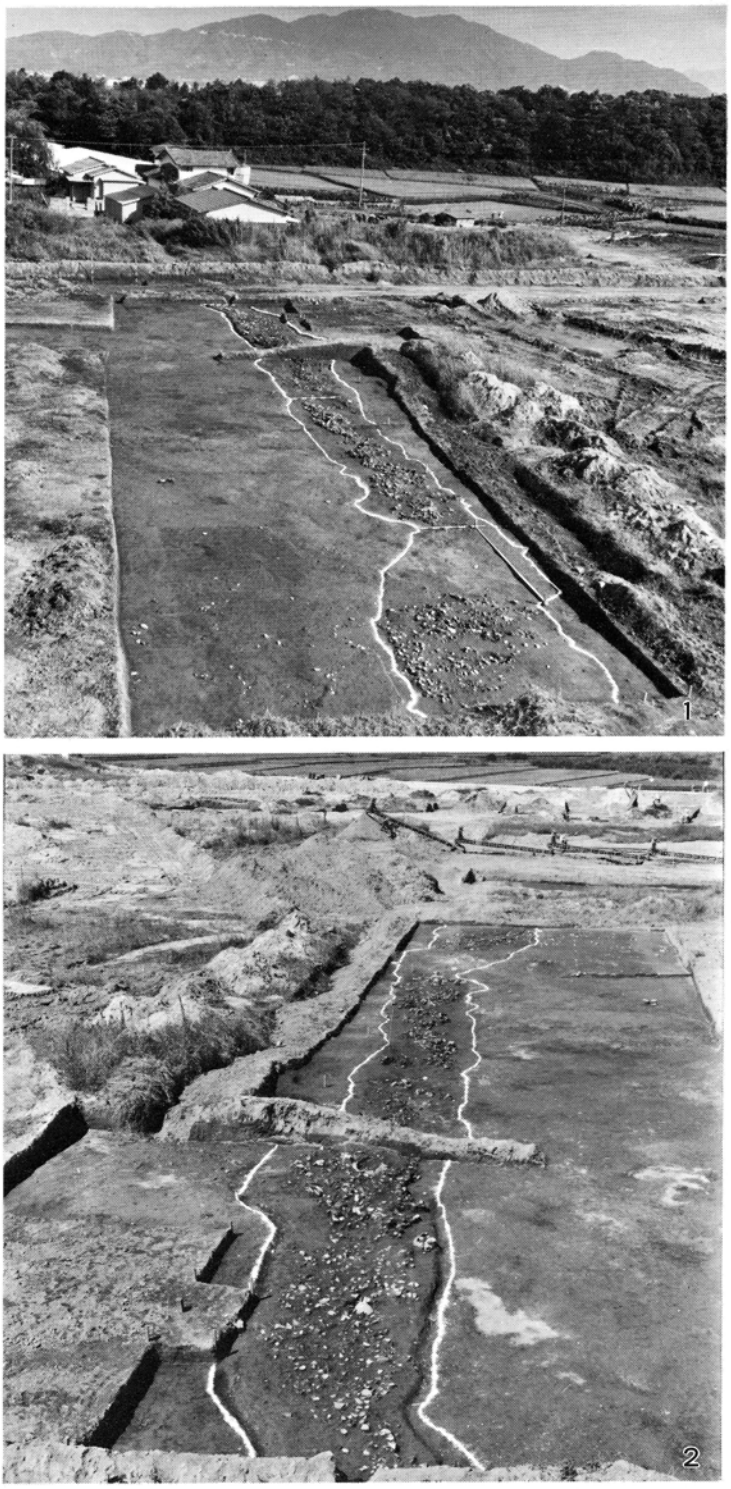


Fig. 10　A溝全景　　（1西から　2東から）

1　溝の調査

大小二つの溝状遺構が検出された。一つは台地の中央部から東へ半円状に広がり直径約100ｍを測る。これをＡ溝と呼ぶ。他は台地の西側で確認された直径32ｍの環状溝であるが，全周していない。Ａ溝側（東側）30ｍは出入口のように開いたまま完結している。これをＢ溝とした。

(1)　Ａ　溝

48年５月15日１×１ｍの試掘で溝状遺構が確認されたのはＢ５区dTにあたる。６月の試掘の段階でこれよりＣ５－Ｃ６間の試掘溝（本調査のＣ５区eT）へつづくことがわかったＡ溝は，その後Ｄ５区～７区の調査でＣ８－Ｄ８間の試掘溝の溝断面へつながることがわかった。Ａ溝の西端部はＤ６－Ｄ７間の試掘溝で一部カットされていた。

Ａ溝はＤ６区2Tを西側とし，Ｂ５区からＣ５区を南側として台地の東端（Ｚ５区）までつづいている。北側はＤ７区5Tの試掘溝断面へつながり，Ｃ８区までやや不整な半円形を呈する環状溝である。東側は削平されて溝のゆくえを知ることができない。十郎川がすぐ近くを流れており，その流路との関係

から溝が全周していたかどうか問題である。

溝は概ね上面幅3m，下面幅2m，深さ1mの逆台形状を呈する。D7区eT，C8区5Tの試掘断面は溝と直交していないが，ほぼ同じプランと考えられる。一方，A5区aT～cTでは東へゆくほど次第に浅くU字溝となっている。

溝床面の高低差は十郎川に近い東端が最も高い。A5区aTでは21.173m，B5区bTで20.386m，C5区aTで20.387m，C5区eTで20.120m，C8区bTで18.322mとなっている。B5区－C5区間は高低差がなくほぼ水平である。C5区eTからC8区bTにかけて自然地形に沿って低くなっている。

遺物の出土状態は南側と北側では異なっている。Z5区eTからC5区eTの間は遺物が多量に包含されている。D5区d－4Tでも溝中に高杯，器台，袋状口縁壺等遺物が認められ，D6区4－eTの溝では石斧，石鏃などが出土している。ところがD7区では溝の遺物が発見されず，これより以北のD7区eT，C8区eTの試掘溝の断面には遺物をほとんど含まない。C8区bTの断面観察でも同様の結果を得た。従って，A溝ではD6区4Tより南側には多量の遺物が包含されているが，北側には遺物を含まないことになる。これはA溝の内D6区4Tを境として北側⅓が無遺物，南側⅔が多量の遺物を包含することになり，A溝の性格を考える上で一つの手がかりとすることができよう。

A溝の内C5区aT以東は発掘調査の区域外として造成工事されることになったので，A5区aT－C5区aT間は$\frac{9}{10}$－$\frac{10}{13}$，Z5区eT－A5区cTは$\frac{12}{22}$－$\frac{1}{15}$をあて全面発掘して記録保存に努めた。

Fig. 11　A溝調査風景　（B5区aT　48年9月）

Ｚ５区eT－Ａ５区ｃT

扇状地の東端部に位置している。Ａ溝のゆくえを追求するためにＡ５区aT－ｃT間15×15mを設け，更に東の拡張してＺ５区eTとした。Ａ６区ではＡ溝内の遺構の検出に努めたが，すでに削平されていて，遺構は検出できなかった。

1　Ｚ５区eT発掘風景(断面をはさんで手前からＡ5区ぅT，ぃT，ぁT)
2　Ａ5区えT　遺物出土状態
3　Ａ5区ぁT　壺形土器出土状態
4　Ａ5区ぅT　Ａ溝縦断面（東から）

Fig. 12　Ｚ５区eT～Ａ５区ｃT遺物出土状態　　(49年１月)

A5区aT－cTでは溝がトレンチと直交していないので，その間に溝と直交する三ヵ所の断面を残し東から，あ，い，う，えとトレンチの呼称と区別した。うTでは溝の縦断面を残し遺物の傾斜に注意した。

溝は東へ浅くなっており，遺物の出土状態もZ5区eT－A5区いTとA5区うT－えTでは異なっている。Z5区eT，A5区あTでは溝の床面に接して遺物が出土した。うT，えTでは溝の床に30－50cmのほとんど遺物を含まない堆積層があり，その上に遺物を包含する層がみられる。

遺物は豊富である。壺には小形のものと袋状口縁をなすものがある(*Fig.* 12－2)。更に口縁部が外側にひらく大形の壺形土器が出土した。口縁内側に櫛描波状文が施文されており，この地方ではあまり例をみない施文法である(*Fig.* 12－3)。鉄器では全長9.5cmの鉄鏃が出土している。石器には幅7.2cmの太形の蛤刃磨製石斧があり，石材は今山の玄武岩であろう。

自然遺物も溝内から発見された。Z5区eTでは植物の実，獣骨片が出土した。獣骨は先端を鋭利な工具ですり切っている。A5区aTでは魚骨，貝類がまとまって検出された。

東側崖面の溝の断面中には遺物が多量包含されていたから，Z5区eTより更に北東へつづいていたことは疑いない。

Fig. 13　A5区aT～cT全景　（1発掘前　2発掘後　東から）

A 5区eT－B 5区bT

A 5区cT－eTの間は環状道路のため破壊された。B 5区bTより東へ12mがこの区で，B 5区aTから北側へまがり，A 5区cTへつながっている。B 5区bT断面は旧地表まで残っているが，その周辺部は試掘調査前の造成工事で上部を削平されている。このため溝の上面は明らかでない。溝のラインは遺構を検出したときの線である。

溝中からは夥しい遺物が包含されていた。大形の甕棺から壺，甕，鉢，器台等の他ミニチュアの

上段　Fig. 14－1. 15－1
全景（発掘前　北から）

土器まである。甕棺は口縁端部，胴部突帯に刻目を施すものが多い。壺は断面が逆く字形を呈する。もっとも出土量が多いのは甕で粗い叩きと刷毛目調整の二種類があり，口縁が外反し，底部は平底をなす。器台には上縁が広がるものと上辺の一端が突き出したくつ形器台と呼ばれるものがあり，くつ形器台は大小不ぞろいで形も多様である。角柱状の支脚も出土している。

B5区b—4地点から半球形有孔滑石製品の未製品が検出された（*Fig.*46—10)。A溝より7m内側の地点にあたる。

下段　Fig.14—2.15—2
全景（発掘中　南から）

*Fig.*16－5と7は甕の発掘前と発掘後を示している。台付甕には叩きを有するものとないものがある（*Fig.*16－4と*Fig.*17－1）。石鏃は三角形を呈し，国東半島の東，姫島産の黒耀石を石材とするものである。

Fig. 16　A溝遺物出土状態　　（A5区eT～B5区bT）

完形品も多く出土した。台付甕，鉢形土器，甑形土器，器台がある。鉢形土器は口縁が外反し，甑形土器は焼成前に孔を穿っている。器台は上縁端部に刻目を施している（*Fig.*17－1）。

bTの横断面は上面幅270cm，下面幅156cm，深さ60cmの逆台形状に掘り込んでいる。最下層は無遺物層で，その上に70cmの遺物包含層がある。溝の底から包含層の上面まで110cmで，これが溝中の堆積層となっている。底面の標高は21.386mである。

Fig. 17－1
B 5区aT　遺物出土状態
Fig. 17－2
B 5区bT　A溝横断面全景

Ｂ５区ｃＴ－Ｃ５区aT

この区は48年５月工事中に大量の遺物が発見された地点で，５月15日１×１ｍの試掘により溝状遺構が確認されたのはＢ５区dTの地点に該当する。溝及び溝南側（５列以南とＤ列以東の範囲）の上部が削平されてＢ５区，Ｃ５区へ集積されていたために，溝の上部はカットされて不明である。溝の上面幅が凸凹しているのはそのためである。

試掘調査された溝の遺物（Ｂ５区dT，５月）には高坏，甕形土器，器台などが含まれていた。高坏は器高が余り高くならず，脚部に３つの円孔を穿っている。焼成良好。甕形土器は口径26cm，器高40cmの大きなもので，器面は刷毛目整形している。底部は平底で，外面は二次焼成を受け，煤が付着している。

今回の調査では溝中からは数多くの遺物が出土した。Ｂ５区ｃＴは甕棺を出土したbTと隣接しているが，横断面をはさんで，甕形土器，器台等が一括して発掘された。甕形土器は口縁が外反し，器面に粗い叩き目を施すもので，底部は平底をなす。口縁部に最大径があり，口径20.7cm，器高 30 cmをはかる。他に同様な甕形土器が２個完形品で出土した（*Fig.*19－1）。*Fig.*19－2はＢ５区dTの底面近くから出土した壺形土器である。口縁部は断面逆く字形を呈し胴部は球形に近いものである。大型甕の破片は多いが完形品はない。鉄器では鎌，石器としては砥石が多い。玄武岩や砂岩を利用したものが多く，長方形の断面をもち二面以上とも使用しているものが多い。溝の横断面は逆台形状に掘り込まれており，Ｂ５区bTとかわりがなく，溝底面の幅も一定している。

Fig.18　A溝全景（１　Ｂ５区ｃＴ・ｄＴ　２　Ｂ５区ｅＴ・Ｃ５区ａＴ　北から）

Fig. 19　Ａ溝遺物出土状態　（１Ｂ５区ｃＴ　２Ｂ５区ｅＴ）

Fig. 20はＡ５区eT－Ｃ５区aT間のＡ溝の完掘状態を示している。断面が逆台形状に掘り込まれている様子を知ることができる。溝底はほぼ水平である。底面の幅も一定しており，地点による差異は認められなかった。Ｂ５区－Ｃ５区では溝は東西へ直線状につくられている。Ｃ５区からＤ５区へかけて北西方向へカーブし，東側ではＡ５区eTから東端部のＡ５区aTへカーブしながらつづいている。Ａ溝は全体として半円状を呈するものの部分的にはＢ５区－Ｃ５区のように直線状を呈するところがあり，正円とはなっていない。

Ａ溝はＺ５区eT－Ｃ５区aT間を全面発掘したが，Ｄ５区，Ｄ６区，Ｄ７区では上面での遺構プランを確認した。溝の上面から溝中の遺物を検出した。Ｄ５区dT出土の袋状口縁の壺，高坏はＡ５区－Ｃ５区出土遺物と変化なく，Ｄ６区4T出土の石斧や土器もＡ５区出土例と同類のものである。

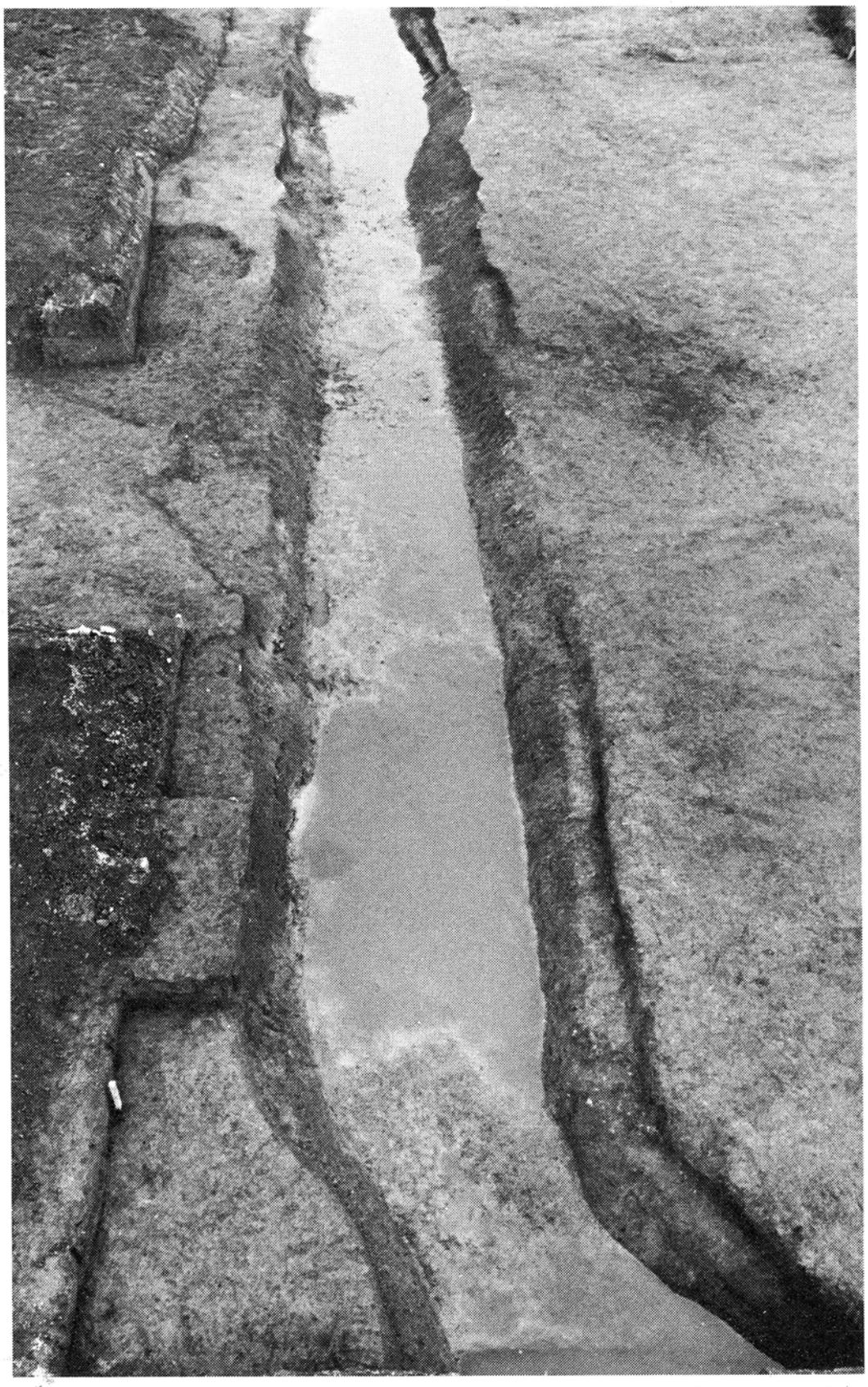


Fig. 20　Ａ　溝　完掘状態　　（Ａ５区eT～Ｃ５区aT　東から）

Ａ溝の各地点から出土した遺物は土器，石器等各器種ごとにそれぞれ共通した特徴を指摘でき，同一時期のものと考えて差支えないようである。一方Ａ溝内は今年度未掘の状態にある。

溝に包含された遺物は弥生終末期の時期に比定されるものであるが，終末期の当遺跡における植生の一端を明らかにする目的をもって溝の土壌を採取し，花粉分折とPlat opalの分析を依頼した。

Ａ溝ではＣ５区eTの横断面，Ｂ５区ではＦ３区5Tの横断面を採取地点に選び，土壌は上下各３層に区分して採取した。１層は上部包含層，２層は下部包含層，３層は溝底面の無遺物層である。P.50の土壌試料の採取地点に記述されている第２層とはＡ溝Ｃ５区eTではⅣ層（*Fig.*21－３）に，Ｂ溝Ｆ３区5TではⅢ層（*Fig.*23－３）にそれぞれ該当する。いずれも遺物包含層の安定した土層で包含された遺物と同一文化層の土壌と考えられるものである。

（P.50，P.51参照）

C５区eT

試掘溝(C５－C６)で溝の断面が確認された地点である。A溝はC５区aTからD５区d－５Tにかけて半円状のカーブを描くのでeTの横断面はA溝と直交していないが遺物の包含状態を観察できる地点である。溝の上面幅3.7ｍ，下面幅2.3ｍ，深さ87cmの逆台形状を呈し，B５区，C５区と同じ断面形をしめす。最下層に遺物を含まない堆積層があり，その上が遺物包含層となっている。遺物は溝の中央ほど多く，溝底面標高は20.12ｍをはかる。*Fig.* 21－３のⅢ層の土器は袋状口縁の壺で，断面は逆く字形を呈し胴部は卵形をなし底部はわずかに平底をなすものである(PL.１－６)。Ⅳ層には甕形土器の破片が包含されているが，Ⅲ層とⅣ層の土器に時期差は認められず，同一時期の堆積と考えられ，これらは，弥生終末期の様相をしめす資料とみることができる。

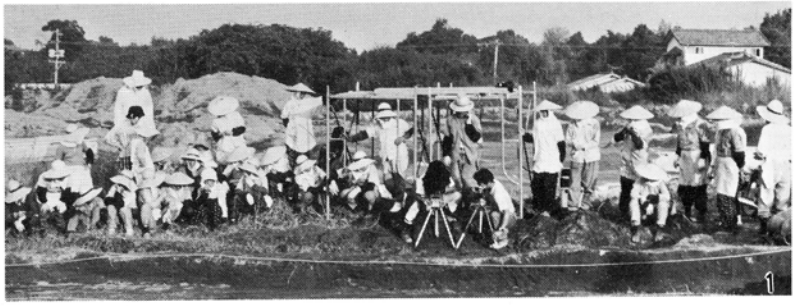


Fig. 21－３
C５区 eT 横断面の土層
Ⅰ　表土
Ⅱ　褐色土
Ⅲ　暗褐色土 ｝遺物包含層
Ⅳ　淡暗褐色土 ｝遺物包含層
Ⅴ　明暗褐色土
Ⅵ　淡暗褐色砂質土
Ⅶ　黄褐色土
Ⅷ　黒色土
Ⅸ　砂層
Ⅹ　砂礫層

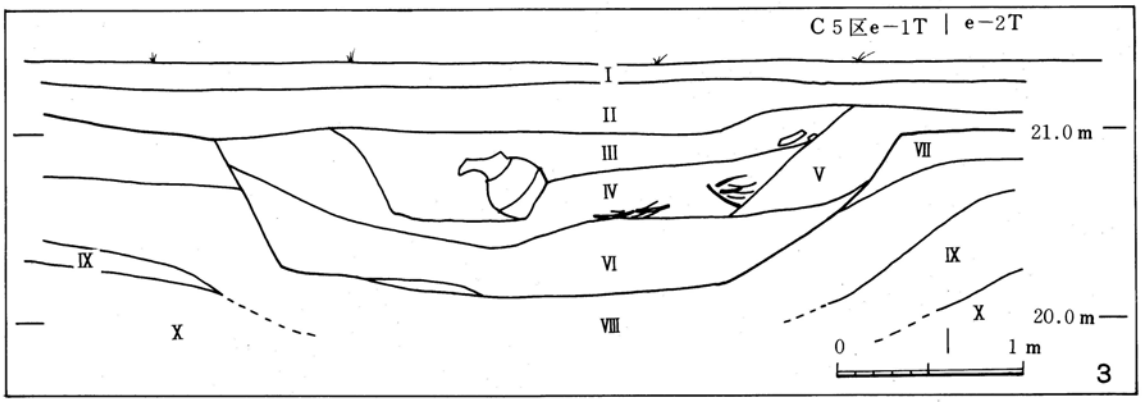


Fig. 21　C５区　eT A溝横断面　　(３　縮尺1/40)

(2)　B　溝

試掘調査でＥ４－Ｆ４とＥ５－Ｆ５の間に南北へつながっていることが確認されていたので，８月から９月にかけてＦ４区の両端にトレンチを設定して溝のゆくえを追求した。

南側ではＦ３区4Tから東へ屈曲してＥ３区へつづいていた。一方Ｆ５区2Tには溝があらわれず，1Tから東へつづくことが確められた。その後Ｅ３区，Ｅ４区を発掘し，Ｂ溝の全形を知ることができた。溝の両端は内側へ屈折して完結している。

Fig. 22　Ｂ溝西側全景　　（Ｆ３区～Ｆ５区　南から）

Ｂ溝の西側辺にあたるＦ3区5TからＦ5区２Tの間32mにＦ3区5T，Ｆ4区2T，4Tの３つのトレンチを設けた結果溝から多量の遺物が検出された。この地点は全掘していないがＦ3区5T及びＦ4区5Tの試掘溝で観察される溝の断面から，遺物の包含状態はＡ溝（Ａ５区－Ｃ５区）と同様であると考えられる。

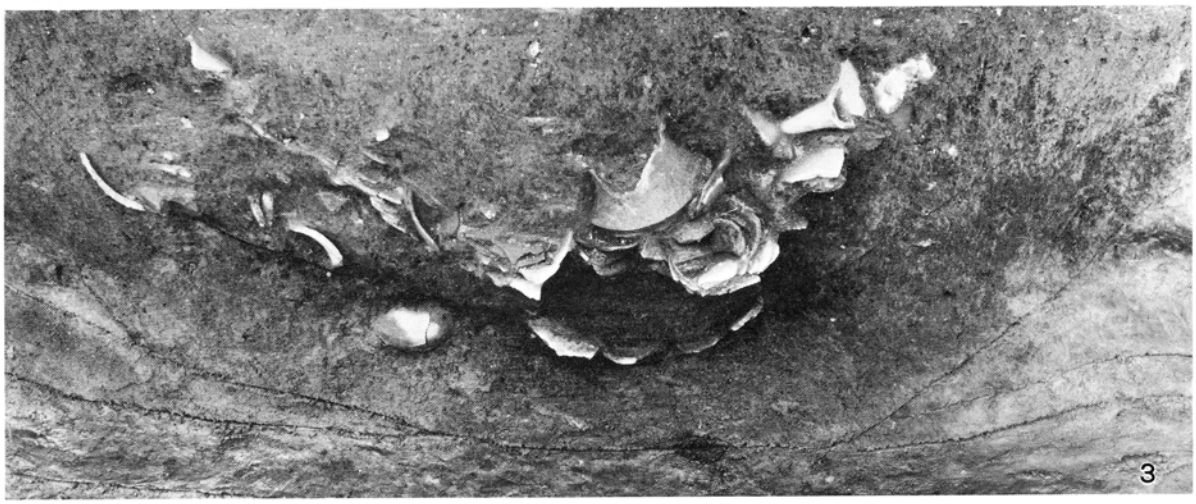
遺物はＡ溝同様豊富である。土器には壺，甕，器台などがある。大半が破さいされているのは調査前にこの地点が工事用ブルドーザーの通路となったためである。袋状口縁の壺は断面が逆く字形を呈しＡ溝出土例と同類のもので，甕は口縁はく完形に外反し，底部が平底となるものである。

Ｆ4区2Tからは鉄製鋤先の完形品二個体が重なった状態で検出された（*Fig.*47－１・２）。抉入石斧（*Fig.*45－7）が検出されたのもこのトレンチである。Ｆ4区4Tからは石錘の未製品が出土している（*Fig.*46－５）。Ｆ4区5Tの溝横断面の底面標高は20.642mでＦ3区5Tの溝横断面の標高と大差な

く，B溝西側辺はほぼ水平である。

F3区5T(試掘溝E4－F4)ではB溝の横断面が観察された。ここでは地表から40～70cmの有機質を含む黒褐色(Ⅲ層)が遺物包含層となっている。溝は包含層下の砂層(Ⅳ層)を掘り込み，底面は褐色粘質土層(Ⅶ層)に達している。上面幅2.40m，下面幅1.60mであるが，A溝の断面ほど整っていない。溝の底面に遺物を含まない堆積層があり，その上に土器を包含する二つの層があるが，出土遺物を区別できるほどの時期差は認められない。溝底面の標高は20.657mである。溝中に包含される遺物はA溝と変化なく，遺物の包含状態，溝

Fig.23－1.2
遺物出土状態
(1　F3区5T　2　F4区2T)
Fig.23－3
B溝横断面（F3区5T　南から）



の横断面も一致する。A溝とB溝は同じ時期に併存した遺構と考えられる。B溝の全体の形は円形というよりは東西，南北がそれぞれ平行する不整な四辺形といえるもので，方形環状溝と呼ぶ方がふさわしい。計測すると南辺25mは直線状を呈し，北辺は17mと短かい。西辺32mは中央部が西側へ張りだしている。東辺での溝の距離は30mを測り，南北両辺から内側へそれぞれ5mで先端がまるく完結している。その間に遺構は今のところ確認していない。東西，南北各辺の溝中心線上での距離は東西26m，南北33mとなる。B溝東北隅(E5区4－aT)とA溝との最短距離は30mである。A溝とB溝の関係は今後の問題点であるが，B溝の東辺がA溝側に開いた形をなしている。

B溝内では今のところ遺構は検出していない。F3区－F5区では溝のプランを確認したのみで，F4区2T，4Tは遺構面まで達していない。E4区－E4区では溝の上面を確認した段階までしか調査が進んでいないが，溝の上面のレベルには遺構はみられないようである。特に住居址は確認されていない。住居址が検出されたのは，F5区2T以北，E5区4TやE4区3－b地点などB溝の周辺部に限られる。B溝の性格を検討する上で注意すべき点であろう。更にB溝の出土遺物が西側辺に限られており南側辺や北側辺にはほとんど遺物が包含されていないことも特徴の1つとして注意されよう。

B溝内の遺構の検出作業はA溝内の住居址の時期を明らかにすることと合わせて来年度以降の調査に期待したい。

Fig. 24　B溝全景　　(後方は油山　西から)

2　住居址の調査

溝と住居址の関係を追求するためＥ５区，Ｆ５区，Ｄ５区－Ｄ７区を発掘し，多数の住居址を検出した。住居址の切り合いを確めていないので正確な数字ではないが，Ｄ５区12軒，Ｅ10区11軒を含め57軒以上が検出された。試掘調査の結果を合わせると94軒以上となる。本年度は調査対象面積の⅕しか発掘が進んでいないが，全域ではこれをはるかに上回る住居址が分布していると考えられる。

住居址の分布はほぼ全域におよんでいるが，密度には差がある。扇状地の中心部にあたるＤ列から最も多く検出され，西側端縁部にはほとんどみられない。遺構別にみると，Ａ溝内には住居址が分布しているがＢ溝内及び墓域に相当するＦ８区－Ｆ10区では住居址は検出されていない。

Ｄ５区では住居址とＡ溝の関係を知る手がかりが得られた。Ｊ 507は溝の上に検出された住居址で，Ａ溝が埋まった後に構築されている。Ｊ 507出土の土器には内面箆削りの器壁のうすい甕形土器がある。胴部が球形に近く丸底を呈する。これと同じ土器を出土する住居址にＪ 516，Ｊ1001，Ｊ1003，Ｊ1007等がある。今のところ住居址はいずれもＡ溝より新しい時期のもので，Ａ溝に伴なう時期の住居址が検出されておらず，Ａ溝内の調査に期待するところが大きい。

住居址は溝との関係を追求する過程で遺構の上面プランを確認したもので，遺構内まで完掘した例は一軒もない。従って本文中で住居址の遺物としたものは住居址覆土中の遺物であり，今のところそれらの遺物をもって住居址の年代を決定する資料と速断することはできない。

各区から検出された住居址は次の通りである。

試掘調査	３７
Ｄ５区	１２
Ｅ３区	１
Ｅ５区	１１
Ｆ５区	５
Ｄ６区	１２
Ｄ７区	５
Ｅ10区	１１
	９４

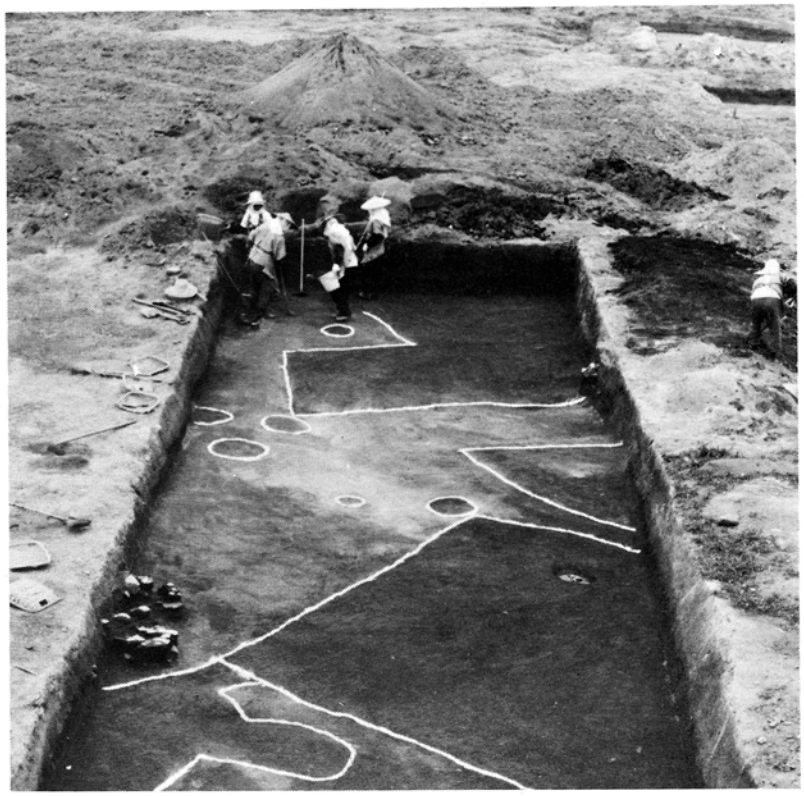


Fig. 25　住居址とピットの関係　（Ｅ５区ｄＴ　48年９月）

(1)　D５区

扇状地の中央部に位置するグリッドである。試掘調査の結果，C６－D６間に３軒の住居址が確認されていた(東よりJ24，J25，J26)が，J26はA溝断面の誤認であることがわかった。J24はJ 503，J25はJ 501として整理した。

D５区ではA溝と住居址の関係を追求した結果C５区eT断面に観察されていたA溝はD５区の中央部から北側へまがりd－5地点へつづいていることがわかった。d－4地点の溝から高坏，袋状口縁壺，器台等が出土し，A５区－C５区の出土遺物と同様な資料を得た。

D５区中央部では溝の上に住居址(J507)が検出されA溝と住居址の先後関係が明らかになった。J507の他にも溝と複合する遺構がある。J507の北西側(J505)とb－2地点のJ510は溝と切り合った遺構である。更にピットも多数検出された。a－1地点の円形ピットはA溝に沿って並んでいる。J507と東側J504の間の柱穴はA溝と直交する方向にならび，J505の北東側にはこれと平行する柱穴がある。その間には方形ピットも認められる。これらの柱穴はどの住居址と関係するものであろうか。遺構プランの確認の段階までしか進んでいない本年度の調査では，その関係は明かでない。住居址の時期決定とともに今後に残された課題である。

Fig. 26　D５区全景　　(A溝と住居址の関係　北から)

第507号住居址

A溝が埋まった後に構築された住居址である。短辺4.1m，長辺5.6mの長方形プランである。J 507の北側及び東側に別な遺構があり，周囲にピットが点在している。ピットには円形と方形の二種類があり，どの遺構と関連するものか今のところ明らかでない。

住居址内から多数の土器が出土した。壺と甕に完形品がある。*Fig.* 27－2は口縁部が直立し，頸部がすぼまらずそのまま胴部へつづいて丸底となる。器面に叩きをみる器高 52cmの大形品である。甕は口縁部がわずかに肥厚し，内面箆削りの器壁のうすいものである。胴は球形に近く，底部はわずかに平底を呈するものと丸底のものがある。A溝に後続する接近した時期の資料と考えられる。

Fig. 27－1はD5区a－1地点から出土したものでJ507出土の壺形土器（*Fig.*27－2）と同類のものである。a－2地点溝の南側にはJ 510があり，これに伴なう資料かA溝出土のものか遺構の切り合いを確かめていないので明らかでない。

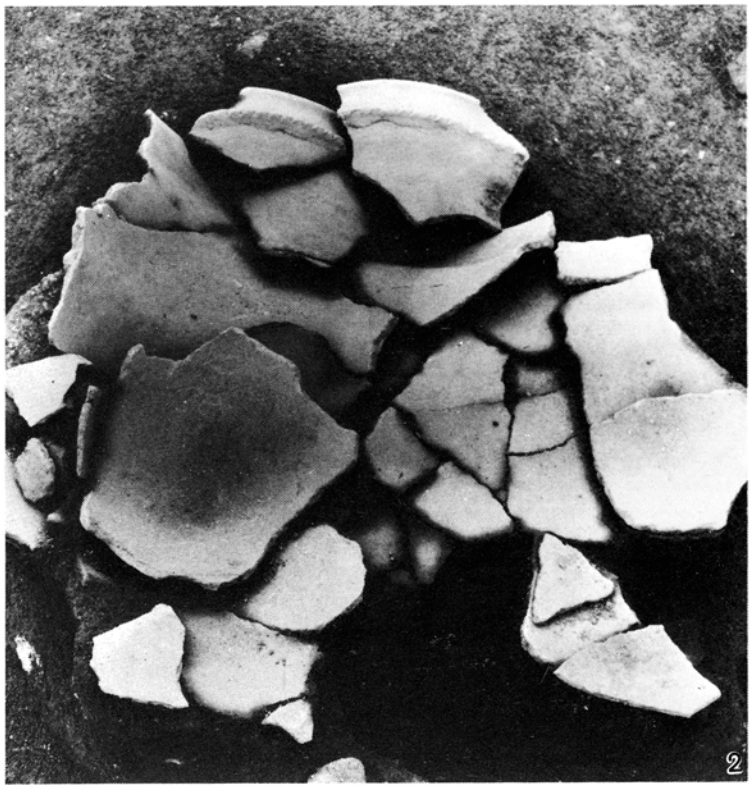


Fig. 27　D5区遺物出土状態　（1 a－1地点A溝　2 J 507）

(2)　Ｄ６区

Ｄ５区の北側で扇状地の中央部に位置する。溝と住居址の関係を追って2T，4Tと東西に二つのトレンチを設けた。

Ａ溝はＤ５区からＤ６区へつながり，2Tで最も西側へはり出し，試掘溝D6－D7で一部がカットされている。4Tでは次第に北東方向へカーブし，Ｄ７区へつづいている。

4Tの溝から遺物がまとまって出土した。石器では玄武岩製の太形蛤刃石斧，蛇紋岩の小形石斧二点，更にサヌカイトの石鏃がある。土器はＡ５区－Ｃ５区の遺物と変化ない。Fig.28－２ではＡ溝と複合する遺構が示されているが，その先後関係は未確認である。2Tで６軒，4Tで７軒以上の住居址の切り合いが観察された。

4－a地点の南壁寄りに3Tの方向に住居址の一部が検出され，2Tの北側までつづいている。3Tがこの住居址の中心となるのであろう。隣接する4－a～4－b地点に長方形プランの住居址がある。住居址の壁に沿ってピットが認められる保存良好な住居址である（Ｊ 608 ）が，他の遺構の切り合いは未発掘のため明らかでない。

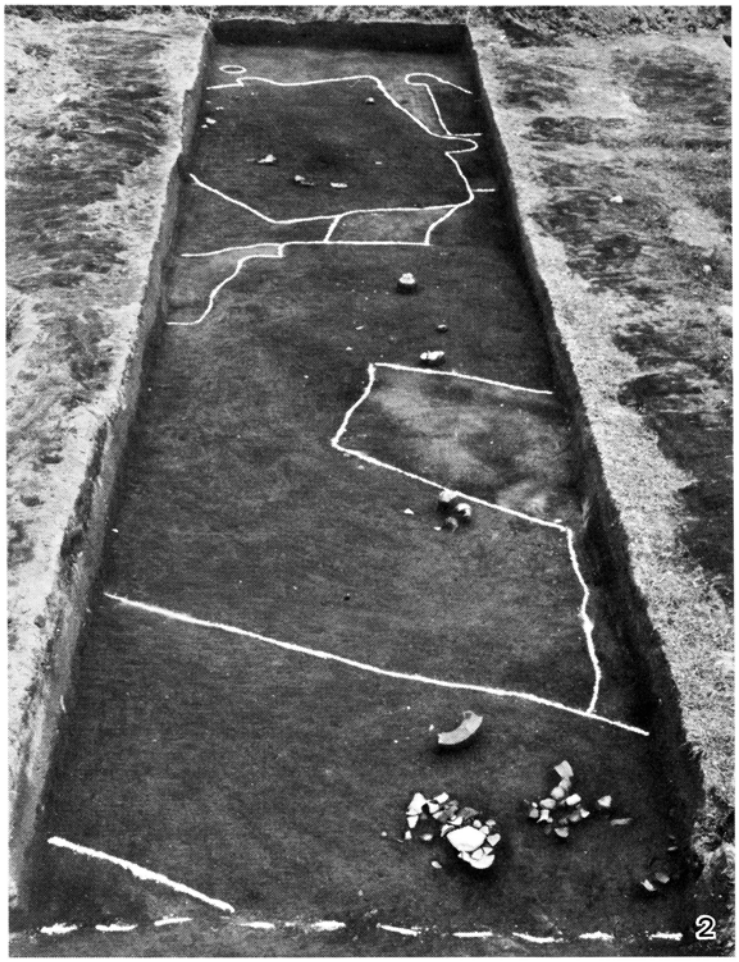


Fig. 28　Ｄ６区の調査　（１Ｄ6区全景　２Ｄ6区4Ｔ全景　西から）

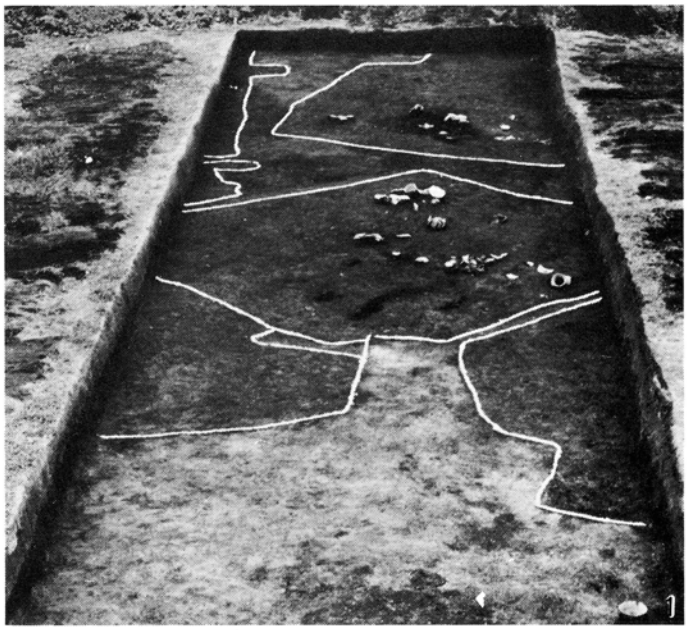
第604号住居址

2Tでは6軒の住居址を確認した。その中でJ 601とJ 604から炭化材が検出された。J 601は2Tの2－a地点にあり，東南側へつづいている。住居址の西側壁寄りに遺物のまとまりがあり，炭化材も一緒に検出された。

J 604は2T中央部から東に認められた住居址で，ほぼ全形を知ることができる。短辺5.0×長辺5.2mの正方形プランをしめし，西側にも住居址がある。N－S方向の一辺に平行して三列の炭化材が並列していた。中央は径10cm近いもので，他は径4－5cmと細い。ともに断面がまるく，原形をとどめている。住居址の建築部材が火災にあって炭化したものであろう。

遺物は住居址の中央部から東寄りにまとまって出土した。壺，台付甕，甑形土器等がある。台付甕は口縁部がやや外反し，器面に叩き目を残している。外面に丹塗りの痕跡をとどめているが，その上に二次焼成を受け煤が付着している（*Fig.*29－2）。

甑形土器は口縁を最大径とする口径15cmの小形のもので，丸底の底部には焼成前の穿孔がある（*Fig.*29－3, PL. 2－9）。A溝B5区aT出土の甑形土器（PL.1－9）に比べて小形化している。A溝との時期差をしめる資料とみることができよう。



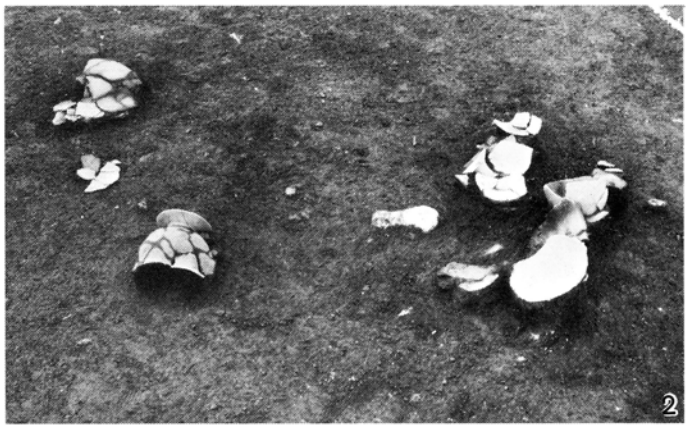


Fig. 29　第604号住居址　（1全景　2・3遺物出土状態）

(3)　E５区

二つの溝の関係を追求するため南北方向に２つのトレンチを設けてbT，dTとした。

bTでは数軒の住居址の切り合いが認められた。b－４からb－５地点に西側へつづく住居址の一部が認められた。南北方向を長辺とする長方形プランの住居址と考えられる。b－２地点では３軒以上の住居址が複合しているが，西側壁寄りの住居址をＪ516とした。

第516号住居址

Ｊ516覆土中には二個の完形に近い甕形土器があり，その中に埦形土器の完形品が検出され，同時期の共伴資料であることを示している(*Fig.*30－２)。甕形土器は内面箆削りで器壁をうすく仕上げ，胴部が球形に近く底部は丸底となるものである。埦形土器は口径11.3cm，器高6.1cmで，胎土，焼成とも良好である(*Fig.*50参照)。

第518号住居址

dTの北側から検出された長方形プランの住居址である。甕形土器は口縁部が最大径をしめし，底部が丸くなる小形品で，器面に叩き目が残されている。器台は下縁径に比べ，上縁径が著しく小さく，胎土，焼成とも良好である。住居址内から炭化材も検出されている。

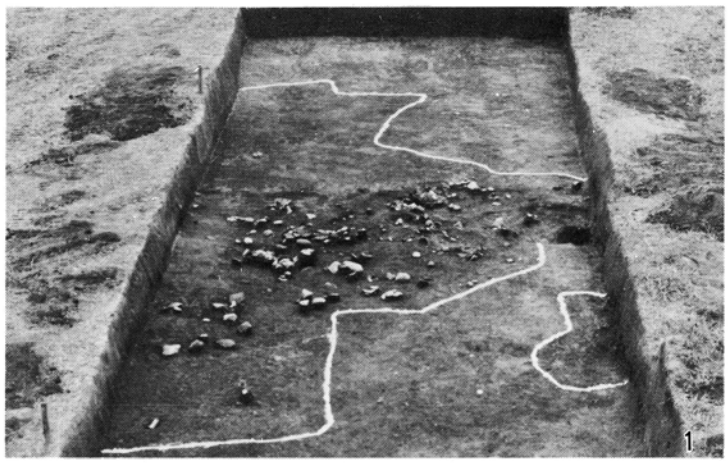


Fig. 30　E５区の調査　　(１・２ Ｊ516　３ Ｊ518)

Fig. 31－1　E10区全景　（南から）

(4)　E10区

扇状地の先端部に位置しており，これより北側には遺構のまとまりは検出されなかった。遺構が集中する北限と考えられる。西側はF10区で，墓域に面している。この区は6月の試掘調査の際，全面の遺構検出に努めた結果，11軒の住居址の切り合いが認められた。

第1001号住居址

E10区は南東隅の住居址で，長辺を南北方向とする長方形プランをしめす。ここでは住居址の時期を知る手がかりとして一部発掘した結果，甕形土器，甑，小形丸底壺等豊富な遺物が覆土中に含まれていた。甕は内面箆削りの器壁のうすいもので胴部は球形に近い。口縁部がわずかに肥厚する。

甑形土器は外反する口縁部に最大径があり，器高12cm前後の小形のものであ

Fig. 31－2　第1001号住居址の調査風景　（48年6月）

る。器面に粗い叩き目を残している。同様な器形で底部に穿孔しないものもみられる。台付甕にも外面に叩きが施され，口縁部は直口している。

第1002号住居址

E10区のやや北側で検出され，東側はJ 1と，西側はJ 106と切り合っており全形を知ることはできないが，須恵器を伴出する住居址として注意されるものである。須恵器は*Fig.* 42にしめすもので5世紀代と考えられる住居址である。

第1003号住居址

E10区中央よりやや南にあり，7.5×2.5mの長方形プランをしめし，長辺は東西方向を向いている。住居址の中央部から多量の土器が検出された。壺には口縁部が外反するものと二重口縁をなすものがある。器台は器高22.0cmと大形のものでくびれ部が上方にある。甕形土器は口縁部が肥厚し，胴部が球形に近く，内面箆削り仕上げのものである。いずれも覆土中の遺物で，遺構内まで発掘が進んでいないので，詳細は不明であるがこの種の甕形土器を伴出する住居址としてJ 507，J 516，J 1001等がある。甑形土器径10cm前後の小形品でJ 604，J 1001出土例と同様なものである。

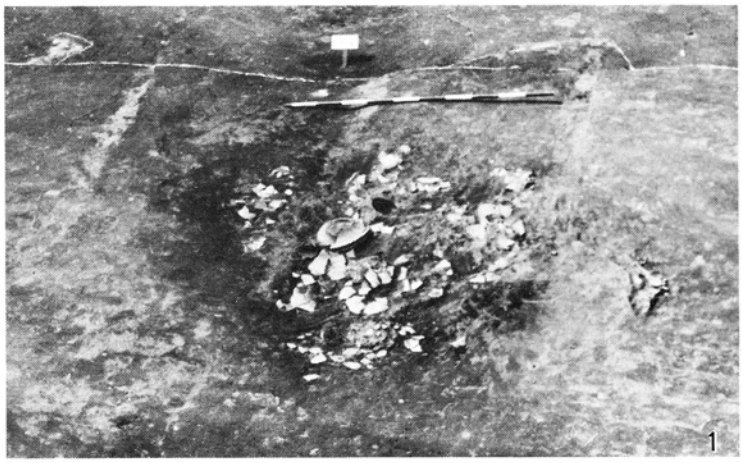


Fig. 32　第1003号住居址遺物出土状態

3　墓域の調査

試掘調査によりE10－F10列で箱式石棺（S－1），E9－E10列で土坑墓，D9－E9列で甕棺を検出した。6月のF10区の調査では箱式石棺6基を発見した。その後F8－F10区を拡張して遺構の検出に努めた結果，箱式石棺，木棺，配石遺構を追加することになった。F10区では甕棺と箱式石棺の切り合いも確められた。

墓制には甕棺，木棺，土坑，箱式石棺と各種認められるが，箱式石棺が最も多い。遺構は今のところ台地の西北端部に集中しているが，E8区，E9区へ広がる可能性がある。F8区～F10区では住居址等他の遺構は検出されておらず，墓地として占地的な様相を示している。従って集落とは区別されていたと考えられ，これを墓域として取扱うことにした。

甕棺はD7区5－a地点（K－2），E7区5－e地点（K－1），F10区c－3地点（K－3）と点在している。K－2はA溝内に位置している。ところが，箱式石棺は扇状地の西側端部に沿って集中しており，墓域としての占地的な性格が一層強まっている。箱式石棺には土師器を副葬するものがあり，住居址の時期に比定される。現在確認されているのは次のとおりである。

箱式石棺　10基　　甕棺・壺棺　3基　　土坑墓　1基　　木棺　1基　　配石遺構　1

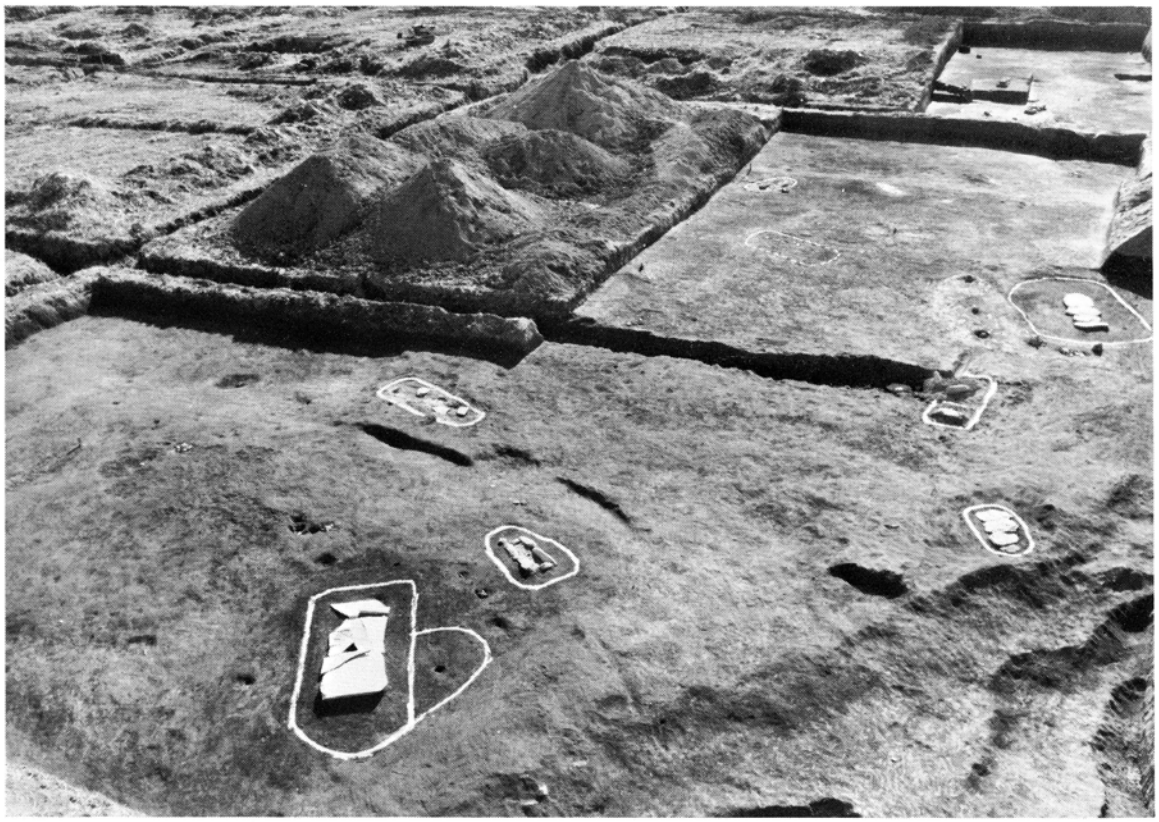


Fig. 33　F8区～F10区全景　（北から）

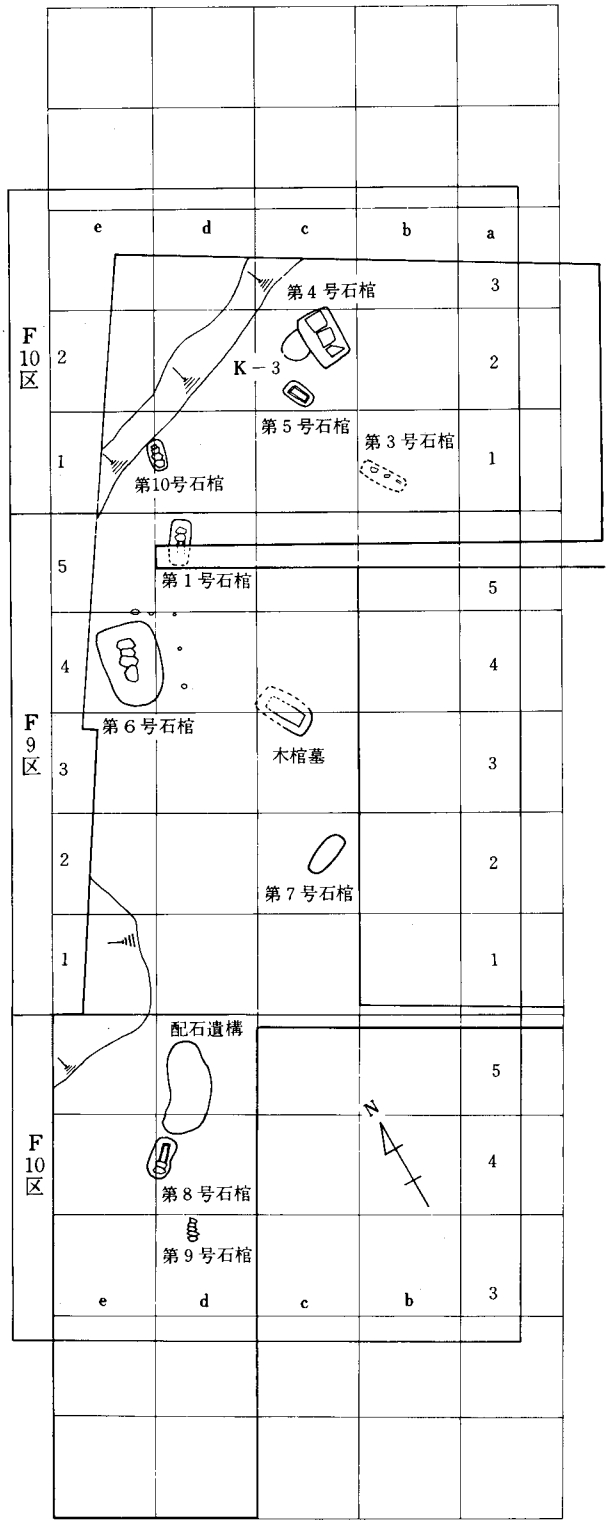


Fig. 34　F８区～F10区遺構配置図　　(縮尺 1／300)

(1)　遺構の配置

F８区～F10区で検出された遺構を左図にしめした。

F８区には箱式石棺二基と配石遺構がある。d－5地点の遺構には高坏が出土しており，墓坑とは異なる祭祀的な遺構ではないかと考えられる。S－9は墓坑内に鉄器を，S－10は棺外に小形丸底壺を副葬している。いずれも主軸は南北方向をさしている。

F９区には箱式石棺三基，木棺一基が検出された。S－1は試掘の際，ユンボにより棺材が掘り出され，棺材等の精査中に鏡片，玉類が発見されたものである。S－6の石棺内はすでに盗掘されていたが，墓坑の外側に沿って土器が供献された状態が明らかとなった。S－7は棺材の破片を残すだけである。c－3地点の遺構は墓坑内に粘土の痕跡が残っているのみであるが，粘土は二列に平行し，小口が直角に合わされていることから木棺と考えられるものである。

F10区には箱式石棺５基と甕棺１基がある。S－3からは鏡・玉類が検出された。S－5はガラス小玉を副葬する小児棺である。S－4は甕棺の墓坑を切って作られている。S－2はa－5地点から棺材のみが発見されている。これ以外にE７区e－5地点から棺材が試掘の際発見されている。

(2) 箱式石棺

第1号石棺

F9区d−5地点で試掘調査時に発見した。南北方向に主軸をとり，石棺は花崗岩を用いる。石棺は幅35cm，長さ155cm（内のり），墓坑は *Fig*35−1のように隅丸長方形をなす。

第3号石棺

48年6月，F10区中央部に山積みした表土のブルトーザーによる排土中，ブルドーザーが棺をひっかけ，棺材と鏡片の一部が発見された。石棺周囲の精査の結果，勾玉，管玉，鏡片の一部を追加できたが，鏡は¼程度しか接合できなかった。

石棺は床面が残存するのみで，石材も一部分しか残っていなく，発掘前に石棺の上部を欠失していたことがわかった。

第4号石棺

F10区c−2地点にある。出土石棺中最も大型なものである。3枚の蓋石をもち，内のり，185×41cmを計る。棺内はすでに盗掘を受け遺物は残存しない。S−3と同一石材である。また石棺の西に接して甕棺があり，甕棺墓坑を石棺墓坑が切っている。

第5号石棺

主軸は北西方向をしめす。蓋石を欠くが，長さは82cmをはかり，小児棺と思われる。幅は北西側で24cm，南東側19cmをはかる。長軸の西南壁寄り，中央部付近からガラス小玉を検出した。棺材は花崗岩である。

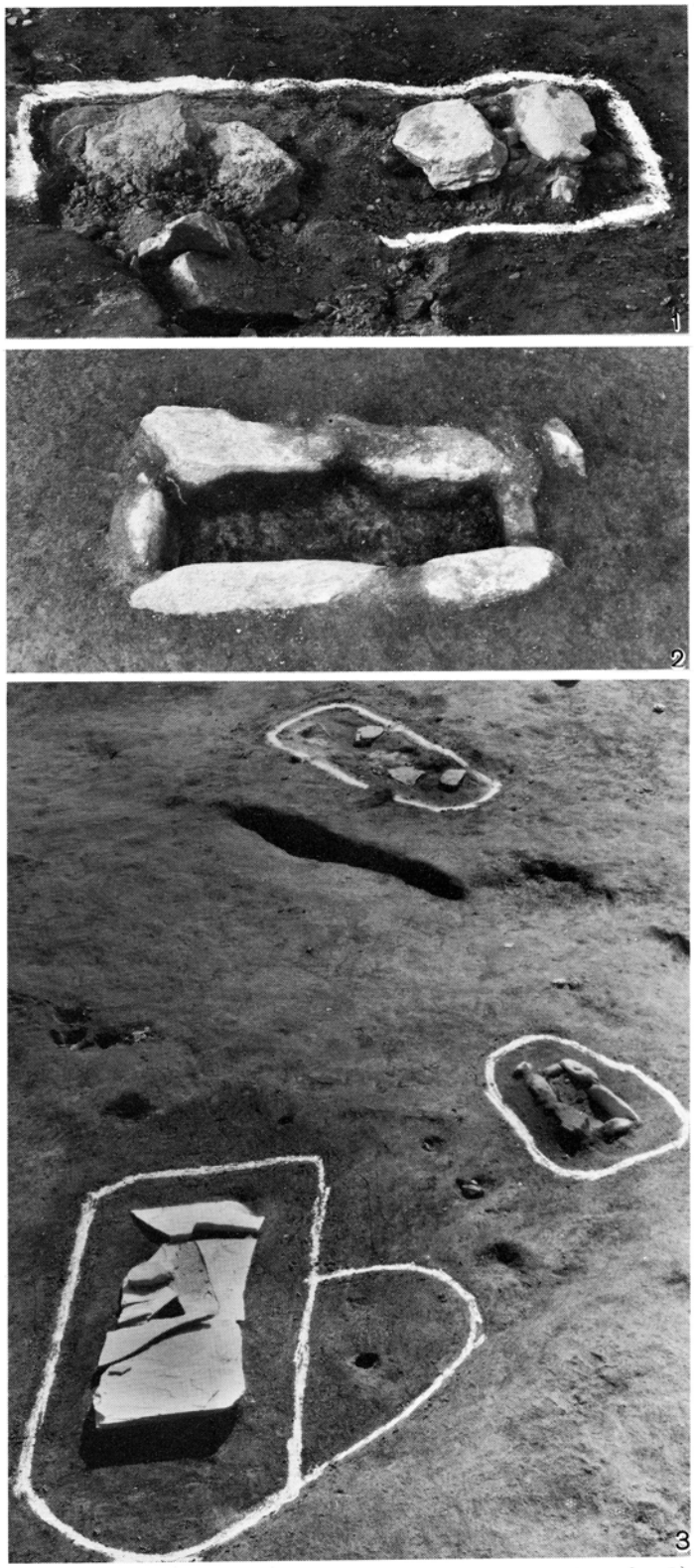


Fig. 35　F10区の箱式石棺（1 S−1　2 S−5　3 S−3〜S−5）

S－1からS－5までの箱式石棺から出土した遺物は次のとおりである。

第1号石棺

鏡（獣帯鏡，鏡片）

勾玉　1　　管玉　7

素環頭刀子　　1

鉄刀　　1

第3号石棺

鏡（内行花文鏡）

勾玉　1　　管玉　1

ガラス小玉　2

第5号石棺

ガラス小玉　11

*Fig.*36の上2列はS－1出土，3列目はS－3出土，4列目は第5号石棺出土のものである。

S－1出土の勾玉は硬玉製で全長8.2㎜の小形品である。両側から穿孔している。管玉は碧玉製で，長さ14.8㎜を最大とし，長さ7.0㎜を最小とする。外径2.5㎜前後のものである。

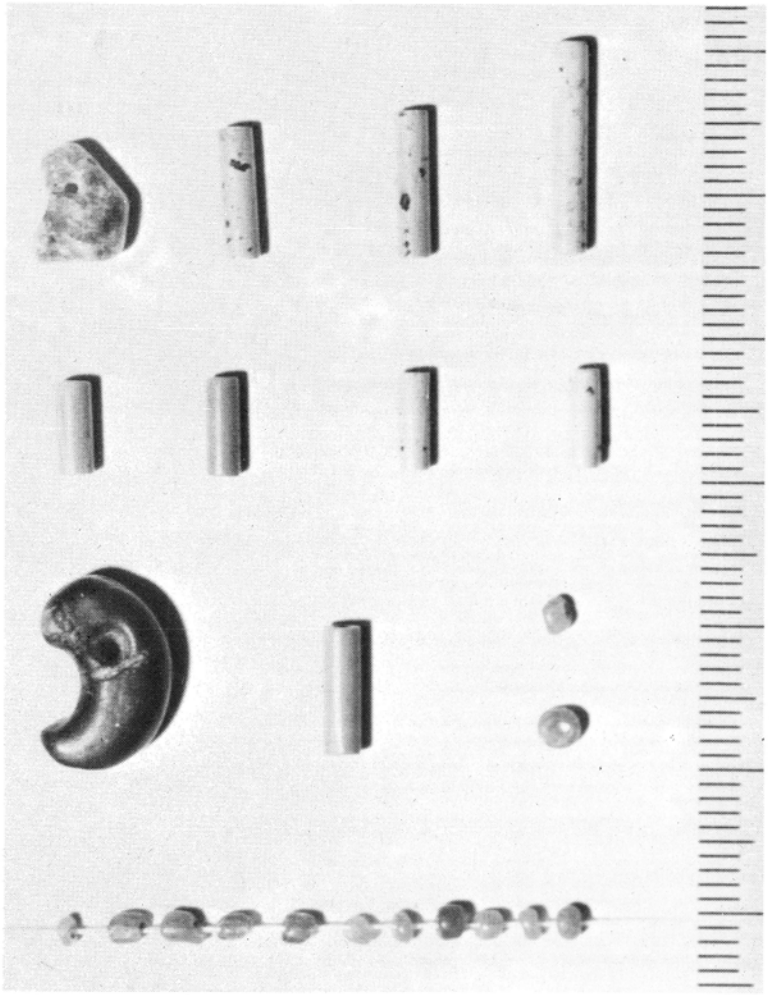


Fig. 36　箱式石棺出土玉類　　（縮尺1×2）

S－3出土勾玉は全長13.5㎜，厚さ4.4㎜をはかり，表面はよく磨かれ全体をC字形に仕上げている。碧玉製で両面から穿孔している。管玉は長さ9.0㎜，外径2.8㎜で，S－1と同じく碧玉製のものである。ガラス小玉は2個とも淡緑色を呈する。

S－5出土のガラス小玉は全部で11個であるが，色から2種類に区分できる。

淡緑色　4個　　青色　7個

長さ3㎜，径2㎜以下で多小バラつきがある。

第1号石棺出土鉄器のうち素環頭刀子は環頭部がかろうじて確められるもの，鉄刀は鋒の一部でともに全形を知ることはできない。なお，S－3出土勾玉と同一石材の石核（*Fig.*　44－4）がJ1001から出土しており，勾玉の製作過程をしめす資料とみることも可能である。

第1号石棺出土鏡

S－1出土の鏡は半肉彫の獣帯鏡である。鈕を含む全体の¼程度の鏡片であるが周囲は磨滅している。鏡片の副葬である。1.6cmの鈕のまわりに一圏をめぐらし，内区は乳座の間に獣形を鋳出している。銘帯には文字の一部がみられるが，判読できない。外区は幅0.55cmの斜行櫛歯文となり平縁につづいている。鋳あがりは良く舶載鏡である。推定復元径は約9.5cm。

第3号石棺出土鏡

S－3出土の鏡は細片化し，鈕，内区，外区の大部分を欠いているが，復元によりほぼ全体の文様構成を知ることができる。面径10.6cmの内行花文鏡である。内区は八花文となり，四つの蝙蝠を復元できる。無銘で縁は，平縁でおわる。縁幅1.1cm縁の厚さ0.25cm。舶載鏡と考えられる。

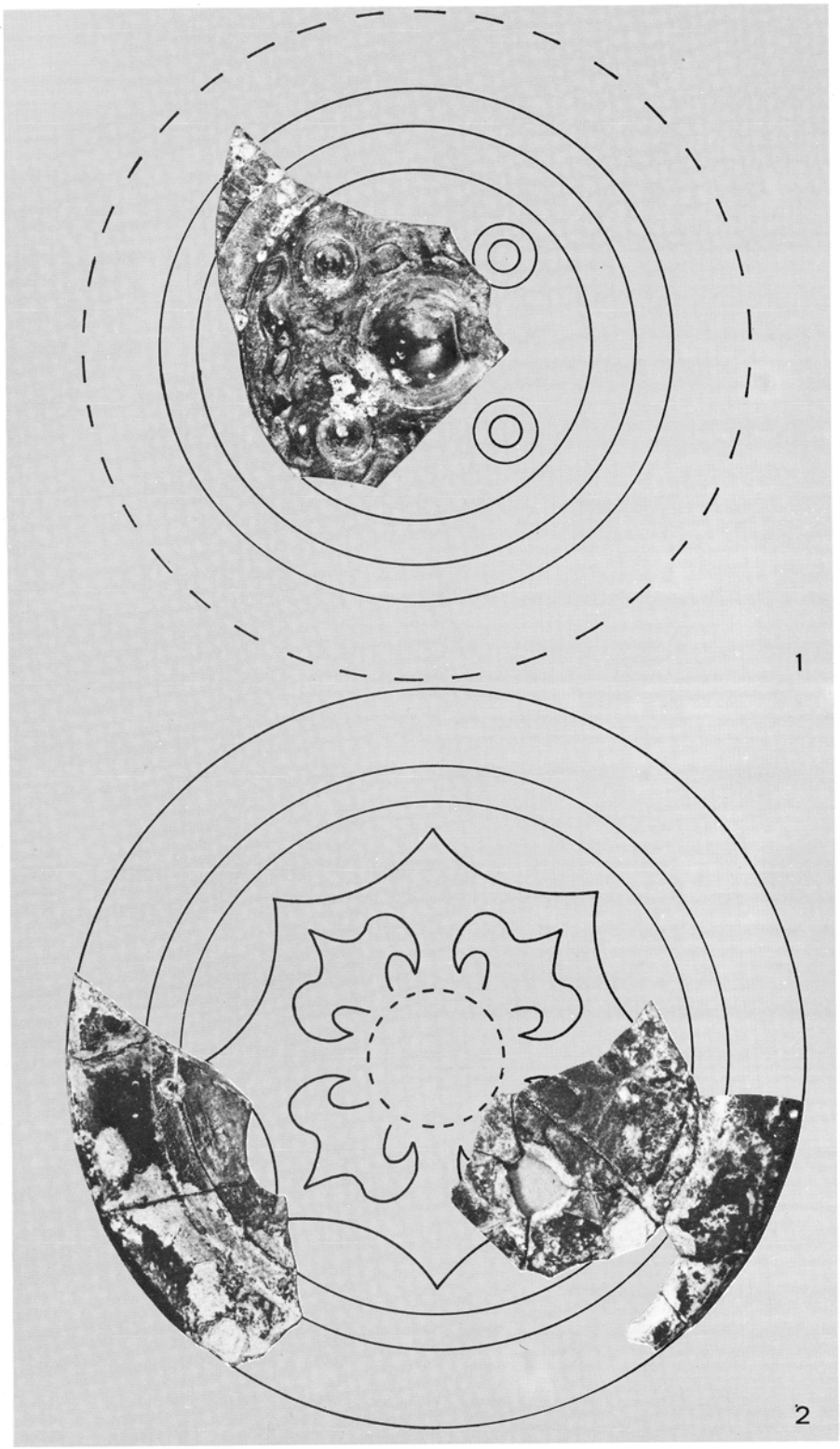
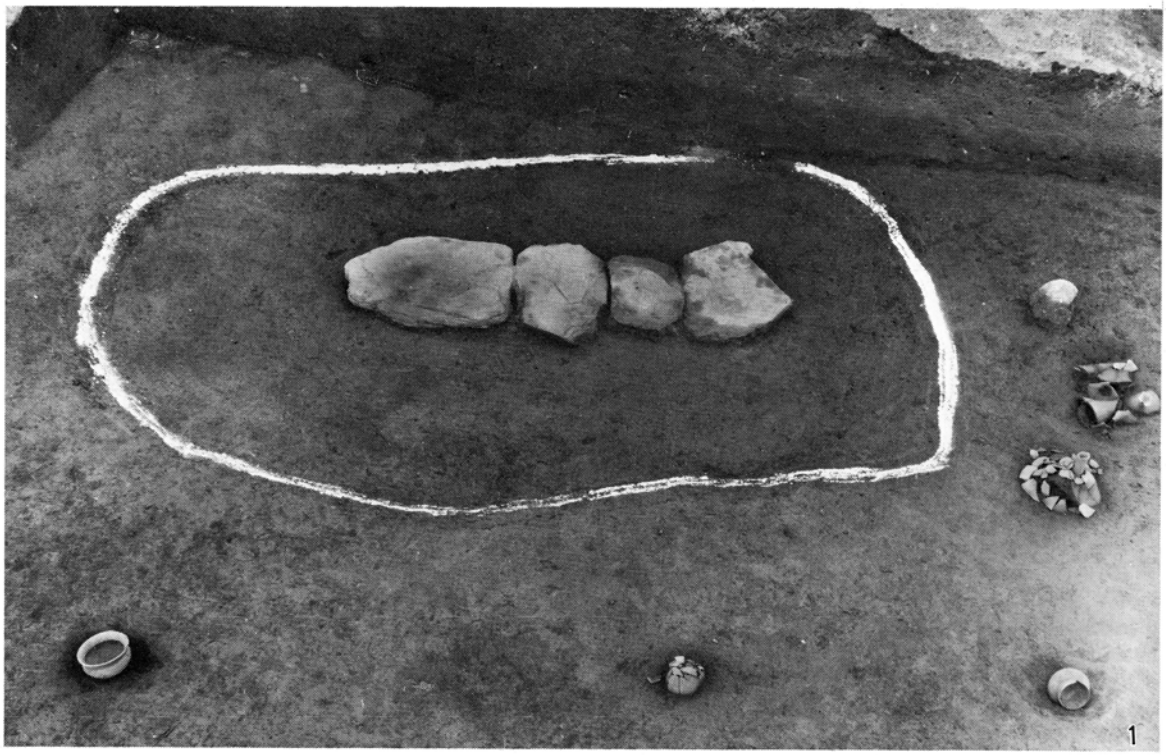


Fig. 37　箱式石棺出土鏡　（1 S－1　2 S－3　縮尺1×1）



第6号石棺

F9区e−4地点にあり，試掘調査のとき石棺が検出され，その後F8区〜F10区の調査で，墓坑の周囲に土器が供献されている状態が確認された。

棺内は167×34mをはかり，S−4とともにもっとも大形なものである。主軸は南北方向をさし，主軸から2.5m東側に主軸線と平行して3個の供献土器がある。*Fig.*39−2の壺の中には丹が口縁近くまで認められ，丹入のまま供献した状態を示している。北側辺には坏部を下にした高坏と高坏3，器台を一括した地点がある。墓坑の西側は発掘できなかったので土器の有無を確めていない。棺内は盗掘を受けており遺物は検出されなかった。

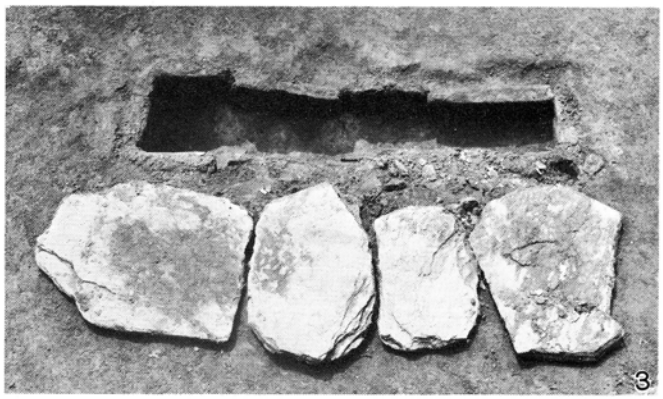


Fig. 38　第6号石棺発掘状況

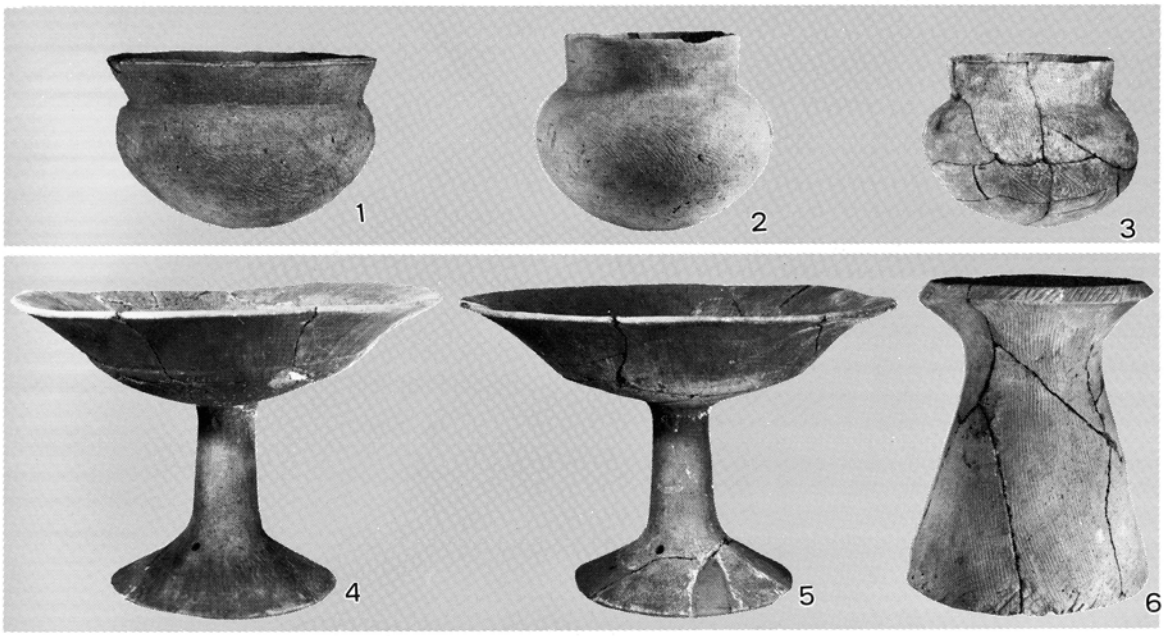


Fig.39－1　第6号石棺供献土器　（縮尺　1/5）

1は口径17.7cm，器高11.9cmの広口壺，2は口径11.8cm，器高13.6cm，3は口径10.8cm，器高11.8cmの直口壺である。いずれも胎土は精選され，焼成良好な完形品で内外とも刷毛目調整がなされる。高坏は4個体検出されたが，内2個体を復元した。他も4，5と同一器形，大きさのものである。4は口径29.7cm，器高20.4cm，5は口径29.0cm，器高21.0cmと大きさもほぼ一致し，施文法も同じである。坏部内面には暗文が施されるが，3ヶ所に3列の雷文が認められる。（*Fig.*43－9）

6は器台で上縁径15.2cm，下縁径17.7cm，器高21.3cmをはかり上縁口唇部に刻目を施す。器形・施文法ともA溝B5区aT出土の器台と類似している（*Fig.*17－1，*PL.*1－18）。

これら土器は第6号棺石棺に供献された一括遺物と考えられるもので，第6号石棺の年代を知る手がかりとすることができる。

第6号石棺東南側の遺構はP.34に記述したように木棺墓と考えられるものである。棺内未掘（*Fig.*39－2）。

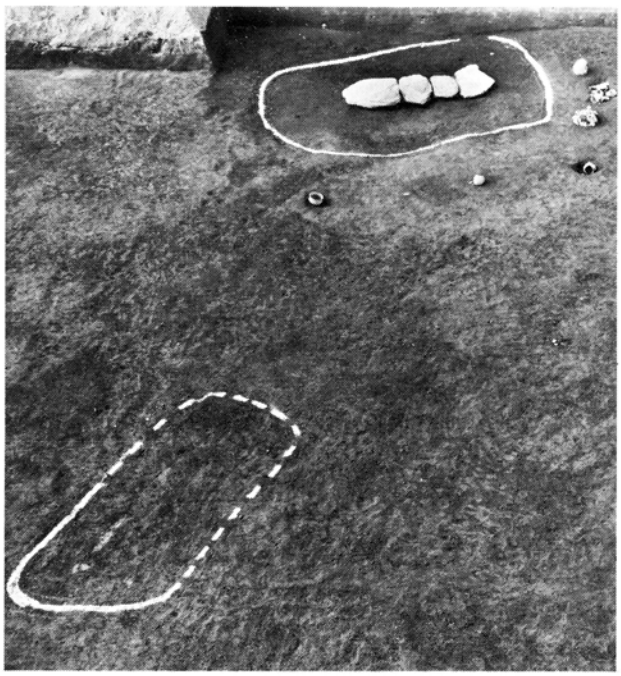
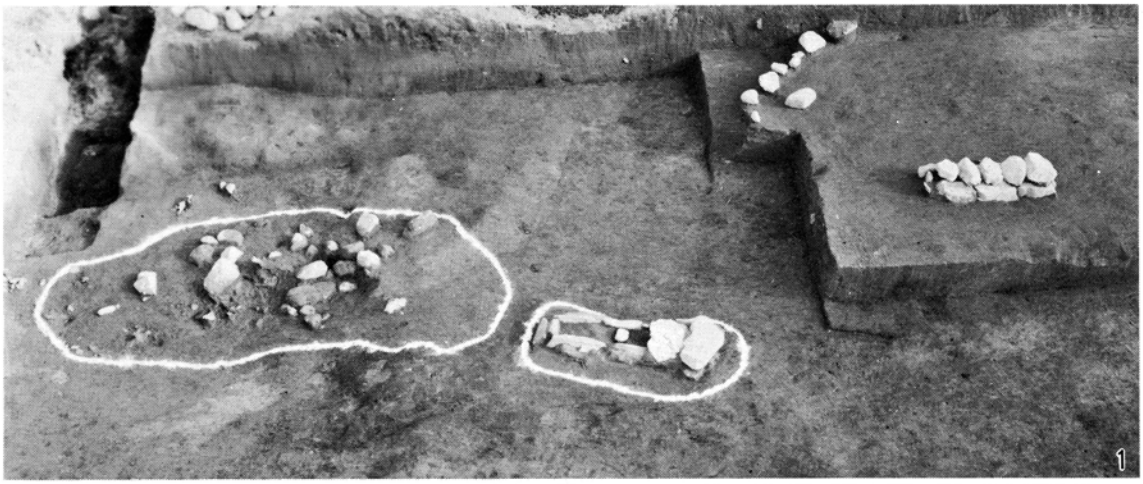


Fig. 39－2　木棺墓と第6号石棺の関係　（東から）



Ｆ８区ではdT，eTを発掘し，墓域の広がりを追求した結果，箱式石棺二基と配石遺構が検出された。

箱式石棺はＳ－９（Ｆ８区ｄ－３地点)がもっとも南側へ位置しており，これより南側には今のところみられないようである．Ｅ７区eT（試掘溝Ｅ６－Ｅ７）に箱式石棺の棺材が検出されているので，扇状地の中央部への広がりを想定することができよう。

第８号石棺

主軸は南北方向にあり，南側に二枚の蓋石が残存している。棺材は同一石材ではなく花崗岩と玄武岩を組合わせている。140×23cmの長方形で，西側の墓坑内に鉄器が検出された。棺外副葬と考えられるものである。棺内未掘。

第９号石棺

４個の花崗岩を蓋石としている。側壁は各３個を南北に並列している。Ｓ－８より一段高く位置しており，墓域は検出されなかった。東側壁の外側に土師器が出土した。小形丸底壺で棺外副葬品と考えられる。

Fig. 40　Ｆ８区の箱式石棺（1 Ｆ８区 全景 2 Ｓ－８ 3 Ｓ－９）

第10号石棺

第10号石棺はＦ10区ｅ－1地点から発見されたもので，墓坑は140×80cmの隅丸長方形をなす。４枚の板状の石材を蓋石としている。未発掘。

(3)　甕棺，壺棺

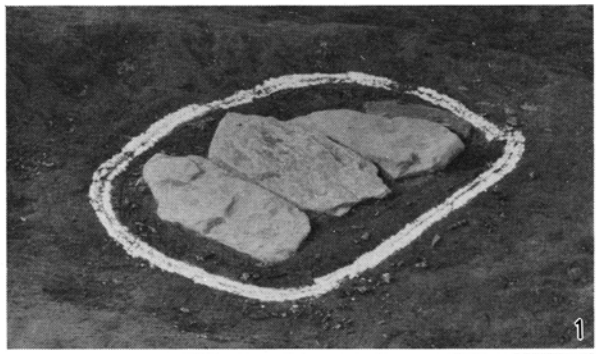
*Fig.*41－２は試掘調査の際Ｄ８－Ｅ８列で発見された甕棺（Ｋ－１）で，甕棺の周囲に円礫がみられるのが注意される。胴部にたが状の断面コ字状の突帯をめぐらすものである。

壺棺（Ｋ－２）

Ｂ６－Ｃ６列の試掘のとき検出された。Ｄ７区５－ｅ地点にあたり，Ａ溝の内側に位置している。二個の大形壺を組合わせて棺としている。上は下と同じ器形の壺を胴部突帯部から打欠き，底部の方をかぶせて蓋に転用している。従って鉢をかぶせたような形をしている。注意すべきことは，壺の胴部下半を蓋とし，口縁部片が墓坑上に認められる点である。蓋としている底部片と口縁部片は同一個体であり，棺を埋めたあと墓坑上に口縁部片を供献したものであろう。壺の底部近くに丹が認められたが遺物は検出されなかった（*Fig.*41－３）。

口縁が外反し口唇部に斜めの刻目を施している。胴部は球形をなし，胴部下半に２列のコ字状突帯をめぐらしている。頭部にも２列の突帯をはりつけている（*PL.* 1－23）。

Ｋ－３はＳ－４の西側で発見された合口甕棺である。



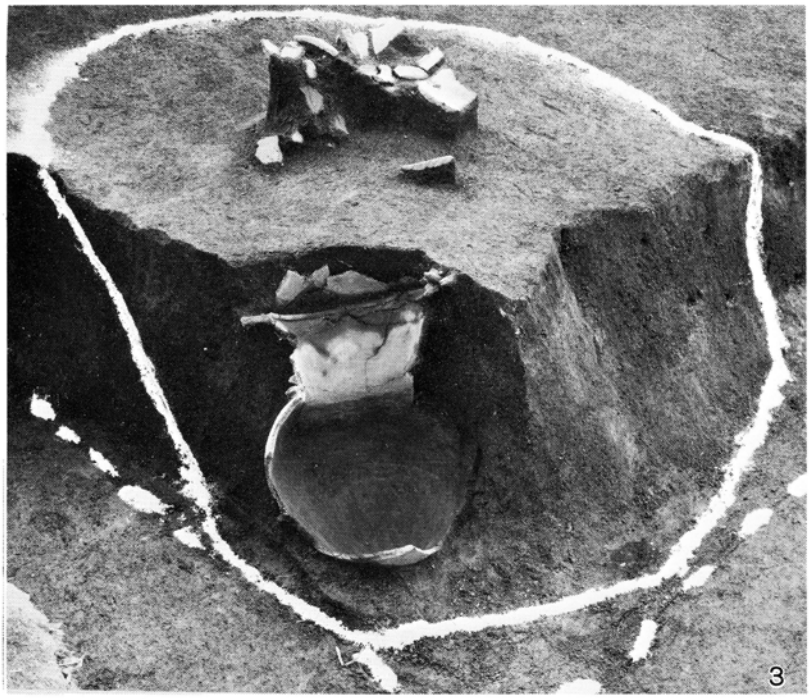


Fig. 41　第10号石棺・甕棺・壺棺出土状態（１Ｓ－10　２Ｋ－１　３Ｋ－２）

Ⅳ　出土遺物

1　土　　器

溝，住居址，墓域の調査により夥しい遺物が検出された。特に溝の中には大量の土器が包含されていた。溝は大小二つ検出されたが，溝内の土器には時期差は認められず，同一時期として差支えない。弥生終末期と考えられる。

溝以外の土器は大部分が住居址覆土中のものである。大別して二つの時期に分けられる。一つは古式土師器を伴なう住居址で，今のところ大半の住居址はこの時期に比定される。他は須恵器を伴なう住居址であるが，数は極めて少ない。遺構として検出されたのはこの時期までで，一部新しい資料が表土中に含まれているが遺構を明らかにしうるものはない。

(1)　溝の土器―弥生式土器―

PL. 1の土器はA溝出土土器の中から完形品および完形品に近い壺，高坏，鉢，甑，甕，器台を抽出したもので，各器形の特徴をしめす土器とみるができる。

壺には二種類ある。1～3は小形の短頸壺で，器面が篦磨きされた良質の土器である。4～6は袋状口縁の壺で，口縁部の断面が逆く字形を呈する大形品である。胴部は6のようにあまり張り出さないものと，*Fig.*19－2のように球形に近いものがある。

高坏(7)は坏の上位に接合部があり反転して外反するが，立ちあがりが短かい点に特徴がある。脚部に3～4孔を穿っている。

甕には台付甕と甕形土器の二種類がある。台付甕(11～13)は短かい脚台を有し，口縁部が外反する。胴部が短かく張り出すもの(11)と胴長で張り出さないものが(12)がある。13は篦磨きされた良質の土器で直口する口縁部へつながる。12は器面に叩き目を施す。甕(14～17)は口縁部が外反し，長胴形で底部は平底をなす。大形のものから小形品まで最も出土量の多い器種で，器面に粗い叩き目を施すものと刷毛目仕上げのものがある。8は口縁部が外反する鉢形土器，9－10は甑形土器である。甑の底部には内側から焼成前の穿孔があり，底部付近は二次焼成の痕跡が明瞭である。

器台には上縁が広がるもの(18～20)と上端の一方が突き出したもの(21・22)がある。前者のうち18は上縁端部に斜め方向の刻目を施し，19は篦磨きされた良質のものである。後者はいわゆる沓形器台と呼ばれているもので，器面に叩き目を有するものとないものがあり，形態，大きさともバラエティに富む。23はD7区5－e地点出土の壺棺で，A溝内に位置しA溝内の土器と同時期のものとして取上げた。外側に大きく外反する口縁部に斜めの刻目を施し，頸部と球形の胴部下半に各二条のコ字状突帯をめぐらす。

(2)　住居址覆土中の土器―古式土師器―

PL. 2の1～24は壺，高坏，鉢，甑，甕，器台で，*PL.* 1と対比できる完形品を抽出した。25～35は胎土焼成とも良好な赤褐色の一群の土器で，器台，埦，壺がある。

壺には口縁部が外反するもの(1～3)と二重口縁をなすもの(4～6)の二種類がある。底部はいずれも丸底となる。前者のうち3は胴部が球形をなすもので，この器種には胴の肩部に竹管文を施すもの

(*Fig.*43－8)がある。後者は口縁部が直立ぎみに立ちあがるもので，接合部に刻目を施す。6は頸部がしまらずそのまま胴部へつながる大形のもので，器面に叩き目を残し，胴部突帯にも刻目を施す。高坏は坏部が大きく外反するもので，A溝出土高坏と対照的である。甑(8～11)は口径13～15cm，器高12～14cm前後のもので，溝のものより小形化している。器面に叩きを施し，底部は尖りぎみの丸底を呈する。12～14は鉢で半球形状を呈する。16は口縁部が直口する台付鉢といえるもので，器面に叩きが残る。15は口縁部が外反する台付甕で，内外に丹塗がみられる。

甕には二種類ある。17は口縁が外反し，長胴形で底部は丸底となる。器面に叩きを施すもので，溝の甕形土器の系譜をひくものであろう。18－20は外反する口縁部がわずかに肥厚し，端部を内側につまみあげておさめる。胴部は球形に近いもの(20)と，胴部最大径が肩部にあるもの(18・19)がある。内面は箆削りにより器壁をうすく仕上げている。18は丸底であるが19は丸底に近い平底を有するものである。20は胴部下半を欠くが19に近いものであろう。

器台には21～24のように各種ある。

25は鼓形器台で，上縁径，下縁径とも一致する。内外とも箆でていねいに削って仕上げ，上縁内面には暗文がみられる。26～28は埦で，箆研磨された良質の土器である。29は小形丸底壺，30は口縁部が直口する丸底壺である。31・32は台付埦，33は刷毛目仕上げの器台である。34・35は口縁が直口する小形の埦で，いずれも赤褐色を呈する焼成良好な土器である。

(3) 住居址覆土中の土器—須恵器—

須恵器を伴出する住居址は少なく，E10区J1002，E4区3－b地点の2ヶ所以外に明らかなものはない。

*Fig.*42はJ1002出土須恵器のうち坏蓋，高坏である。1～3は坏の口径13cm，器高3.5cm前後のもの，4は櫛描波状文のみられる無蓋高坏，5は脚部の3ヶ所に透しのある高坏で，I～II期に比定され，5世紀代と考えられるものである。E4区3－b地点にはかまどを付設する住居址があり，須恵器が出土している。須恵器はIII期に属するもので，6世紀代と考えられる。

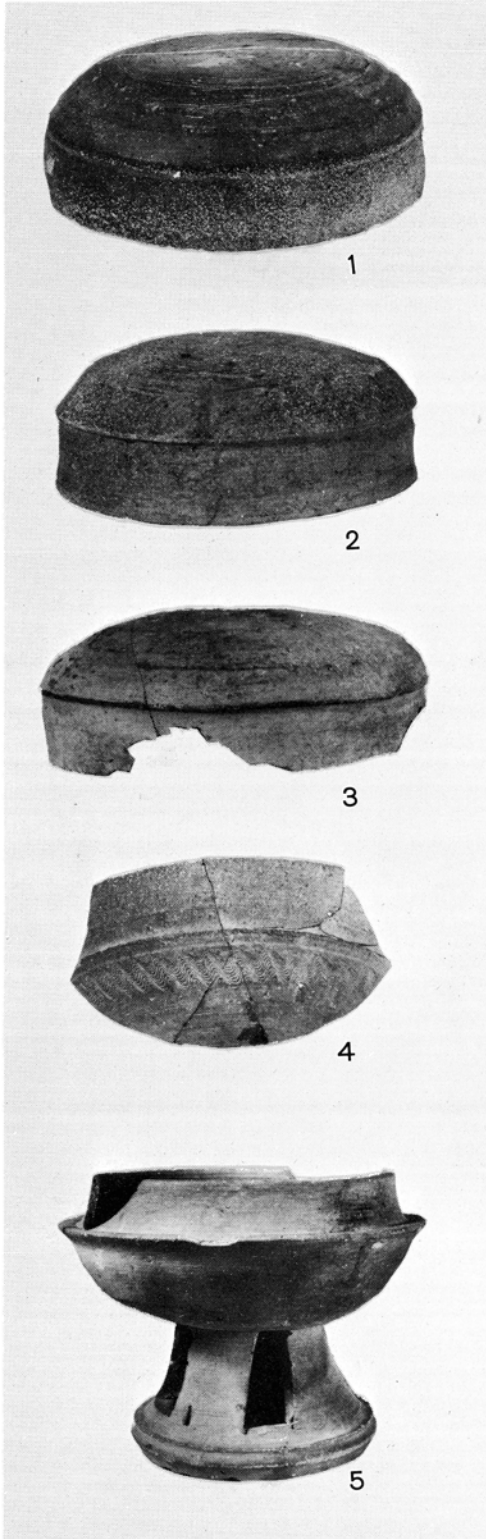


Fig. 42　第1002号住居址出土須恵器(縮尺2/5)

2　土器の文様

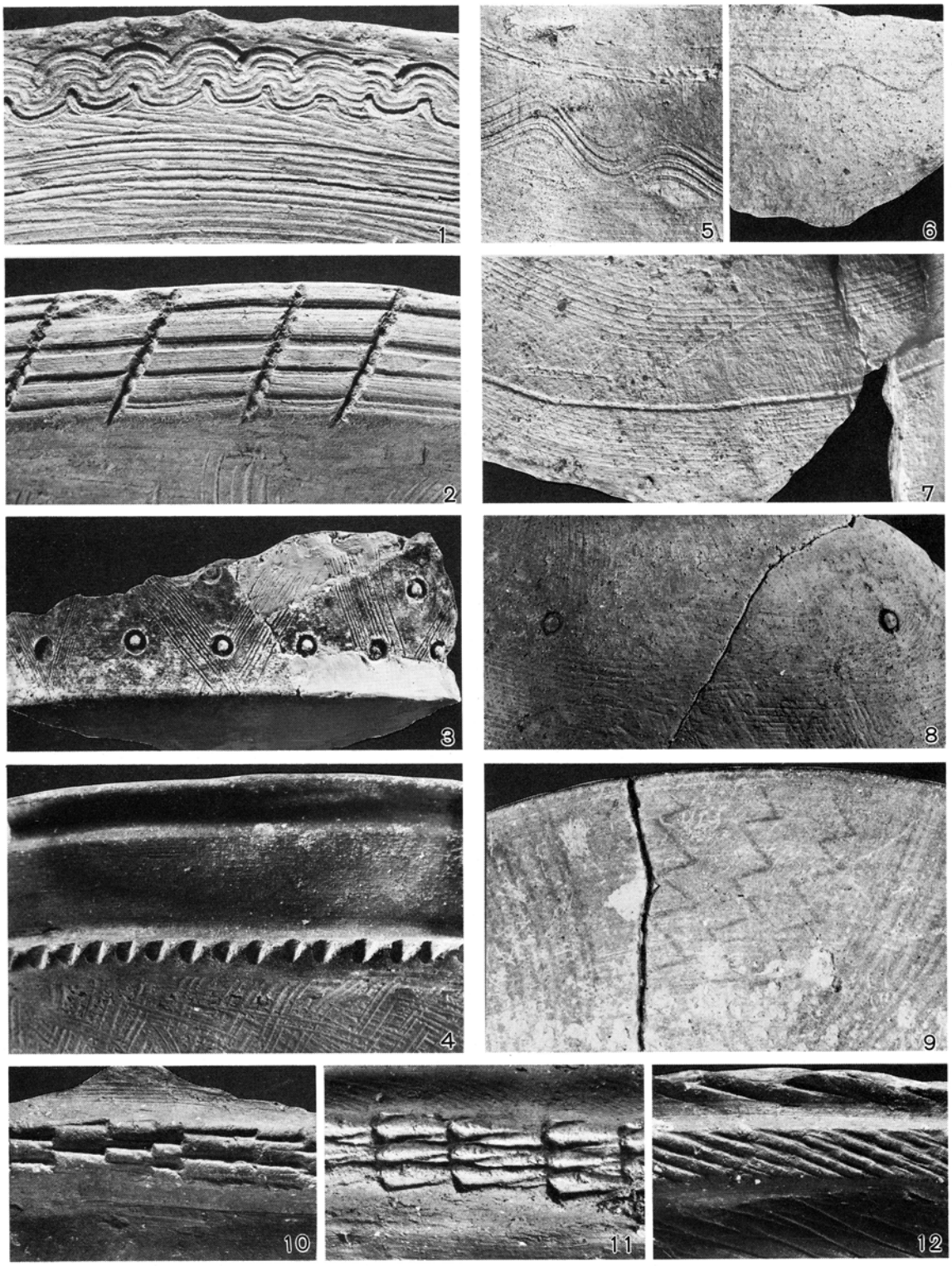


Fig. 43　土器の文様　（説明はP45）

3　石　　器

A溝・B溝からかなりの石器が出土した。石鏃，石斧，石錘，石包丁のほか，凹石，磨石，砥石などがある。溝中から石器とともに鉄器も検出されたが，鉄器よりも石器の方が出土例が多い。住居址から多くの砥石が出土している。*Fig.*44－4は石核で，剥離痕が認められるものである。

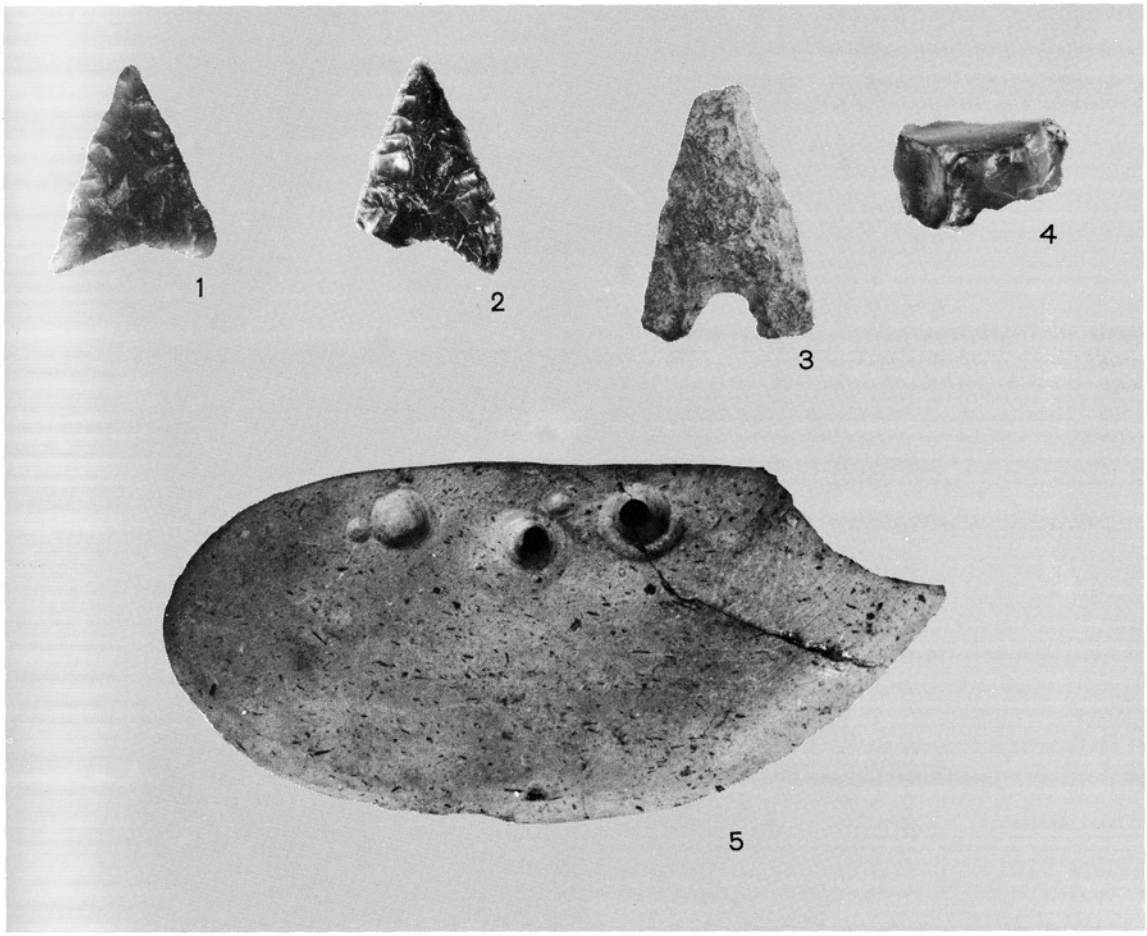


*Fig.*44　石器(1)　石鏃・石包丁　　（縮尺1/1）

1　E5区aT　A溝　黒耀石　2　B5区cT　黒耀石　3　D6区4T　A溝　サヌカイト（1～3石鏃）
4　E10区　J1001　（石核）　5　B8区　表採(石包丁)

---

*Fig.*43　土器の文様（P.44）　〈10－12は甕の胴部突帯〉

1　A5区あT　A溝　壺　2　C5区aT　A溝　壺　3　E4区4－d地点　壺　4　D5区　J509　壺
5　E10区　J1001　甕　6　E10区　J1001　甕　7　E10区　J1003　甕　8　D7区　J703　甕
9　F9区　S－6　高坏　10　B5区　A溝　甕　11　D5区　J509　甕　12　B5区　A溝　甕

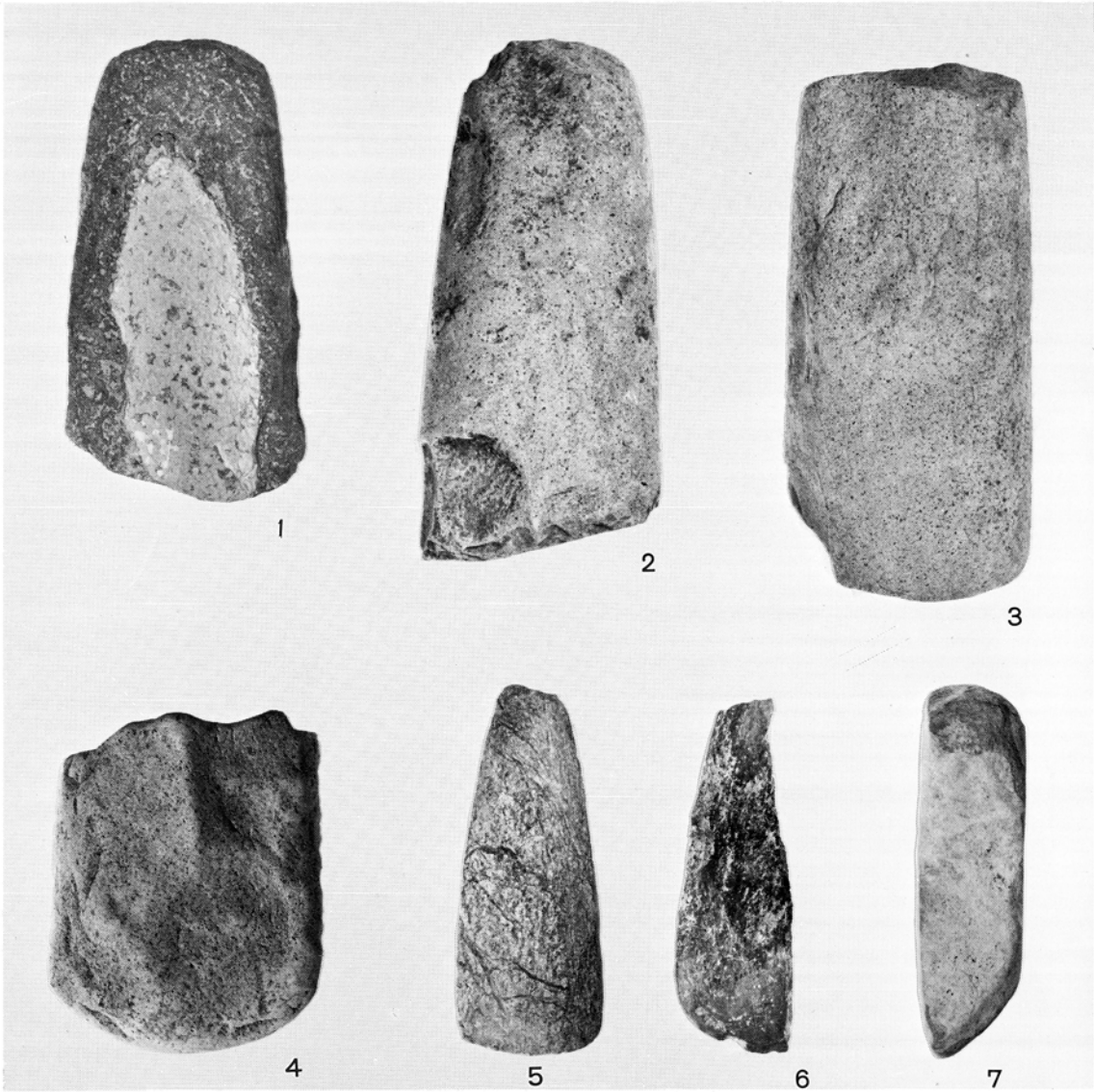


Fig. 45　石器(2)　石斧　　（縮尺½）

1　B５区eT　A溝　玄武岩　　2　D６区４T　A溝　玄武岩　　3　A５区うT　A溝　玄武岩

4　B５区dT　A溝　玄武岩　　5　D６区４T　A溝　蛇紋岩　　6　D６区４T　A溝　蛇紋岩

7　F４区２T　B溝　粘板岩

石斧　大形のものと小形のものがある。１－４は玄武岩，５・６は蛇紋岩，７は砂岩を石材とする。２－４は太形蛤刃の磨製石斧は今山産の玄武岩であろう。７は抉入石斧である。

石錘　石材は６を除いて全て滑石製である。有孔のものとすり切りのものがある。１～６は重さ112g～300gのもの，７～９は重さ12.5g～30gと小形のもので重さ，形態から二種類に区分できる。

砥石　A溝，住居址などからかなりの数量出土している。頁岩，砂岩，粘板岩等を石材としている。

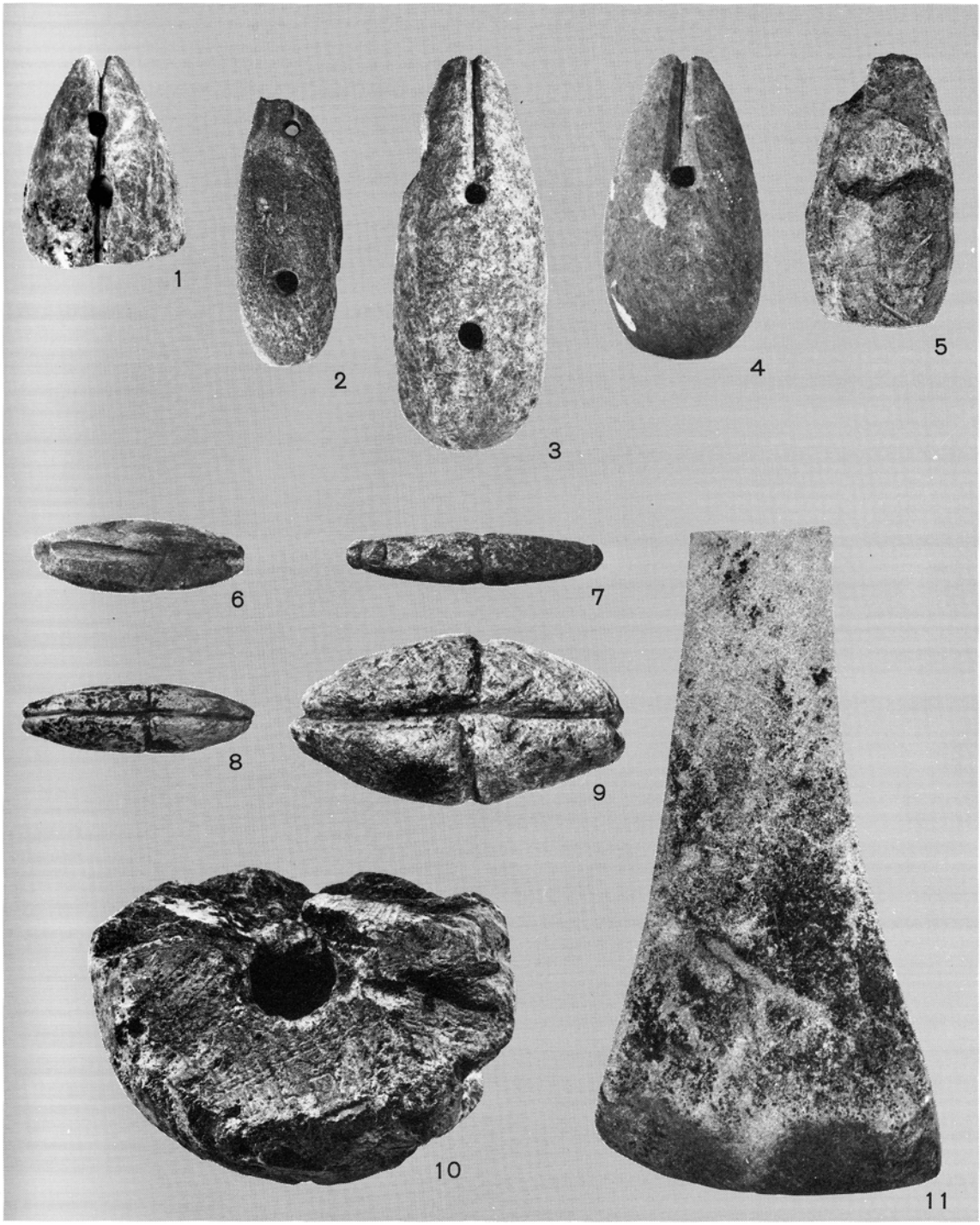


Fig. 46　石器(3)　石錘・砥石　　（縮尺½）

1　B５区eT　A溝　滑石　　2　F３区5T　B溝　滑石　　3　C５区eT　A溝　滑石　　4　B５区dT　A溝　滑石
5　F４区4T　B溝　滑石　　6　F５区4T　　頁岩　　7　C８区表採　　滑石　　8　B５区cT　A溝　滑石
9　C12区表採　　滑石　　10　B５区b−4地点　滑石　　11　B５区dT　A溝　砂岩

4　鉄　　器

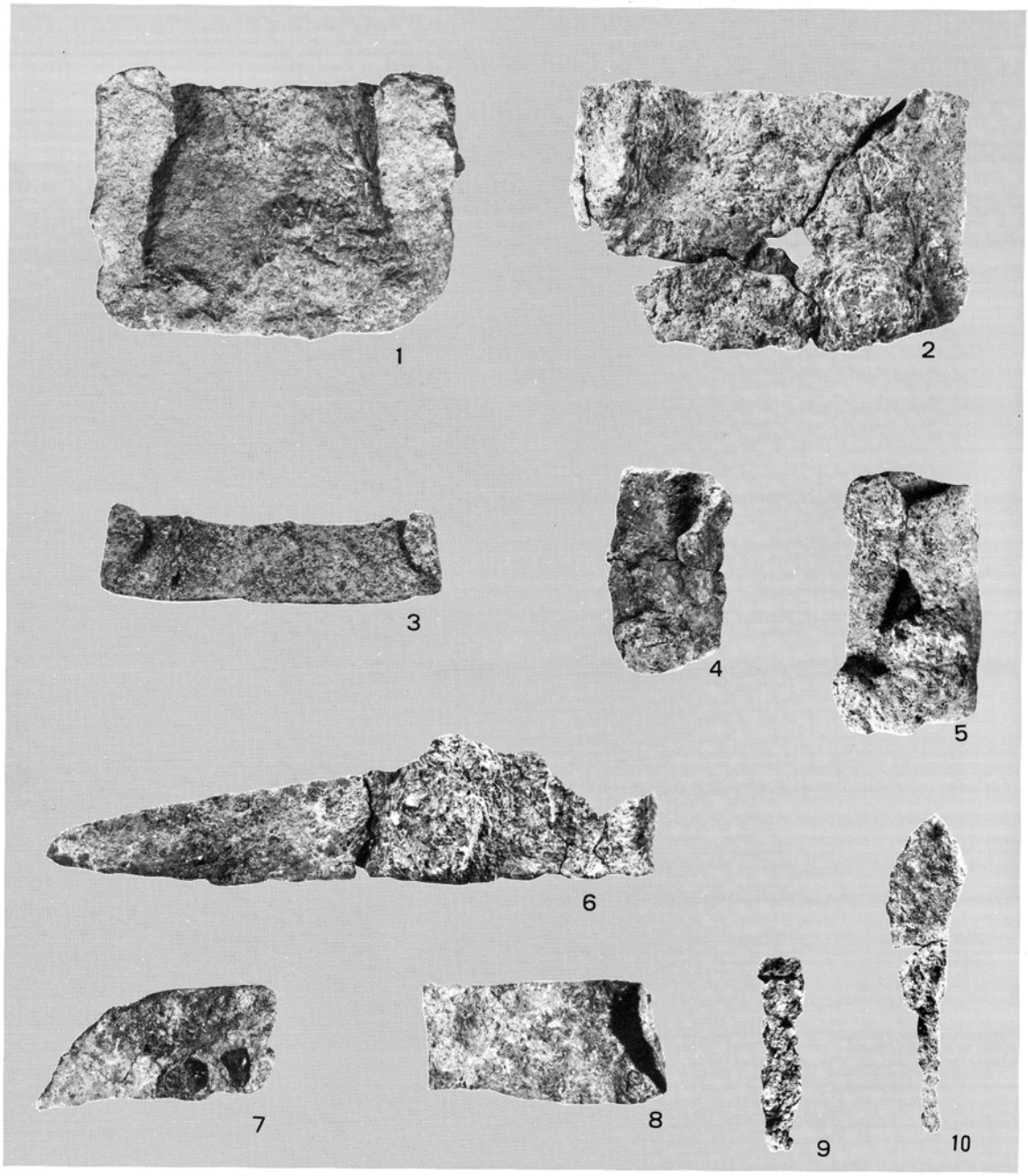


Fig. 47　鉄　　器　　（縮尺½）

1　鋤先　F4区4T（B溝）　2　鋤先　F4区4T（B溝）　3　鏃先　B5区dT　A溝　4　鉄斧　E3区5－d地点　5　鉄斧　E4区1－d地点　6　鉄鎌　E10区　J1001　7　鉄鎌　B7区eT（B7－B8間）　8　鉄鎌　E10区　J1001　9　鉄鏃　E10区　J2　10　鉄鏃　A5区うT　A溝

5　自然遺物

A溝内から自然遺物が検出された。A５区あＴを中心とし，Ｚ５区eＴからＡ５区いＴにも一部発見された。大部分はあＴの溝から検出されたものである。

魚骨が最も多い。背椎骨には径２cmを越えるものがある。６はサメであろう。魚骨はタイやスズキ等沿海性のものであるが，細片が多く種別の同定できるものはない。18・19はカキ，17は巻貝である。13－16は詳細は明らかでないが，鳥類の骨ではないかと考えられるものである。20は獣骨で，上端を鋭利な工具ですり切っている。

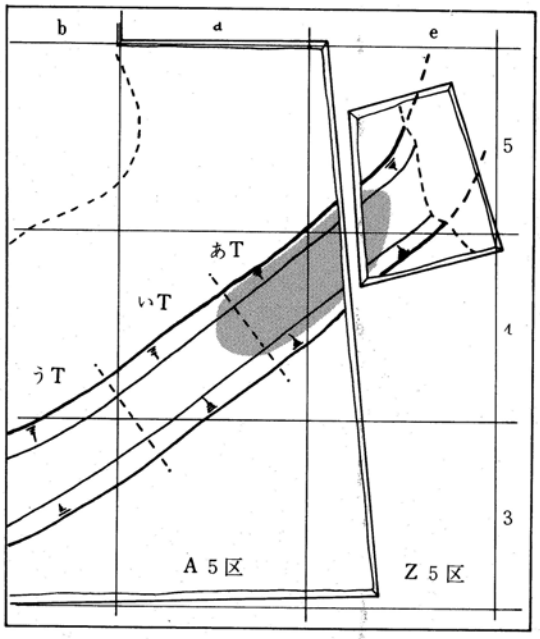


Fig. 48－1　A溝自然遺物出土地点（縮尺1／200）

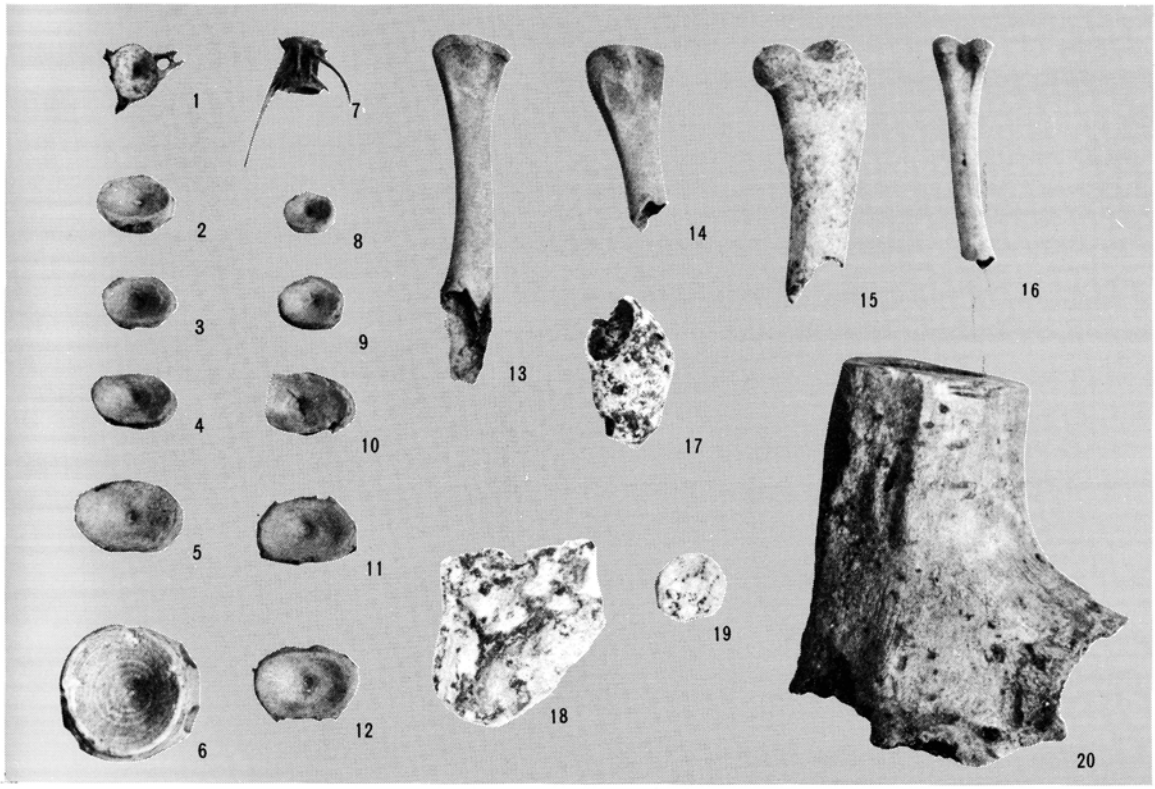


Fig. 48－2　A溝出土自然遺物　（A５区aT　縮尺1/1）

V　溝の土壌分析

1　野方中原遺跡土壌の*plant opal*分析

Plant opal 分析について

*plant opal*はイネ科植物（タケ科,カヤツリグサ科植物にも存在）中の*silica body*が土壌中に残存し土粒子になったものの総称である。*plant opal*（とくに，葉身中の機動細胞）は細胞外殻が確認できる状態で少なくとも数千年は残存している。他方，植物中の*silica body*が植物個有の形態をしており，植物分類学的指標になることは比較的古くから知られている。以上のことから，土壌中の*plant opal*を検出し比較観察することにより過去の植生を推定することができる。

plant opal分析法

本報ではとくに機動細胞（*motor cell*）に由来する*plant opal*を定性的に分析した。分析の手順は次のとおりである。

土壌試料の採取→超音波照射による試料の分散→粘土の分離→プレパラートの作製→検鏡。

土壌試料の採取地点

試料の採取はＢ溝（Ｆ3区5－bT），Ａ溝（Ｃ5区e－1T）の横断面の各層（90cm, 117 cm, 140cm）であり第２層は包含土器片から弥生終末期の土層であることが確認されている。（P.20参照）

分析結果およびまとめ

定性分析結果を*Tab.* 1および*Fig.*49－1～6に示した。

1．本遺跡の試料採取点はいずれも溝中にあり，アシ（ダンチク族）様*plant opal*が多量に認められるほか，ススキ，チガヤ（ウシグサ族），クマザサ（タケ科）様*plant opal*がほとんど未風化の状態で検出された。

2．量的には少ないがイネ（イネ族）様*plant opal*が確認された。これが栽培稲であるか否かはさらに詳細な検討を加えた上で判断される必要がある。

3．*plant opal*分析は新しい植生推定法であり今後の研究に待つところが大きい。*silica body*標本の完成と共に本遺跡土壌のより詳細，正確な植生推定が期待できよう。

Tab. 1　野方中原遺跡溝に包含される*plant opal.*

trench	層位(cm)	*plant opal*	備　考
Ｆ３区 5－bT（Ｂ溝）	1.（ 90）	ダンチク族(アシ)様，ウシグサ族(ススキ，チガヤ)様，イネ族(イネ)様	○16, *Dec.* '73 試料採取 ○２層は弥生終末期
	2.（117）	ダンチク族(アシ)様，ウシグサ族(ススキ，チガヤ)様，イネ族(イネ)様 タケ科(クマザサ)様	
	3.（140）	ダンチク族(アシ)様，ウシグサ族(ススキ，チガヤ)様，タケ科(クマザサ)様	
Ｃ５区 e－1T（Ａ溝）	1.（ 90）	ダンチク族(アシ)様，イネ族(イネ)様	
	2.（117）	ダンチク族(アシ)様，ウシグサ族(チガヤ)様，イネ族(イネ)様	
	3.（140）	ダンチク族(アシ)様，ウシグサ族(チガヤ，ススキ)様，タケ科(クマザサ)様	

註．*silica body*標本が不十分な現状を考慮し断定を避けるため「……族(～)様」と表現した。

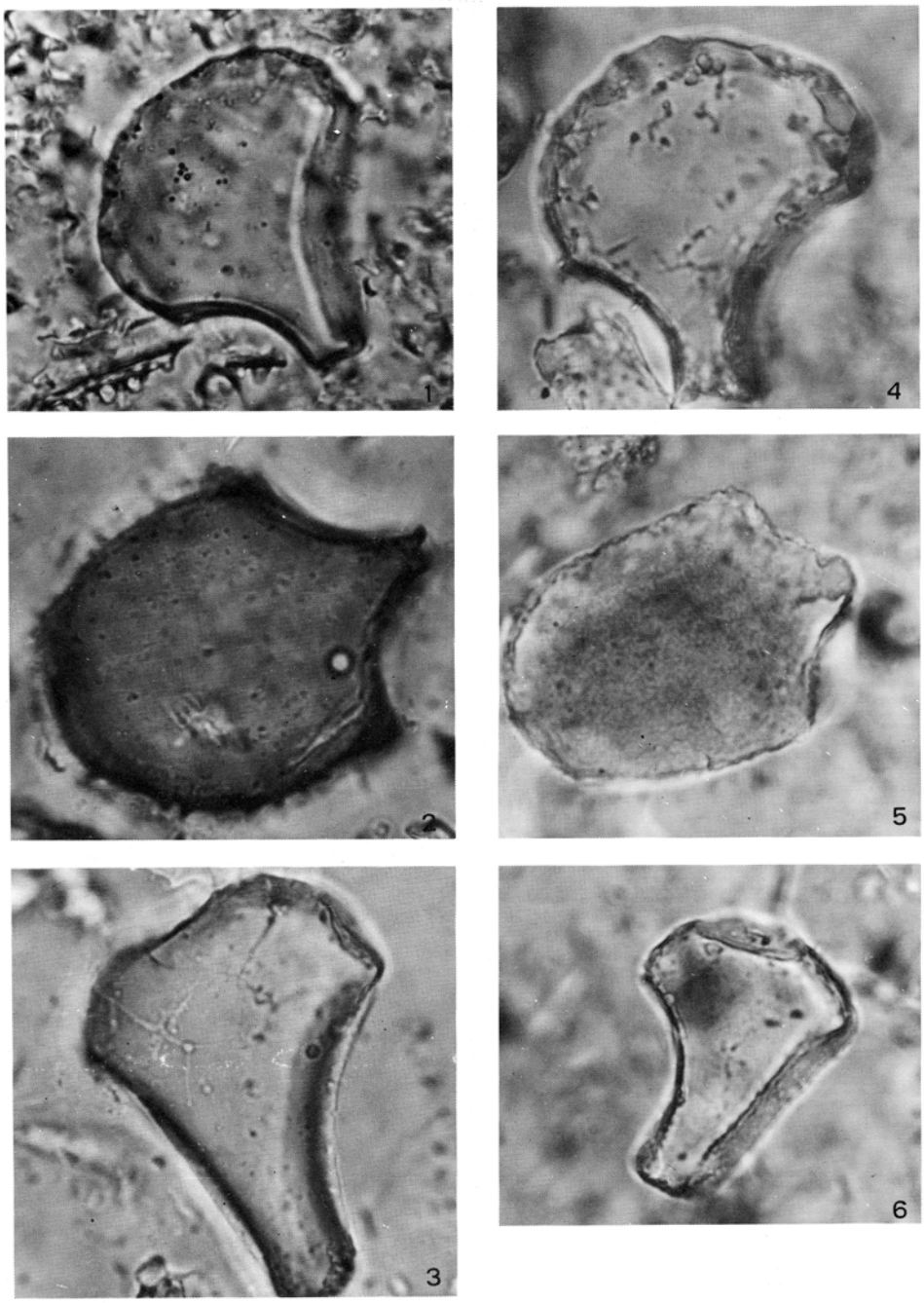


Fig. 49 植生植物のsilica bodyとF3区出土のplant opal

左列は現生植物の*silica body* (*motor cell*)

1：イネ (*O. sativa L.*)　2：アシ (*P. communis Trinius*)　3：ススキ (*M. sinensis Anderss*)

右列はF3区5－bT2層で検出された *plant opal*

4：イネ様，5：アシ様，6：ススキ様，偏光顕微鏡 約1000倍。

Ⅵ　ま と め

遺構と遺物の出土状態を中心として概括的に記述してきたが，調査の成果をいくつか要約して一応のまとめとする。

1　溝

大小二つの溝状遺構が確認された。A溝は直径約100mの環状溝で全体の⅓を欠く。B溝は直径約30mの環状溝であるが，全周することなくA溝側30mはつながらないまま完結している。溝の掘り方，幅，断面や溝中に包含される遺物等は共通しており，同時期に併存した遺構と考えられ，弥生終末期に比定される。

A・B両溝とも溝内の調査まで発掘作業が進んでいないので，両溝の性格を結論ずけることはできないが，現段階での判断の材料となる資料を提示しておこう。

(1)　A溝について

①　試掘調査の結果A溝内には9軒の住居址が検出されており，試掘溝の土器には弥生式土器が含まれている。

②　A溝内の住居址の中で，J9の土器には逆く字形を呈する壺の口縁部と，口縁が外反し底部が平底をなす甕形土器があり，A溝中の土器の特徴と一致する。

③　B5区b－4地点出土の半球形有孔滑石製品の未製品（*Fig.*43－9）は宮の前F地点等[註(1)]に類似品があり，弥生終末期に比定されている。この地点では同時期の遺構の検出が予想される。

④　A溝内から石包丁，石錘が表採されており，石錘はA溝中のものと石材，形態が一致する。

①～④のうち①②はA溝中に包含されている時期の住居址が存在したことを示す資料となり，③④は同時期の遺構の存在を知る手がかりとなる。以上のことからA溝内には弥生終末期の住居址の検出が予想され，A溝は終末期の集落を囲繞する環状溝と考えることができる。

(2)　B溝について

①　試掘調査の結果B溝内に相当する試掘溝から住居址は検出されておらず，今回の調査でもB溝内から住居址は発見されていない。

②　F3区5T断面の土壌分析によれば，花粉は検出されていないが *plant　opal* はイネ様等数種が検出されている。

①からB溝内に同時期（弥生終末期）の住居址はなかったと考えてよいであろう。住居址以外には集落に付属する遺構の存在が考えられる。②の花粉が検出されなかった理由の一つは，この地が生産活動の場所

註(1)　福岡市教育委員会「宮の前遺跡―福岡市拾六町宮の前F地点の調査―」　1971
橋口達也・八幡一郎「半球形有孔滑石製品」　考古学雑誌57－3　1972

でなかったためであろう。また高燥の地の土壌では花粉は残りにくいと云う。一方イネ様 *plant opal* の検出はイネの存在を，予測させる手がかりとなる。これらのことから推論すれば，B溝内には集落に付属する収穫物の貯蔵施設としての高床倉庫の存在が考えられよう。

勿論，両溝内とも調査されていない段階で軽卒な推論を下すべきでなく将来の調査を待たなければならないが，調査の手がかりの一つとして記述しておく。

溝から出土した滑石製石錘は漁撈具と考えられているが，A溝A５区あTから出土した魚貝類は，これを裏付ける証左となり終末期の食生活の一端を明らかにするとともに遺跡の沿海的性格を裏付けるものである。溝からは鋤先，鎌，鏃などの鉄器が出土しているが数は多くなく，これに比して石鏃，石斧，凹石砥石，石錘など石器の出土量がはるかに多く，依然として石器時代の延長という印象が強い。獣骨，木の実等の自然遺物も検出されている。

A溝の北縁部に相当するC７区5－a地点には壺棺が検出され，E８区eTには甕棺がある。F10区には甕棺の他舶載鏡を副葬する箱式石棺が検出されている。箱式石棺の時期は一概に決められないが，甕棺についてはA溝内発見のものもあり，扇状地の西北端部に位置するものもある。従って終末期の墓制としての甕棺墓は扇状地の北寄り～西北端部にまとまる傾向は指摘できるものの，特定の地域を画するような段階には致っていないようである。

弥生終末期の遺跡と比較してみると近接する宮の前遺跡[註(1)]（宮の前Ⅰ式）や筑後の狐塚遺跡[註(2)]（Ⅰ期・Ⅱ期）に認められる高坏がみられない点が異なっている。A溝中の高坏は坏部の上位に接合部があり外折反転するもので，北九州市高島遺跡[註(3)]や大分県安国寺遺跡[註(4)]の高坏に類似している。宮の前１式や狐塚Ⅰ期・Ⅱ期の高坏は坏部の中位に接合部があり，外反するもので，当遺跡では住居址覆土中の土器の中にこの形の高坏がみられるが，A溝中には今のところみあたらないのでA溝中の遺物は宮の前Ⅰ式に先行する可能性がある。櫛描波状文や竹管文を有する東九州系の土器型式といわれるものもA溝中から検出されている。

狐塚ではⅢ期（最古式の土師器）の段階まで平底をもつ甕形土器[註(5)]が認められるが，当遺跡ではA溝中の甕形土器は平底であるのに対し，住居址覆土中の甕は丸底化している。これら細部にわたる検討は今後の課題としたい。「宮の前，狐塚に比べて高島は古い様相を示している」考えもあるので，当遺跡で終末期とした溝中の土器も整理作業の進展に伴ない細分化される可能性もあると考えられるので，本文中で終末期としたものは高島や宮の前，狐塚を含めた広義の終末期としておき，今後の整理作業をまちたい。[註(6)]

詳(1)　福岡県労働者住宅生活協同組合「宮の前遺跡」（A～D地点）　1971
(2)　筑後市教育委員会「狐塚遺跡」　1970
(3)　北九州市埋蔵文化財調査会「高島遺跡」　1972
(4)　九州文化総合研究所「大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査」　1958
(5)　森貞次郎「九州」日本の考古学Ⅲ－弥生時代―　1966
(6)　小田富士雄「入門講座・弥生土器－九州６－」考古学ジャーナルNo.84　1973

2　住居址

住居址は試掘調査で37軒，今回の調査で57軒検出されている。試掘調査は全域の約10%，今回の調査は調査面積の⅕程度にすぎず，墓域，B溝内を除いてほぼ全域に住居址が分布しているので，全体としては相当数にのぼる住居址の発見が予想される。今のところ住居址の上限は弥生終末期と考えられ，須恵器のⅢ期を下限とし，大部分の住居址は古式土師器を伴なう時期に比定されるようである。

終末期の住居址は扇状地の中央から東側へ広がるA溝内に位置すると考えられ，須恵器を伴出する住居址は数少ないので，ここでは古式土師器を伴なう住居址についてみよう。

古式土師器を伴なう住居址はA溝が廃絶された後，扇状地の中央部を中心として一大集落を形成するが，扇状地の西北端部は墓域として意識されていたらしく住居址は検出されていない。今回の調査は遺構プランを確認する段階までしか進んでおらず，完掘した住居址は1軒もない。今回の調査で明らかな事実として報告しうるのは次の3つである。

① J507はA溝の上に検出された住居址で，A溝が埋まった後につくられた住居址であることを示しており，この住居址の上限をおさえることができる。

② J518では甕と埦のセット関係が明らかされた（*Fig.*30－2，*Fig.*50 *PL.* 2－20，27）。

③ F5区2－a地点では高坏，鼓形器台，埦が一括して出土し，セット関係を示す資料とみることができる（*Fig.*51，*PL.* 2－7，25，26）。遺構は今のところ明らかにされていないが，ピットが認められるので，住居址と考えられる。近接したB溝上面から青銅製鋤先が検出されているが，これらの土器と関連するものか現時点では不明である。

Fig. 50の1は赤褐色を呈する焼成良好な埦で，口径11.3㎝，器高6.1㎝を測る。体部は箆削り，口縁部刷毛目の上を箆研きしている。内面は指でおさえ，端部には横なでがみられる。2は口径19.7㎝，復元高29.7㎝の甕で，底部を欠くが*PL.* 2－19同様平底に近いものであろう。胴部は球形状を呈し口縁部がわずかに肥厚し，端部は内側につまみあげている。

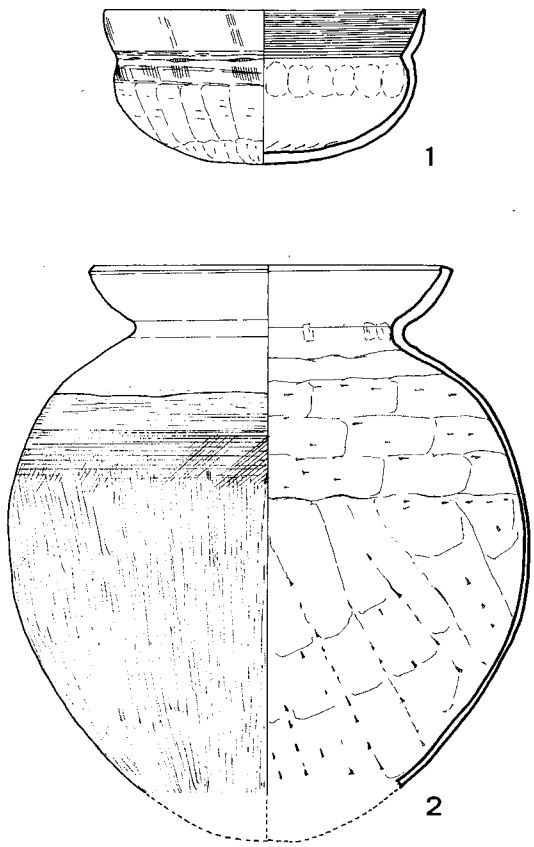


Fig. 50　第516号住居址出土土器実測図
（縮尺1⅓　2⅕）

器面は刷毛目整形し，肩部に一条の波状沈線文がめぐる。内面は下半を下から上へ，上半は横方向へ箆でけずり器壁のうすいものである。口縁部は横なでで仕上げている。

Fig. 51の１は口径13.0cm，器高6.7cmを測り，赤褐色を呈する焼成良好な埦である。体部は箆研磨，口縁部も箆研きしているが一部刷毛目も残る。２は鼓形器台とよばれるもので，器高9.7cm，上下縁径は17.0cmと同径となっている。刷毛目の上に箆磨きがみられ，内面上縁部は縦方向の暗文が施文されている。赤褐色を呈する焼成良好な土器である。３は器高16.8cmの高坏で，坏部は下半に接合部があり外側へ大きくひらくもので端部はまるくおわる。脚支柱部は中ふくらみで，脚部は脚支柱部との境が屈曲して広がり端部はまるくおわる。坏径23.9cm，脚裾径15.8cmを測る。脚部に３孔を穿ち，全面に刷毛目が施され坏部には縦方向の暗文がみられるが，１・２ほど仕上げはていねいでない。明褐色を呈する。

本文中住居址の土器としたものはいずれも住居址覆土中のもので，これをもって各住居址の年代を決定することはできない。むしろ調査が進展すれば，これより古くさかのぼる可能性がある。そこで，ここでは各住居址土器を整理して年代の手がかりとしておこう。

PL. ２に取扱った古式土師器を伴なう住居址の中で，出土量の多い住居址の土器の組合わせを示せば第２表のようになる。

壺はＡ・Ｂ２つに分けられる。Ａは口縁が外反する平底のもので，*PL.* 2－1～3がこれにあたる。Ｂは二重口縁の壺である。(*PL.* 2－4～6)

甕は二種類ある。Ａは口縁が外反し胴部が長胴形をなし器面に叩きを施すもので，底部は丸底を呈する。これはＡ溝中に包含されていた長胴形で平底をなす甕形土器に系譜を求めることができ，これが丸底化したものとみられ，*PL.* 2－17がこの例である。Ｂは口縁部が肥厚し，内面が箆削り仕上げの器壁のうすいもので，*PL.* 2－18～20がこれにあたる。○は*PL.* 2に示していないが同類の器形の土器が出土していることを表わしている。

甕形土器の中にはいずれの住居址にもＢ類の内面箆削りの甕が認められこの時期が住居址の主体をなす

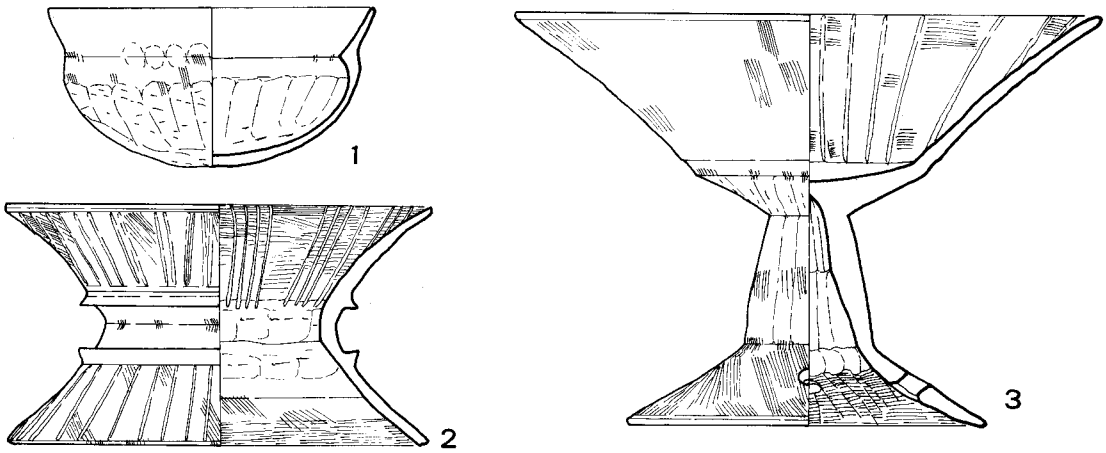


Fig. 51　Ｆ４区２－ａ地点出土土器実測図　(縮尺 1/3)

ことを示している。近接した遺跡では宮の前Ⅲ式にみられ，有田Ⅰ期の文化層にも含まれている。

A類は出土する住居址と出土していない住居址がある。A類は終末期の平底の甕形土器が丸底化したもので，これが次第にB類に移行すると考えれば，A・B類の組合わせを古く，A類を含まない住居址を新しく考えることができよう。

Tab. 2　*PL.* 2中の住居址覆土中の土器の組合わせ

器形 / 住居址	壺 A	壺 B	鉢	甑	甕 台付	甕 A	甕 B	器台	埦	小形丸底柑
J 507	2・3	6	12		○	○	18・19			
J 516							20		27	
J 518						17	○	22		
J 604	○			9	15		○			
J 1001		○	13	8・10	16	○	○	24	○	30
J 1003	1	5	○	11			○	21	35	○
F 5区2－a地点	高坏(7)　鼓形器台(25)　埦(26)									

壺　A（*PL.* 2－1～3）　　B（*PL.* 2－4～6）
甕　A（*PL.* 2－17）　　B（*PL.* 2－18～20）
○　同じ器形のものが含まれていることをしめす。

今一つ注意される点は小形丸底土器の出現である。「小形丸底土器で布留式以前にのぼるもの」はない[註(1)]とされているから，これを含まない住居址を古く，小形丸底土器を伴出する住居址を新しく考えることができよう。更に②・③のセット関係を示す土器の組合わせも編年の基準とすることができる。

従って甕形土器のA・B類の組合わせ，小形丸底土器の出現，②・③の土器の組合せをもとにJ 507，J 518の時期とJ 1001，J 1003の時期の二つに区分することができる。宮の前Ⅲ式の中には小形丸底壺や鼓状をなす特殊器台は出土していないが，有田遺跡[註(2)]のⅠ期の文化層には鼓形器台や小形丸底壺が出土しており，F 5区2－a地点出土の高坏・鼓形器台・埦の組合わせ，J 516の甕と埦のセットは後者の時期に含めることができる。これによりJ 507，J 518は宮の前Ⅲ式の時期に，J 516，J 1001，J 1003やF 5区2－a地点の土器は有田Ⅰ期の時期に比定することができる。

しかし，宮の前遺跡(Ⅲ式)や有田遺跡(Ⅰ期)のB類甕形土器は口縁部片のみで全形を知ることができないので対比資料としては適当でないが，当遺跡出土のB類甕形土器は量も豊富である。底部はわずかに平底をなすものから丸底を呈するものがある。平底の甕は胴部が球形に近いもので，後者は胴部最大径が肩部にあり，全体としては卵形を呈する。近接した牟多田遺跡[註(3)]には胴部最大径が肩部から中位にさがり，著しく小形化したものがある。このような形態変化はB類甕形土器の漸移的推移を示すと考えられ，宮の前Ⅲ式～有田Ⅰ期の段階を細分化する可能性が指摘される。

一方，鼓形器台は宮の前Ⅲ式にはないが，今宿の若八幡宮古墳[註(4)]には出土例があり，4世紀後半代と考えられている。B類甕形土器の出現の時期や他の土器との組合わせも当遺跡で確証された段階ではない。当遺跡の多くの住居址がこれら二つの時期のどの段階で盛行するのか，各期の土器の組合わせ等々細部の検討は今後に残されており，調査の進行に合わせて慎重に検討してゆきたい。

註(1)　田中　琢「布留式以前」　考古学研究12－2　　1965
(2)　「有田遺跡」　前掲書
(3)　福岡市教育委員会「牟多田遺跡発掘調査報告書」-福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集－　　1974
(4)　福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集　　1971

3　箱式石棺の年代

墓域の調査により甕棺（壺棺を含む）3基，土坑墓1基，木棺墓1基，箱式石棺墓10基が検出された。K−2，S−6を除いて全て未掘の状態であり，今後の調査の進展に伴ない墓域は更に広がることが予想される。甕棺の分布に比べ箱式石棺は扇状地の西北端部にあたるF8区〜F10区に集中する傾向を指摘できる。

甕棺はA溝と対応する弥生終末期に比定することができるが，他は箱式石棺4基を除いて伴出遺物がなく，時期決定はむずかしい。

遺物の検出された箱式石棺のうち，第9号石棺は小形丸底壺を棺外副葬するもので，J1001，J1003の時期に比定することができる。第6号石棺は石棺のまわりに高坏，広口壺，直口壺，器台を供献している。

これらの土器は宮の前遺跡に類似した資料がある。直口壺（2・3）は宮の前1号墳供献一括資料中の柑に対比され，高坏（4・5）もこの中の高坏に共通する特徴を有しており，宮の前Ⅰ式に比定されている。また，広口壺（1）は宮の前D地点Eトレンチ上層の壺形土器に対比できるもので，この中にも前出と同様な高坏が含まれている。つまり壺は宮の前Ⅰ式とⅢ式に対比でき，高坏は大半がⅠ式に相当するもののⅢ式にも認められる。器台（6）はA溝中のものと同様である。従って第6号棺は概ね宮の前Ⅰ式の時期に比定できることになるが，最も新しい時期の資料を基準とすれば宮の前Ⅲ式の時期ということになる。

一方，当遺跡の調査結果をもとにすれば，後述するようにS−4がK−3を切っていること，S−4とS−6は石棺のつくり方や棺材など共通要素を指摘できること，甕棺の分布に対比して箱式石棺が占地的なあり方をしめすことなどから，第6号石棺をA溝や甕棺の時期より後出の時期（宮の前Ⅲ式の時期）とするのが妥当であると考えるが，墓域の調査があまり進んでいない今の段階ではむしろ宮の前Ⅰ式〜Ⅲ式を含む時期としておきたい。第6号石棺に供献された高坏がA溝にみられず住居址覆出中の遺物に含まれていること（P.53）は，この時期に相当する住居址の検出が予想され，A溝の時期が宮の前Ⅰ式の時期を遡る可能性を示唆するものと考えることもできる。従って住居址出土資料との対比が必要となってくる。住居址の調査は今後に残された課題であり，調査の進展に伴ない漸次明らかにされると思われるので，慎重を期したいところである。

箱式石棺出土鏡について

第1号石棺出土の獣帯鏡は後藤守一「漢式鏡」[註(1)]中の朝鮮平安南道大同郡大同江面出土の盤龍鏡とされているものに類似している。これは拓本のみで他の文献にみることができなかったので，今のところこれを唯一の資料とする他はない。四乳間に四神を配したもので，本例はこれの白虎と玄武，朱雀の一部に相当する部分の鏡片であるが，獣形の表現がほぼ一致しており，同氾鏡の可能性も考えられる。銘文は不鮮明であるが「上方乍竟眞□自□宜子孫」とよめる。本例では白虎の部分に「亻」と文字の一部が残るのみで，

註(1)　後藤守一「漢式鏡」　雄山閣　1925

前出「□自□」の最後の一字の部分に相当する。同じく大同江郡南串面南井里彩篋塚出土の上方作獣帯鏡(註(1))（面径12.0cm）には「上方乍竟眞出少有上仙人長宜子孫」の銘文があり，「上方乍竟……宜子孫」は一致するが，これは六獣鏡である。

国内に類例を求めれば群馬県山田郡薬師山古墳出土例がある。四神のうち白虎に相当する部分を欠くが，他の獣形の特徴は類似している。面径10.9cmで銘文は「上方乍竟有……宜子孫」とあり，銘文の前後は本例と一致する。「上方乍竟眞」のあとに通例の中から「眞大工自有道」「眞大工上有仙人不知老」などの中の3字を□自□にあてるとすれば，本例の「〻」に相当するのは「有」か「老」の一部ではないかと想定することができよう。

いずれにしても本例が上方作獣帯鏡であり，後漢代の鏡とするに疑いないとみてよいであろう。

第3号石棺出土内行花文鏡は面径10.6cm，全体の¾を欠きかろうじて復元できるものである。内区は八花文に蝙蝠形四葉座を配するもので，通例では四葉間に「長宜子孫」の銘をみるものが多いが，本例ではこれを確かめることはできない。類例は少なくないが，第1号石棺出土例とほぼ同時期の後漢鏡と考えられる。

鏡以外の伴出遺物に玉類がある。第1号，第3号，第5号石棺出土玉類はいずれも弥生時代の特徴をしめす。玉類のうち管玉は宮の前1号墳出土のものよりわずかに大きなものであるが，計測値は古墳時代のものと比較した場合ほど大きな差は認められず，宮の前1号墳に近い時期と考えることができ，従って第1号・第3号石棺とも第6号石棺とほぼ同時期のものとみることができよう。

第6号石棺出土玉類のうち勾玉も弥生時代の特徴を有するものであるが，これと同一石材の製作過程をしめす石核がJ 1001から出土しており，この点に留意すればJ 1001の時期まで下る可能性も考えられる。

箱式石棺のうち第3号，第4号，第10号は第6号石棺と同様粘板岩で作られ，第1号，第5号，第8号，第9号は花崗岩を棺材としている。第6号石棺は比較的大形の石棺で，石棺のつくりも丁寧であり，第4号石棺は石棺中最も大形のものである。これに対し花崗岩を棺材とする石棺は小形なものである。石棺の石材，規模，つくり方に注意してみると第3号，第4号は第6号石棺と共通する要素を持ち，第1号，第5号，第8号は第9号石棺と共通する点が多い。これらの点から第1号，第3号石棺とも第6号石棺から第9号石棺の時期に比定される可能性が強く，他の石棺もこの時期（S－6～S－9）の所産と考えるのが妥当であろう。従って箱式石棺墓は古式土師器を伴出する住居址群に対応する時期の墓制とみることができる。終末期のA溝内の集落の時期に対応する墓制と考えられる甕棺の分布に対比した場合，箱式石棺は扇状地の西北端に集中しており，墓域としての占地性が一層強く反映されているとみることができよう。

以上のことから箱式石棺の被葬者について考えてみよう。共同墓域の中に舶載鏡を副葬する箱式石棺が二基認められたが，第3号石棺と同一石材によっている第6号石棺はつくりもていねいで，大形な石棺で

註(1)　浜田耕作・梅原末治・小泉顯夫「楽浪彩篋塚」　朝鮮古蹟研究会　1934

(2)　「漢式鏡」前掲書

あり，周囲に供献土器を有する点で，石棺中最も厚葬されたものとみることができる。棺内は盗掘を受けて遺物を欠くが，鏡等が副葬された可能性は最も高いと推定される。第4号石棺はこれよりひとまわり大形の石棺である。これも盗掘により遺物を欠く。これらは鏡を副葬した石棺が2基以上に及んでいた可能性を示す材料とみることができ，同一共同墓域の中における被葬者のあり方を検討する必要がある。

一方宮の前遺跡には宮の前1号～4号墳（箱式石棺）があり，1号墳は宮の前Ⅰ式の時期とされている。1号墳は丘陵頂部に位置し，墳丘を有する大形石棺で，2～4号墳が墳丘をもたないのと好対照を示している。他に比べ副葬品も多く特定個人墓への成果過程を示すものと考えられており，周辺の藤崎，重留の箱式石棺も同様な成長過程を示すものとして評価されている。

Fig. 52　丘陵部の箱式石棺発見状況　（48年6月）

このような特定個人墓の成長過程と示す形のものと野方中原遺跡の場合は同一時期で近接する地域でありながら対照的なあり方を示している。

当遺跡では低平な扇状地の一定区域を墓域として占有しているものの，これは共同墓域としての占地性を越えるものではなく，特定個人墓としての占地性を認めうる積極的証左はみあたらない。

野方中原遺跡の南西部には丘陵が突出しており，この丘陵先端部にも箱式石棺が検出されている。造成工事中に発見されたもので，棺材のほかに遺物を確認できなかったが，第3号，第4号，第6号石棺と同一石材を棺材とし，朱の痕跡が明瞭で，第4号，第6号石棺同様大形なものである。棺材の規模等から野方中原遺跡と同一時期の石棺と考えられる。このような近接した同一地域内にあって，丘陵先端部に位置する石棺と低平な扇状地の一画を墓域とする石棺とはどのような関係を求めることができるのであろうか中原遺跡の西側丘陵上には第二地点と呼ぶ包含地があり，これら周辺部との関連の上で今後検討すべき点であろう。

4　調査の問題点

すでに述べてきたように今回の調査は遺跡の保存を第一の目標としたため，通常の調査とは異なり，遺構プランを確認することによって全体の規模を把握しようと努めたものである。これによって遺跡の大まかなあり方を推定できるようになった。これをまとめると右の表のようになる。

弥生時代 終末期	A溝(J 9) B溝	K－1 ～ K－3	宮の前Ⅰ式
古墳時代	J 507 J 518	(S－1 S－3 S－6)	宮の前Ⅲ式
	F 5区2 a J 516		(＋)
	J 1001 J 1003	S－9	有田Ⅰ期
	J 1002		

しかしこのような調査方法により，細部にわたる検討は全て今後の問題として残されており，調査はその第一歩を歩み出した段階にある。また今回の調査の成果も短期間のうちにまとめたため十分な資料の整理にもとづいたものではないので，勢い概括的な把握の域を出ない点が多々ある。

今後解決すべき点は多い。終末期の時期に於てはA溝内の集落のあり方を追求するとともに，B溝内の遺構を明らかにする必要がある。これにより墓制を含めた，終末期の一村落単位のあり方を知ることができると考えられる。合せて遺跡周辺部の水田地は生産活動の候補地の一つとして注意したい。

古式土師器への転換の時期を究明する上でも重要な遺跡である。住居址の切り合い関係を調査していく過程で，古式土師器の推移を明らかにすることができると思われるが，何よりこの時期に住居址が集中していることが，住居址の切り合いとともに編年資料を対比する上で量的な比較検討を可能としている。

箱式石棺がF８区～F10区に集中していることは墓域としての占地性を強く反映していると考えられるが，墓域の広がりがどの範囲まで広がるのか確められていない。未掘のまま残されているものも多く，今後の調査を継続していく中で解決してゆくべき点である。

野方中原遺跡の出現と終束も大きな問題である。弥生終末期に集落としてのまとまりをみせる当遺跡の出現は何に起因するものであろうか。それ以前の弥生時代の遺跡との関係を周辺部に求めることは今のところできそうもない。

古墳時代の初頭の時期がこの集落の最も盛行した時期で，舶載鏡を所有し，舶載鏡を鏡片として世襲するような被葬者の存在を想定しうるが，共同墓域の範囲を越えない墓制は宮の前遺跡の集落とは対照的である。有田の丘陵にも同時期の集落が形成されている。これら他の集落との交流の中に中原遺跡は６世紀代になるとほとんど集落の跡をとどめないような荒廃ぶりをみせる。ここに大きな時代の流れをうかがうことができるように思われる。４世紀後半代には今宿には若八幡宮古墳のように巨大な前方後円墳を構築しうる被葬者の成長を知ることができ，一段と幾内文化圏へ包括される様相が強く読みとれるのである。広石峠越えが主要な交通路の役割を占めるのもこの頃のことであろうか。

発掘調査関係者

施　　主　福岡県労働者住宅生活協同組合
大井重信　藤岡義貞　田口幸夫
中村賢一　桑原盛義

設計監督　都市開発設計事務所
松隈　覚　蒲原貞一　佐藤丈志

施　　工　小松建設工業野方作業所
清水義正　鈴木欽一朗　伊藤正治　中園　健
福留行男　西田　仁　葉玉禎輔

○地元協力者
野方町内会（会長　柴田直止）・高松光俊
野方公民館
遺跡発見者　曽根田　諭・中原強一・名越栄治

○発掘協力者
福岡市中学校社会科研究会
磯部　香　井上恵明　大森松美　柴田国彦　下迫勇夫
鷹野重三　田中憲治　中村純郎　平林　豊　吉岡孝二
吉原滝雄・和田むつみ（明治大学）

相川スエ　青木久江　青木春子　赤司平四郎　阿部弥一郎
荒牧ヤチヨ　石志みさを　今村　亮　江藤英子　緒方左近
緒方チヨエ　緒方良親　片山　義　貝原郁子　小宮　亮
小宮和子　後藤ミチ子　斉藤小春　財津良子　佐藤弥造
島　タカヨ　柴田敏雄　柴田富夫　柴田和子　柴田ヤスノ
清水君枝　清水文代　清水百江　下田ヤスエ　添田しのぶ
曽根田スエ　高木静枝　高原尚子　高松　縞　田中チエ子
高田ヒサノ　高宮　正　辻　キヨ子　津和崎八重子　土斐崎　靖
土斐崎孝子　土斐崎マツエ　土斐崎節子　中原強一　西納　豊
西納トシエ　西山信子　能美須賀子　能美八重子　萩尾百代子
原　利美　原　秀夫　原　静子　原　洋子　原　まつ子
原　芳子　原　和江　原　トシ子　原　チヨ　原　松子
原　エツ　原　和子　平田美絵子　平田とよ子　久野芳子
藤　みよ　藤　君枝　藤　きみえ　藤　サエ　別府秀子
松永富子　松永君子　松本千代子　真鍋利雄　真鍋政江
真鍋恵美子　真鍋俊子　真鍋チエ子　真鍋幸男　枚園マシ子
的野テル　三角ツマ子　森永史子　持田　久　山口博昭
山口ミキエ　道下カツヨ　米島互雄　米島加代　米島シズ
米島敏江

福　岡　市
野方中原遺跡発掘調査概報
—福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集—
昭和49年3月31日
編集
発行　福岡市教育委員会
印刷　福岡印刷株式会社

PL. 1

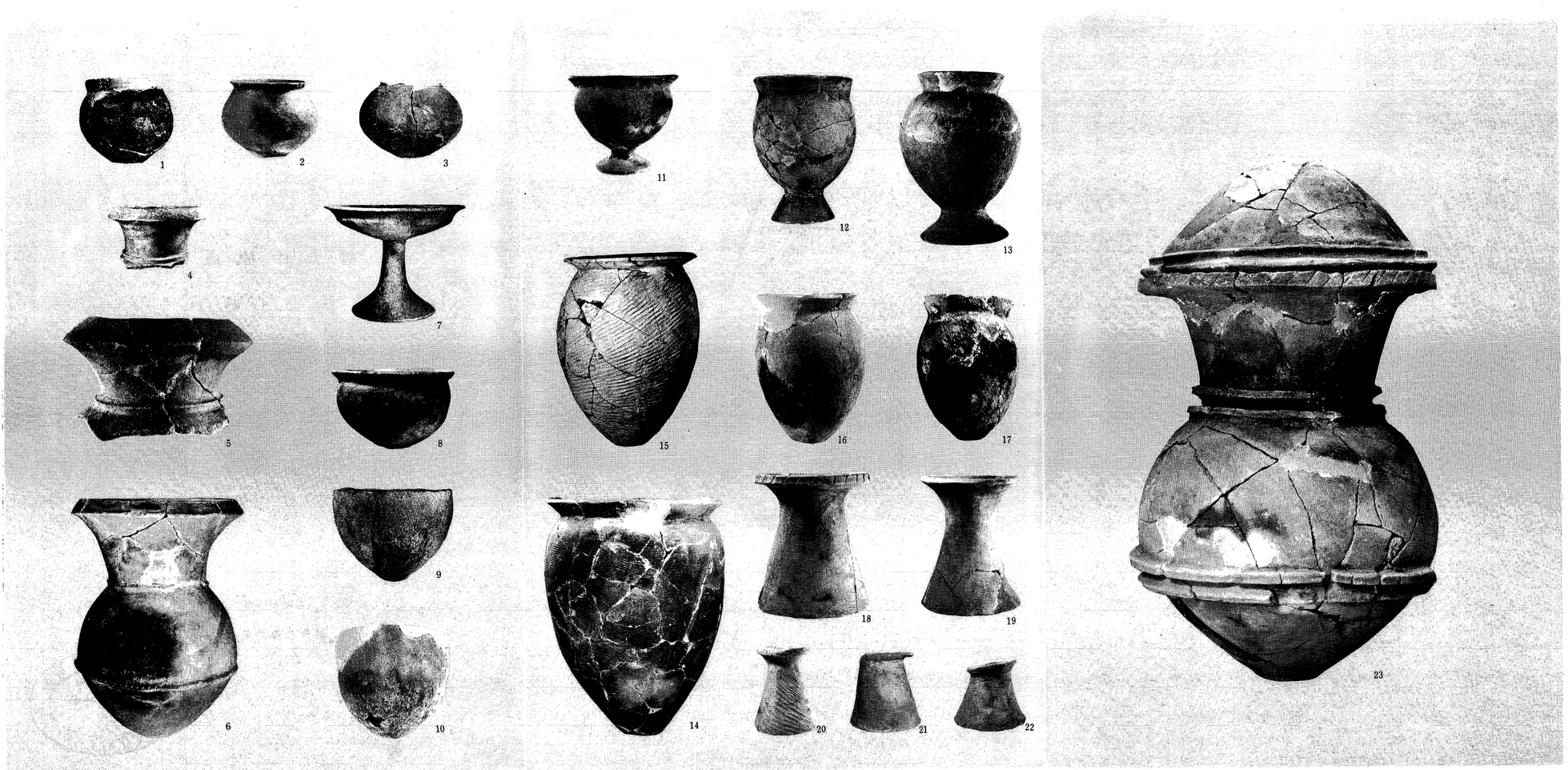
野 方 中 原 遺 跡

出 土 土 器 (1)

1974年3月

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市教育委員会
No. 16984
1. 10. 15
2/3
埋蔵文化財センター



図版説明

（単位 cm）

No.	遺構	出土地点	器高	口径	底径	備考
1	A 溝	B 5区 aT	12.5	(+) 13.0	5.7	内外丹塗
2	〃	A 5区えT	12.0	12.5	6.6	
3	〃	B 5区 bT	(+) 11.5	—	6.1	
4	〃	B 5区 aT	—	17.0	—	
5	〃	A 5区えT	—	30.7	—	
6	〃	C 5区 eT	41.8	28.2	5.0	
7	〃	B 5区 bT	18.0	22.6	13.7	
8	〃	B 5区 aT	13.5	20.1	6.3	
9	〃	B 5区 aT	15.0	18.9	5.1	2.0×1.8の穿孔
10		F 5区 2a	15.7	17.9	3.4	1.3×1.0の穿孔
11	A 溝	B 5区 bT	(+) 15.8	18.2	—	
12	〃	B 5区 aT	(+) 24.0	17.3	—	
13	〃	B 5区 aT	28.1	14.9	15.4	
14	〃	A 5区えT	38.2	26.5	7.0	
15	〃	B 5区 cT	29.8	(20.7 / 19.8)	6.0	
16	〃	B 5区 aT	24.1	(16.7 / 15.2)	6.7	
17	〃	B 5区 bT	20.8	13.4	3.4	
18	〃	B 5区 aT	22.7	18.0	18.0	口縁刻目
19	〃	B 5区 aT	21.5	15.5	16.8	
20	〃	C 5区 aT	(21.7 / 16.6)	(10.7 / 10.1)	(13.3 / 13.0)	
21	〃	B 5区 aT	13.1	(10.1 / 8.8)	(13.0 / 12.5)	
22	〃	B 5区 cT	(11.7 / 10.1)	(9.5 / 8.9)	(13.5 / 13.2)	
23	〃	D 7区 5e	上 19.0 下 45.0	45.5 47.5	9.5 10.5	上の蓋には壺の胴部下半を転用

（ ）は最大と最小計測値を，（+）は復元計測値をしめす

（縮尺⅓）

PL. 2

野 方 中 原 遺 跡

出 土 土 器 (2)

1974年3月

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市教育委員会
No. 16984
1. 10. 15
2/3
埋蔵文化財センター

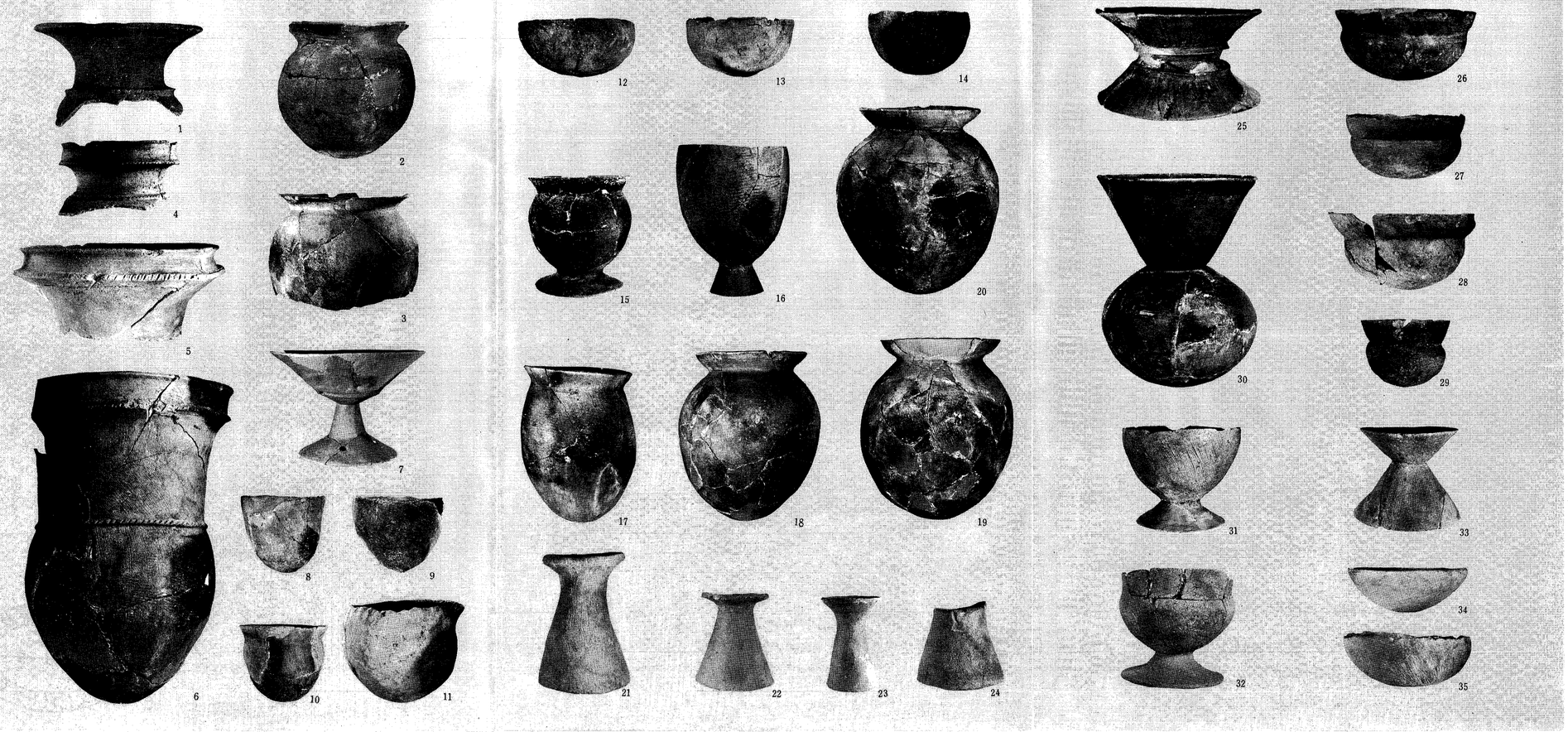


図 版 説 明

（単位 cm）

No.	遺 構	出土地点	器 高	口 径	底 径	備 考
1	J 1003	E 10区	—	28.2	—	
2	J 507	D 5区	21.5	18.7	丸	
3	J 507	D 5区	—	(23.4 / 22.3)	—	
4	J 18	E 6区 5T	—	18.3	—	
5	J 1003	E 10区	—	31.0	—	
6	J 507	D 5区	52.2	33.0	丸	
7		F 5区 2a	16.8	23.9	(＋) 15.8	
8	J 1001	E 10区	12.7	13.3	丸	径1.3の穿孔
9	J 604	D 6区	11.8	(14.9 / 13.1)	丸	径0.8の穿孔
10	J 1001	E 10区	12.0	13.5	丸	2.4×1.4の穿孔
11	J 1003	E 10区	13.8	(15.3 / 12.5)	丸	径0.6の穿孔
12	J 507	D 5区	8.2	18.0	丸	
13	J 1001	E 10区	9.5	16.9	丸	
14		D 10区 eT	11.1	16.5	丸	
15	J 604	D 6区	17.4	16.3	14.1	丹塗
16	J 1001	E 10区	(＋) 23.0	17.6	—	
17	J 518	E 5区 dT	23.3	(15.9 / 14.8)	丸	
18	J 507	D 5区	26.8	16.4	丸	丹塗
19	J 507	D 5区	28.4	21.2	5.2	
20	J 516	E 5区 bT	(＋) 29.7	19.7	—	
21	J 1003	E 10区	22.0	14.1	16.0	
22	J 518	E 5区 dT	15.3	11.2	(14.1 / 12.2)	
23		D 5区	14.8	9.3	(8.6 / 7.4)	
24	J 1001	E 10区	(13.7 / 13.1)	8.9	16.0	
25		F 5区 2a	9.7	17.0	17.0	
26		F 5区 2a	6.7	13.0	丸	
27	J 516	E 5区 bT	6.1	11.3	丸	
28		E 10区 2T	7.0	13.9	丸	
29		E 3区Ⅲ層	6.3	8.3	丸	
30	J 1001	E 10区	20.7	15.1	丸	
31		D 6区 4T	9.5	11.4	(9.4 / 8.9)	
32		—	(12.2 / 11.7)	(12.4 / 11.9)	11.6	
33		F 5区 4T	8.5	9.3	10.5	
34		E 3区 4c	4.3	11.3	丸	
35	J 1003	E 10区	5.0	11.9	丸	

（ ）は最大と最小計測値を，（＋）は復元計測値をしめす（縮尺 1－24 ⅙　25－35 ⅓）

付　図

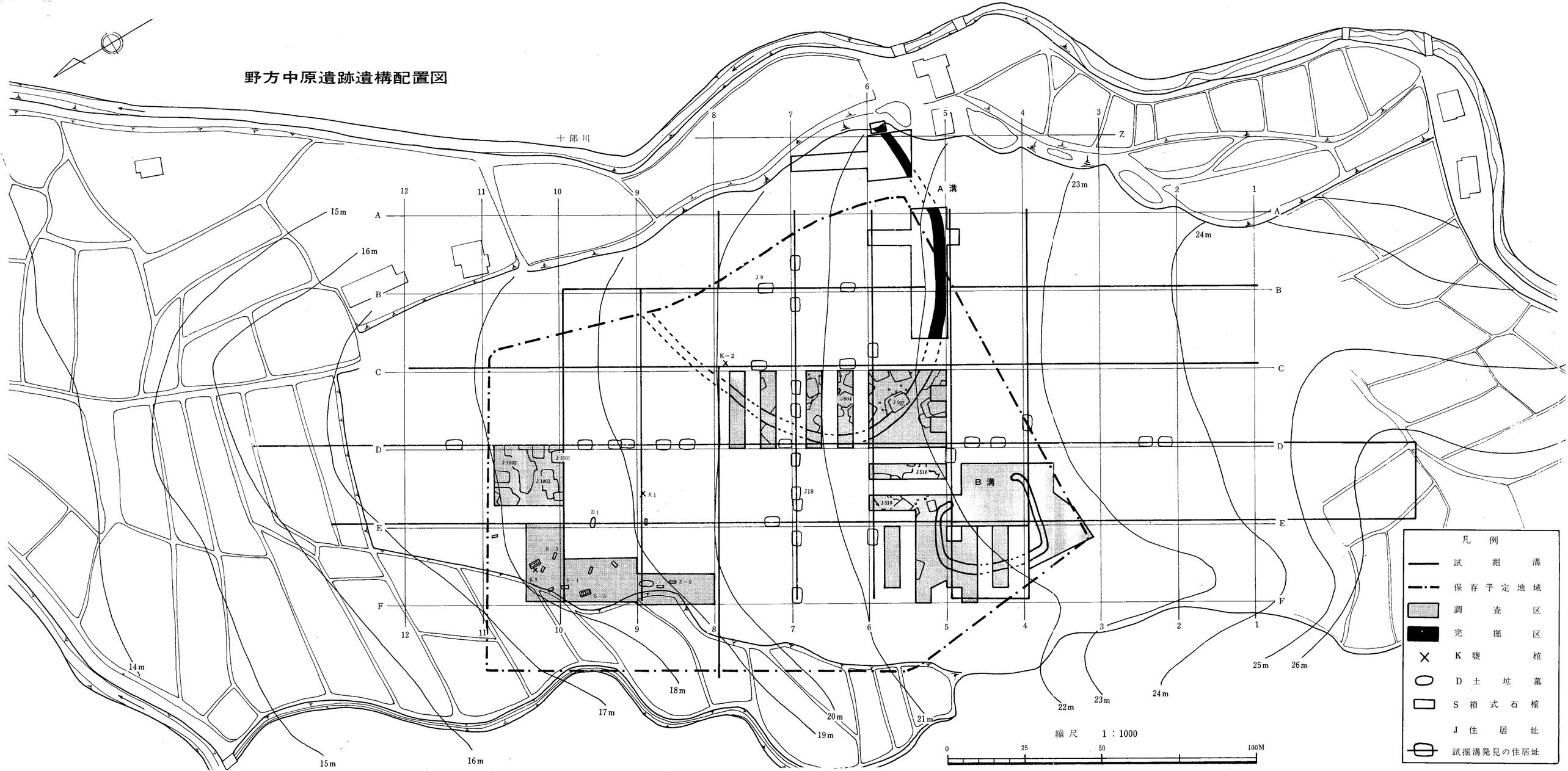
野方中原遺跡

遺構配置図

縮尺　1：1000

1974年3月

福岡市教育委員会文化課

福岡市教育委員会
No. 16984
1. 10. 15
1/3
埋蔵文化財センター

野方中原遺跡遺構配置図